

人類学博物館紀要 第 29 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要

第 29 号

南山大学人類学博物館

2011

目 次

巻頭言

日本先史考古学における編年研究の様相

..... 大塚達朗... 1

南山聖堂古窯址出土遺物に関する再報告

..... 伊東亜紀... 27

ショーテン諸島のアウトリガーカヌー：

南山大学人類学博物館および沖縄海洋博公園海洋文化館の資料紹介

..... 後藤 明・石村 智... 39

鶴ヶ島市寄贈・今泉ニューギニア美術コレクションについて

..... 後藤 明・中尾世治・如法寺慶大・長谷川真美... 57

インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベーガが見た馬と牛

..... 加藤隆浩... 69

道具の研究を推し進める

——方法論的検討と実践の試み——

..... 坂井信三... 89

生きている世界に気づき、生きなおすための人類学

解説：特別展『道具を回路で考えよう』

..... 山崎 剛・木田 歩... 103

もし博物館学芸員がコトラーの『マーケティング・マネジメント』を読んだら

..... 手塚朋子... 113

巻頭言

人類学博物館のリニューアル

今年から、いよいよ人類学博物館のリニューアルが本格的にスタートする。計画では2011年度に基本設計・実施設計を行い、2012年の後半期に施工にかかる。そしてリニューアルオープンは2013年10月である。

すでに、博物館が入る建物（R棟）はできているが、博物館のオープンが3年後になっているのは単に作業上の問題だけではなく、博物館学的常識として2夏を越す「枯らし」の期間が必要だからである。これをやらないと新しい建物のコンクリートが含んでいる水分やセメントのアルカリ分によって資料が多大なダメージを受けるのである。しかし、昨今の事情はそうしたことを許さず、新築の建物ですぐに開館することが要求されることが多いと聞く。そういう点から、本学が「枯らし」期間を十分に見てくれたことは英断であるといえる。

そして、この期間を使ってわれわれは新博物館の準備にかからなければならないが、実はこの3年という期間は決して余裕のある期間ではなく、この間に展示計画・製作、収蔵プラン、資料の燻蒸、そして移転計画と実に沢山の仕事が待ち構えている。これは覚悟しなければならない。

おそらく博物館のスタッフには、非常な負担となるであろう。しかし、それでもこの仕事は実にやりがいがある仕事である。日本には現在300館弱の大学博物館があるといわれており、それぞれがユニークなものとして注目を集めている。そうした中で、われわれは新しい大学博物館の「かたち」を模索しなければならない。特に、最近では教育活動に注目が集まりがちであるが——そしてそれを否定するつもりは毛頭ないが——、われわれが大学博物館として考えるべきは、博物館という存在の核である展示と収蔵である。この二つに対する力のかけ方は、博物館の教育活動や研究活動を左右するものであるし、何よりもそれこそが博物館を博物館たらしめている要因なのである。

今回のリニューアルは、博物館作りに経験の豊富な丹青社・丹青研究所に設計・施工を委託することが決まっている。われわれとしては、丹青社・丹青研究所に仕事を委託したという感覚ではなく、彼らの豊かな経験と知識を踏まえて、われわれが理想とする博物館に近づけていくためのコラボレーションと捉えている。

南山大学人類学博物館は、今、生まれ変わるのである。

2011年3月
博物館運営委員会委員長
人文学部准教授
黒沢 浩

日本先史考古学における編年研究の様相

大塚 達朗

はじめに

筆者は、小林行雄弥生土器「様式」(以下、行雄「様式」)や小林達雄縄文土器「様式」(以下、達雄「様式」)が有用と思ったことはない。その最大の理由は、達雄「様式」が依拠する行雄「様式」が編年の単位ではないからである。

小論では、山内清男の縄紋土器研究は型式編年研究に基づいて展開された一方で、小林行雄やさらには森本六爾の弥生土器研究は編年研究に基づかずに展開されたことや、弥生土器の編年研究を広く整えたのはその森本や小林ではなく、実は、1970年代の佐原真の仕事であることおよび佐原の仕事の問題点などを考えてみたい。

1. いつまで編年をやるか

1969年に、藤森栄一が縄紋土器の編年研究を念頭におきながら、「いつまで編年をやるか」と題した文章を著した。藤森は、「日本原始の時代の編年操作に決定的な体系づけは完了したとっていい。……編年学は確かに行くところまで来たわけである」(藤森 1969:1左)と述べて、森本六爾の仕事为例にあげて、それに倣ってそろそろ編年以外のことに取り組むべき時期ではないかと主張した。これに対しては、佐原真が、「いつまで編年をやるか、と問われれば、考古学の続く限り、と答えよう。縦に横に編年表をますます充実させながら、考

古学本来の目標をはたしてゆくのだ」(佐原 1972:6左)と反論した。筆者が両者の主張を最初に読み比べたのは、1980年代はじめのころであった。すでに、佐藤達夫(1974)に倣って縄紋土器研究を開始して、草創期や後期・晩期の土器型式編年に関していくつか拙文を草したころであっただけに、当然ながら、佐原の主張の方に自明の理があると思った。

「縦に横に編年表をますます充実させながら」の件を読んだ時に想起したのは、著名な山内論文「縄紋土器型式の細別と大別」(1937)であった。弥生土器研究者である佐原までもが細別と大別を尊重していることから判断して、細別方針が日本の先史考古学全体の方針になっていたのか、と単純に受け取った。

1980年代はじめのころは、そのようなことが筆者の感想であったが、最近必要があって佐原(1972)論文を読み直して、藤森への反論に続けて、佐原が「弥生土器の編年作業は各地で進行しつつある。しかし、その原理は決して共通なものではない」(佐原 1972:6左)と述べたことがあらためて目にとまった。というのも、弥生土器研究では編年作業に関して「決定的な体系づけは完了した」とはいえないことを、1972年の時点で、佐原が認めたことになるからである。また、その当時、佐原からみれば、「全国的時期区分の統一的呼称」が未

完成であったわけで（佐原 1972：8 右）、つまり「縦に横に編年表をますます充実させながら」、全国的に共通した大別を仕立てることが未完成だというのであった。なお、「縦に横に編年表をますます充実させながら」ということが、山内の細別方針に相当するわけである。

佐原は、1975 年に、「弥生時代をさらに細別する作業も、縄文時代の場合と同様、土器の研究にもとづいてすすめられている」（佐原 1975：126）と述べた。ここでも、山内の細別方針が背景にある。そして、弥生時代の大別に関しては、三期区分（前・中・後）が常であるが、区分内容は研究者や地方でまちまちで、基準も混乱していることを認めつつ、そこで近畿地方第Ⅰ～Ⅴ様式に着目して、第Ⅰ様式を前期、第Ⅱ～Ⅳ様式を中期に、第Ⅴ様式を後期に当てて、それを全国に敷衍する旨が説かれた（佐原 1975：126）。やがて、1979 年に出された佐原による「弥生土器編年表」（佐原 1979）

（図 1）は、三期区分にではなく、Ⅰ～Ⅴ期の大別に力点が置かれながら、全国的な編年が開陳されたものとなっている。「全国的時期区分の統一的呼称」問題は、一応、Ⅰ～Ⅴ期の大別で解決をみたものとなったようである。

しかし、佐原にとって弥生土器の編年研究に共通した原理は何であったか、という疑問が出てくる。というのも、佐原が依拠する近畿地方第Ⅰ～Ⅴ様式は、そもそも、アジア太平洋戦争中に提示された九州から南関東におよぶ、しかし編年研究ではない「弥生式土器一覧表」（小林（行）1939：111〈第二十九図〉）（図 2）を踏まえた、本当はこれも編年研究ではない「唐古発見弥生式

土器各様式一覧図」（小林（行）ほか 1943：第六十六図）（図 3）に由来するからである。

2. 森本六爾・小林行雄の弥生土器研究

佐原（1972）論文を読み直してわいてきた疑問を解決するために、ここでは、森本と小林の弥生土器研究に遡って検討したい。まずは、森本が“純粹無垢な考古学研究者”という言説が単なる神話にすぎないことから始めたい。たとえば、坂詰秀一は、森本が「脇目も振らずに、考古学一筋の途であった」と以下で明言したが、

森本神話 森本が『考古学』をもって斯界の中心的雑誌にしようと意図したことは、論文・報告・書評・動向に加えて学界消息に意を配っていることによく現れている。そこには、官の学者と並んで在野の研究者の消息が等しく扱われているのである。／また、山内清男が『史前学雑誌』（第 1 巻第 2 号、昭和 4 年 5 月）に論文（「関東に於ける繊維土器」）を発表すると、さっそく『考古学』（第 1 巻第 3 号、昭和 5 年 3 月）にも論文（「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」）が掲載されたことにもその一斑を窺うことができるであろう。／その後、森本は渡欧、そして帰国の後『考古学』の第 6 巻までの編集を担当するが昭和 11 年 1 月 22 日に逝去。この間、「満洲事変」が始まり「満洲国」の建国宣言、「国際連盟」脱退など、わが国をとりまく国際環境は激変の途をたどるが、それらについての記事はまったく見ることができない。脇目も振らずに、考古学一筋

の途であった。(坂詰 1997: 49)

残念ながら、それは全く誤りであるといいたい。坂詰の言説に類した妄言を払拭するためにも、森本が考古学研究を通じて「脇目も振らずに」満洲国支持であったことをはっきり説明することにする。森本が、弥生土器研究の回顧と展望を話し合う座談会(1933年11月20日、新宿中村屋にて[森本ほか 1934a・b])で、弥生土器の南満洲起源を堂々と論じたこととその際の質疑応答を編集し直して以下に示す(質問者は後藤守一、八幡一郎、柴田常恵)。

【座談会】：森本 現状では朝鮮半島を考えるよりも、僕は寧ろ南満洲(満洲国の所在地：引用者註)や山東(1927～28年かけて北伐阻止の名目で3次にわたる日本軍の出兵がおこなわれた：引用者註)あたりにより多く関心を持った方が面白いだろうと思いますね。／森本 弥生式文化からいえばあちらの方南満洲を考え、こちらの北九州をとりあげ次に朝鮮(日本の植民地：引用者註)を考えたら問題の解決は一つの方向を示しやしないかと思います。／後藤 そうすると弥生式土器のオリヂンが南満洲にあって南に伝わる時には朝鮮に於ては朝鮮化し、日本に移るならば日本式になると云うんですか？／森本 そんなものでしょうね。殊にそれぞれの土地で大量に製作されますとね。／八幡 森本君、弥生式には色々の形式ありますね。それを年代づけるのは可能ですか？／森本 弥生式の文化が伝播の形に於て強く特

に彫り出されているならば文化的時期を文化的環境の形で把握出来ましょう。言い換えれば時間をば距離や広さに置き換え、答えを求める事が出来るでしょう。／柴田 どういう事だろうな。／森本 其の結果地域の様式が出来ます、それが即ち、やがて年代的の様式になります。／森本 北九州から瀬戸内海沿岸、大阪湾沿岸、伊勢湾沿岸等々と云う順序に文化の伝播を把握出来ましょう。(森本ほか 1934b: 127中-129中)

森本は、以上のように、弥生土器が南満洲起源で、日本列島へ伝播し、列島内では北九州を起点として東漸したと述べたのである。その南満洲には、傀儡国家満洲国が1932年に建国された。当時、帝国の「生命線」とされた南満洲の確保は当然と信じる日本人が大多数で、森本は、南満洲に弥生文化の起源地をみいだし、それによって大陸・南満洲と日本内地とのつながりを肯定する視点を提供して満洲国を文化史的に正当化したといえるのである。つまり、森本は、満洲国支持のために、南満洲を弥生文化の郷土とみなしたのである。森本の“善良なる帝国臣民”ぶりが分かるであろう。

つぎは、森本(1936年死去)の様式論の顕彰と継承(小林(行)1935)を踏まえて開陳された、小林による弥生文化の賛美を検討する(小林(行)1938)。

小林は、1938年に、つぎのように叙述した。

弥生文化の賛美① 東亜の大陸に湧き
昂まりつつあった文化の新なる動力

は、ついに溢れ出でて海を隔てたこの国土にも流れ入って来たのである。金属の知識と農耕の習俗と、そこに醸成せられる新しい秩序と、これらの上に輝かしくも稚き国家の体制は着々として組立てられて行ったのであって、その間の物語は詠ずればまことに紀記神代巻一篇の詩篇ともなるであろう。考古学者の取扱わんとする弥生式文化なるものもまた、畢竟こうした流伝の姿にほかならないのである。(小林(行) 1938: 214 上)

小林は、縄紋文化の終焉のころに(小林も森本と同様に、縄紋文化と弥生文化は全く別文化とみなした[小林(行) 1938: 214 上])、弥生文化の伝来を通して金属器と農耕がもたらされさらには国家体制がもたらされたと述べたわけで、いわば文明の恵みの伝達を弥生文化に託し、さらには「その間の物語は詠ずればまことに紀記神代巻一篇の詩篇ともなるであろう」と述べ、記紀神話と考古学的所見が融合する道筋を導出した。続いて小林は「ありし日の弥生式文化人」を讃えて以下のように述べた。

弥生文化の賛美② 打下す一鋤一鋤に
豊葦原瑞穂国と呼ばむにもふさわしき
国土を作り上げたのは将にこの人々で
あった。これを新しき国土創成といわ
ずして何と呼ぶべきか。(小林(行)
1938: 214 上下)

1937年に勃発した盧溝橋事件で、大日本帝国と中国は全面戦争に突入した。小林が弥生文化を謳いあげた1938年をみれば、

日本国内には瑞々しい稲穂が実るところか、戦時下にともない食糧事情がきわめて悪化していたのが歴史的事実である。それにもかかわらず、文明の恵み・稲穂の恵みをもたらした輝かしい弥生文化が語られたのであった。小林の賛美を今読めば実に空々しいが、日本国の国土創成にまで至る弥生文化の原郷土が「東亜の大陸」(南満洲より広い範囲が想定されていることに注意)であることから、日本から「東亜の大陸」に人びとが向かうことが一層文化史的に正当化されたことに、私たちは気づくべきである。金属器・農耕・国家・記紀神話をセットにして物語る小林の姿勢は、森本以上に帝国の国策遂行に迎合した姿勢といわざるを得ない所以である。

ここでまとめておこう。森本は、弥生土器の南満洲起源と日本への伝播・列島内の東漸を謳い、弥生文化の起源地というつながりを南満洲にみいだして、考古学から満洲国を正当化した。森本を継承した小林は、縄紋文化の終焉のころに渡来し国家建設にまで到達した弥生文化を、金属器・農耕・国家・記紀神話をセットにして物語る論法と昂揚した筆致で描いた。森本と小林の叙述によって、弥生文化の原郷土が南満洲あるいは「東亜の大陸」であることから、日本から大陸へ人びと向かうことが文化史的に正当化されたのであった。何故ならば、日本の原郷土である大陸に赴くことは、今そこにいる住民との間に軋轢は生じるかもしれないが、原郷土である故に出向くことには権利根拠があるという正当化の文脈を生じさせたからである(大塚 2009、2010b)。そして、そのような歴史的使命を帯びた弥生文化の伝来と東漸は、森本と小

林にとっては、一連の出来事として捉えられた点に特徴がある訳で、つぎに、その東漸の方はどのように語られたのであろうか、検討したい。

3. 東漸する「様式」

森本や小林が東漸の叙述ツールに用いたのが、壺と甕が一体となった弥生土器「様式」であった。そのことに関しては、1934年の森本論文「弥生式土器に於ける二者一様式要素単位決定の問題一」が有名であるが、ここでは、「様式」が何であるかと最古の弥生土器が遠賀川式土器であったことの理屈を、同年に出された「筑前藤崎の弥生式土器」から確認しておこう。ちなみに、「飾らぬ・汚き単粗な器形をもつ A 型土器」とは「深鉢形・甕形を代表的器形」とするもので、「飾らるべき土器としての B 型土器」とは「壺形を代表的器形」とするものであった（森本 1934a：4）。

遠賀川式土器 所で飾らるべき土器としての B 型土器は果して縄文式土器に似る所を持つ土器であろうか。ここに述べた藤崎の土器だけを例にしても、人はその凡そ似ない土器であることを認めるであろう。此の B 型土器（飾った土器）と飾らぬ・汚き単粗な器形をもつ A 型土器との 2 つの姿を持って単一の性質とする遠賀川式土器は、又その特質によっても縄文土器に似ない性質の土器である。……しかし吾々は別に、遠賀川式土器は縄文土器と異なるが故に北九州での、又日本での、古い弥生式土器として、其れに古さを与えるのである。（森本 1934b：

26-27）

森本にとって、南満洲起源の弥生土器は、由来を異にする縄紋土器と時代が重なることと弥生土器が縄紋土器に影響を与えたことを前提に（森本 1932）、㊦壺と甕で一体になることと㊧縄紋土器に一番に似ていないことを根拠に（換言すれば編年研究を根拠にしたのではなく）、遠賀川式土器が最古の弥生土器となるのであった。そして、この遠賀川式土器が東漸することの具体相が先に紹介した座談会で開陳された次第で（「森本 北九州から瀬戸内海沿岸、大阪湾沿岸、伊勢湾沿岸等々と云う順序に文化の伝播を把握出来ましょう」）、編年研究とは無縁の理屈で東漸の起点が決められて東漸が語られたのであった。

つぎに、「様式」が非等価・大小さまざまであったことは、つぎの小林発言から確認しておこう。

様式① 様式現象は大きくも、又小さくも現れる。（小林（行）1933：237）

様式② さて個々の地域における様式の消長として別々に取上げられた弥生式土器の変遷を、一つの全体との関連において見かえす時、それが土器をかく変移せしめた文化自身の推移による必然的な規約に従ひつつも、なお地域を異にすることによって表現を異にすることの自由さが注目せられる。（小林（行）1939：110）

「様式現象は大きくも、又小さくも現れ」、
「地域を異にすることによって表現を異に

することの自由さが注目せられる」というのが、「様式」が大小さまざまであることの謂である。『弥生式土器聚成図録正篇解説』の「弥生式土器一覧表」(図2)をみれば分かるように、各地の「様式」が大小さまざまな四角形で表現されていた。しかし、図2をみれば、当然ながら、土器資料からどのような操作をしたら「様式」が四角形のヴァリエーションで表現できるようになるのであろうか、という疑問がわく。さらに、図2と唐古遺跡の報告書に附された「唐古発見弥生式土器各様式一覧図」(図3)の関係も大いに気になるところである。これらの問題解決のためには、山内の仕事を批判する小林の理屈(小林(行)1943)から考えてみたい。

小林は、1943年に、中谷治宇二郎著『石器時代提要』(岡書院、1929)の校訂本が刊行された際、縄紋文化が日本列島に存続した時代に他の文化は存在しなかったと説く山内清男の縄紋文化観(山内1929、1930、1932a~f、1933、1937、山内ほか1936)と研究方針(山内1937)には賛同できないことを明記した論文を寄稿した。

山内清男批判① まだ縄紋土器の編年的研究が十分に行われていない地方の研究に当ろうとされる方に希望して置きたいのは、最初から関東・東北などに対抗して、その様に二十も三十もの土器型式を見出してかかろうと試みたり、或はどの地方でも関東などと同じ過程、同じ段階の変化がそっくりそのまま見られるべきものだと考えることは間違いだという事である。(小林(行)1943:369)

山内清男批判② 各地域において先ず自主的な研究が遂行せられねばならないのであって、諸君が若しその道に進もうとされるのであれば、どうか功名を求めて自己の説を立てるのに急ぐという様な事なく、真に学問の為に、謙虚な態度で一貫していただき度いのである。(小林(行)1943:370)

小林が「どの地方でも関東などと同じ過程、同じ段階の変化がそっくりそのまま見られるべきもの」と考えることを「間違い」と断言したことは、小林が、山内が説く縄紋文化(大陸からは孤立して列島全体に同様の生成・展開を示す土器文化)を受け入れがたいために、そして山内の研究方針(細別と大別)を認めがたいために、山内の縄紋土器研究を否定したという意味で、学史的に看過できない重大発言である。というのも、「どの地方でも関東などと同じ過程、同じ段階の変化」がそっくりそのままみられるのは、筆者からみれば(大塚1996、2000)、山内の縄紋土器型式がみな等価・同じものであるからであって、換言すれば、型式が等価・同じものとみなしたからこそ、「地方差、年代差を示す年代学的の単位」(山内1932a:41下)となり得たのであるが、小林がそのような捉え方はしていなかったことが分かるからである。かつ、「様式」が非等価・大小さまざまと考える小林の立場(様式①様式②)に全く変わりがなかったということを意味するからである。ということは、1939年の「弥生式土器一覧表」(図2)が大前提となって、1943年の「唐古発見弥生式土器各様式一覧図」(図3)があったとみるべきなのである。

小林は、各地域の様式が非等価・大小さまざまであることを前提にして、大陸からの伝播・列島内の東漸が見込まれた非等価・大小さまざまな「様式」の布置（図2）を自明視したのである。各地の「様式」に新古の判断・同時性の判断を加えること、つまり編年研究を経て「弥生式土器一覧表」（図2）が出来上がったのではなく、大日本帝国の国策遂行に関与していること（「東亜の大陸」に赴くことの文化史的正当化）が、小林が抱く「様式」布置に根拠を与えらるという構図になっていたのである。

小林の弥生土器研究は、何から何まで、山内の縄紋土器研究（過去の究明に向かうもの）とは違ったことを私たちは理解する必要がある。私たちが正しく理解すべきことは、小林の「様式」（図2）は縦横に比較可能な編年の単位ではなかった、ましてや、「唐古発見弥生式土器各様式一覧図」（図3）は編年研究ではなかった、ということである。既述した通り、小林の「様式」（図2）は、四角形のヴァリエーションで表現され、特に北九州の「様式」がみな正方形で表され、それ以外の地域の「様式」はみな長方形など非正方形で表されたが、四角形のヴァリエーションによる表現が土器資料の分析から導き出されることは絶対にあり得ない。大陸からの新来文化の渡来地域を北九州に想定し、新来文化である弥生文化が北九州を起点として列島内を東漸する物語（「金属の知識と農耕の習俗と、そこに醸成せられる新しい秩序と、これらの上に輝かしくも稚き国家の体制は着々として組立てられて行った」〈＝「東亜の大陸」に赴くことの文化史的正当化〉）を前提に、それに対応させて、起点地域となる北九州の「様

式」を正方形で表し、東漸先各地の「様式」を長方形で表すものであったといわざるを得ない。それらの面積を比較すると、北九州の各「様式」が大きな正方形で表され、東漸先各地の「様式」が小さな長方形で表されていた。さらには、アルファベットで順番付けされる「様式」もあって、形もまた違って、さらに複雑である。これら「様式」を通じて弥生文化の生成、すなわち正系・亜流・傍系などの展開を区別するのに正方形・長方形が用いられたのである。

このように、「様式」が正方形・長方形などで大小さまざまであること（図2）は、土器資料から帰納されたことではなく、東漸を語るために大小さまざまであることを前提としたためなのである。「様式」は、過去に託けて現実（大日本国の国策遂行）を追認あるいは正当化する叙述ツールであって、図2・図3は、編年という考古学に不可欠な作業とは無縁な内容と論断せざるを得ない。

4. 山内清男の対応

私たちは、大日本帝国の国策遂行を後押しする運動を直接的には批判できない当時の思想弾圧状況を思い起こす必要がある。そのような戦時状況下、山内は、森本や小林の研究動向に対してきわめて慎重に対応した。まず、森本や小林が利用する、過去に託けて現実を追認し正当化する叙述ツールである「様式」に科学的な意味などあるはずがないからこそ、編年研究（新古の判断および同時代の判断）のための型式と東漸論のための「様式」との違いが分かるように、1937年に、先史考古学の方法上の問題提起（細別と大別）を為し（山内

1937)、大別として亀ヶ岡式とそれに並行する各地の土器型式をまとめて新たに晩期を設定し(図4)、その晩期の設定によって(早期も設定され、あわせて5大別となった)、

縄紋式末期 縄紋式の末期、東北地方では亀ヶ岡式土器が一般的ですが、この影響と思われる土器やその他の遺物が関東にも、中部地方にも、畿内にもある。それから未だ確実ではないが、もう少し向う迄行って居るらしい形跡がある。これらは皆その地方に固有な末期の縄紋式に伴ってるのです。決して弥生式とか、古墳時代に属しては居るのではない。だから東北の石器時代の縄紋式末期即ち亀ヶ岡式に併存し、交渉を持ち得たものは、関西の弥生式でも古墳時代でもない。矢張縄紋式、この地方の末期の縄紋式であることになる。(山内ほか 1936:36下)

という前年の著名な発言(いわゆるミネルヴァ論争の発端となったもの)の趣旨徹底を図ったといえる。ちなみに、縄紋文化は大陸から孤立して発達し、その縄紋文化の終わり頃(晩期:亀ヶ岡式および並行型式)であっても、亀ヶ岡式精製土器が各地に移入され、あるいはさらに模倣されたことから(「亀ヶ岡式土器の系統的発達が奥羽に於て行われたことに間違いないとすれば、関東及び中部地方の同式又は類似の土器は、この地方から器物として輸入されたか、或はその上模倣されたものと考えられる」[山内 1930:155])、縄紋文化を担うよく似た地方社会が日本列島各地に広がってい

たのであって、日本列島の西方ではすでに弥生文化の社会になって、列島の東方ではまだ縄紋文化の社会が残ったということもあり得ない、というのが山内の歴年の主張であった。

残念ながら時局の推移から判断して、過去に託けて現実を正当化する考古学を打破することは困難と考えた山内は、1939年に思い切った行動に出た。かつて著した「日本遠古之文化」(山内 1932a~f, 1933)をまとめて『日本遠古之文化』(補註付・新版)を刊行し(山内 1939e)、あわせて、編年のための単位ではない「様式」との違いが分かるように、「層位と型式」を実践した上での編年単位である型式群を解説する『日本先史土器図譜』(1~12)の刊行を開始して(山内 1939a~d, 1940a~e, 1941a~c)、読者に判断を委ねた。山内は、『日本遠古之文化』の補註中で、すでに死去した森本にのみ慎重に批判を加え、小林を直接批判することは回避した(理由はあえて述べる必要はないであろう)。そして、時局一層の悪化の中、1942~45年の間は、山内は何も発言しなかった。だがしかし、1945年に大日本帝国が瓦解すると、山内の研究が、さっそくパラダイム化した状況を、つぎにふりかえてみたい。

5. 敗戦後の学問状況

1952年、愛知県渥美半島・吉胡貝塚の報告書報文の中で、山内は縄紋晩期を総括した。そして、当該書では、山内の晩期研究をかつて蔑ろにした者の一人後藤守一が、自己批判を表明した。山内の研究がパラダイム化した状況がよく分かるので、山内の総括と後藤の自己批判を以下に引用してお

く。

縄紋晩期の総括 縄紋式晩期は東北地方の亀ヶ岡式土器とこれに並行する各地の土器を指すものである。昭和初年、亀ヶ岡式又は近似の土器が、関東地方、三河方面を含む中部地方の各地に発見されることが、新しく注目された。そして後には畿内にさえ見出されるに至った。……亀ヶ岡式土器が東北において発達し、その発達の各段階において、他の地方に輸出され、そこで模倣されたという見解の妥当性は認められていった。亀ヶ岡式を輸入し模倣した地方の土着の土器の性質が問題とされ、関東地方では安行式の後半の型式が、これに当り、abcの三型式に細分されるに至った。一方中部及畿内地方では無紋又は條痕の多い粗製土器を主体とする型式が考えられ、更に亀ヶ岡式の伴存は見られないが、この種の土着土器と同様又は近縁のものが中国・九州地方にも存在することが明らかとなった。かくして亀ヶ岡式とこれに並行する型式が九州に至るまで存在することが可能となると共に、晩期なる名称がこれら一連の土器に加えられ、後期から分割されたのである。(山内 1952 : 119)

後藤守一の自己批判 縄文式文化の次に弥生式文化がくるとして、二者がどう接触したかということとは従来も問題となっていたが、最近山内清男君が前から説かれていたように縄文式土器が大体に終って弥生式土器の時

代となるということが漸次に明らかになるし、しかもその終末期又は終末期に近い頃の縄文式土器が弥生式土器の母胎となっているものもあることが考えられることになった。自分は固より縄文式文化研究では門外者であったに拘わらず、曾ては座談会とか又は他の機会に盲目蛇におじずに山内君の所説に意義を申立てたこともあり、今日では汗顔に堪えない次第と思っている。

(後藤 1952 : 158-159)

いま引用した山内の総括を慎重に読めば、亀ヶ岡式精製土器を優品(模倣するにふさわしい一品)として高く評価する価値体系が日本列島に広く存在したこと、その優品ないし模倣品を必要とする社会体制が日本列島に広く存在したこと、その優品ないし模倣品を使用する環境が日本列島に広く整っていたことの三点(大塚 2010b)を山内が周知させようとしたものといえよう。このことから、社会考古学的な分析(亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論 [大塚 2007、2010a・b])として、縄紋文化を担うよく似た地方社会が日本列島各地に広がっていたことがうかがえるのであって、日本列島の西方ではすでに弥生文化の社会になって、列島の東方ではまだ縄紋文化の社会が残ったということとはあり得ない、という山内の歴年の主張の根拠が、公の刊行物で初めて掲載されたと受け取るべきなのである。

山内の縄紋土器研究は、縄紋土器型式編年研究(細別と大別)と社会考古学(例、亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論)の二方面性を有していたが、残念ながら、今日にて

も社会考古学の面はほとんど理解されていないようである。そのために生じた誤解（小林(達) 1975、田中 1978 など）は、後述する。

ではここで、アジア太平洋戦争中、公然と敵対していた小林行雄の 1945 年以後の動向を述べたい。吉胡貝塚の報告書刊行の 1 年前、1951 年に著した『日本考古学概説』では、「特に縄文式時代については、山内清男氏の提唱に従って、その他に早期・晩期なる 2 時期を、3 期（前・中・後期：引用者註）の前後に設けて解説を進めたいと思うのである」（小林(行) 1951：13）と述べ、山内の 5 大別（山内 1937）を採用した。ただし、小林の場合、山内の見解（「縄文式の終末は地方によって大差ないと見なければならぬでしょう」）に賛同する側にまわったわけではなく、ミネルヴァ論争で山内と争った喜田貞吉の立場と小林が同じ立場であったことを確認したい。あいかわらず、日本列島に同じ文化階梯が一様に広がるとは考えないことが、1945 年以降も表明されたのである（以下参照）。

小林行雄の根本的立場① 新しい時代の型の文化がすでにある地域にはじまっている時に、同じ日本の他の地域では、なお古い時代の型の文化のみが栄えているということはあるであろう。（小林(行) 1951：13）

しかも、それに付した註 6 で、山内と論争した喜田貞吉の立場の方を小林は支持した（小林(行) 1951：261 下〈註 6〉）。とはいえ、アジア太平洋戦争中、森本六爾と連携して大日本帝国の国策遂行を後押しする

ために、大陸からの新来文化として弥生文化を語る際に金属器・農耕・国家・記紀神話をセットにして昂揚した筆致を振るう小林の姿勢（1938）は、敗戦後はあからさまではなくなったようである。しかし、縄文文化より弥生文化を高く評価する姿勢を放棄したわけではないことは、つぎの引用から分かる。

小林行雄の根本的立場② もちろん今日では弥生式文化のことごとくが、新しい移住者のみの手によって経営されたというような考え方（小林 1938：引用者注）は成立する可能性が乏しいが、弥生式文化の興起するためには、その主導者として縄文式民族とは異った移住者の、ある程度の量を想定することまでも否定されたわけではない。（小林(行) 1951：87）

あくまでも、「縄文式民族とは異った移住者」が渡来し弥生式文化の興起を主導したことにこだわったのであるが、アジア太平洋戦争中、縄文土器と弥生土器は全く系統関係がないと森本六爾と一緒に主張していたことから判断すると、縄文土器から弥生土器への連続的な推移（山内清男の創見）に近い内容を説くのであるから、土器研究においては表面的には意見を修正したといえよう（それが疑わしいことは後述）。

縄文土器と弥生土器 土器の研究が著しく進展して、両種の土器自身の中における変遷が強く留意せられるようになった今日では、縄文式土器の中にすでに弥生式土器を生み出す素因が考え

られ、弥生式土器の中に縄文式土器の伝統の残存が認められなどするので、縄文式土器にはまったく見ることでできない弥生式土器の特徴などというものを、従来のようにはっきり取り出して見せることが困難になった。(小林(行) 1951: 130)

山内に全面的に敵対していた小林の動向を1951年の著作から検討した。敗戦にともない自身の立場変更を余儀なくされて、それなりの見解の修正はあったようにみえる。しかし、小林のミネルヴァ論争における喜田貞吉の立場支持と弥生文化の主導者観をみれば、最も根本的な立場を変えなかったことが分かる。

実は、『日本考古学概説』の記述の特徴は、本文では山内の所説に賛同した旨を説くかの如くではあるが、註ではむしろアジア太平洋戦争中の自身の主張を参照する旨を説くことが多々あった。既述したミネルヴァ論争における喜田貞吉の立場支持はその好例であるが、他には、「弥生式土器の各様式」に関しては、あくまでも『弥生式土器聚成図録正編』が参照すべきものとして挙げられていた(小林(行) 1951: 286上〈註4〉)。筆者が、小林の立場変更を表面的と説く所以である。

と同時に、あくまでも『弥生式土器聚成図録正編』が参照すべきものとして挙げられていた以上、小林が東漸する非等価・大小さまざまな「様式」を放棄していないとみるべきなのである。あいもかわらず、『弥生式土器聚成図録正篇』の解説の「弥生式土器一覧表」(図2)が大前提となって、唐古遺跡の報告書に附された「唐古発見弥生

式土器各様式一覧図」(図3)があり、1945年の敗戦後も、本音では、伝来と東漸の物語を否定せず、山内的な編年研究の意識や意図はなかったのである。

6. 達雄「様式」の問題点

行雄「様式」が編年単位であるとの誤解や、図3が編年研究であるとの誤解は、あとを絶たない(例、横山 1985、寺沢・森岡 1989、設楽 1996、都出・伊藤 2005など)。そのような誤った動向が膨張するその契機は、1975年に出された小林達雄の提案だと考える。

小林(達)は、山内にとっては型式が概念および用語としての唯一のものであって、様式・形式・型式の三つの概念を用意する弥生土器研究の立場と対照をなすとみなして、

小林(達)の提案 縄文土器の実態を型式の1概念で解き明かすには、あまりに複雑・変化が多い。一体かたちの実態は、もともと形式と型式の概念の用意なくしては把握しきれものではないであろう。この意味からすれば、縄文土器の研究は、少なくとも弥生式土器における概念構成を導入してゆくことが必要と考えられる。(小林(達) 1975: 59)

と提案したが、この提案を時代背景とともに分析すると、三つの問題点が指摘できる。

- (1) 山内の型式が編年のために等価な単位として扱われたことと、行雄「様式」が東漸論のために非等価で大小さまざまな扱いであったことを弁え

ていなかった、つまり、型式と「様式」間に互換性がないことを全く分からなかった。

- (2). 山内流の“縄紋土器→弥生土器”の理解（縄紋土器と弥生土器間には系統関係がある）と全く別の、小林(行)流の“縄紋土器／弥生土器”の理解（縄紋土器と弥生土器間には系統関係がない）があることを弁えていなかった。
- (3). 著名な「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」（山内 1930）が型式編年研究でありかつ社会考古学研究でもあったことが理解できなかった結果、縄紋土器型式は、編年のための単位（その場合は、製作・形態・装飾の同一性が問われる）として扱われると同時に社会考古学の探求ため（その場合は、器種〈深鉢、浅鉢など〉と類型〈精製、粗製など〉）に着目する：例、亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論）であったことが、視野に全く入っていなかった。

要するに、小林(達)は、山内が説く縄紋土器と縄紋土器型式の全貌を正しく把握できないままに、かつ、弥生土器研究史を踏まえずに、縄紋土器と弥生土器は全く関係ないことを明らかにするために進められた、ひいては、「東亜の大陸」に赴くこと（侵略戦争）の文化史的正当化のために進められたアジア太平洋戦争中の弥生土器研究に従おうと提案してしまったことになるのである。

残念ながら、小林(達)の学史的理解不足がそのまま田中琢に引き継がれてしまった結果、典型的な誤解が生まれた。

典型的誤解 山内清男は「縄文土器研究においては、一時期に属する文物の一群とは、土器型式にあたる（したがって、土器の形態、文様、文様のつけ方、製作技術などの面で一致している一群に、一つの土器型式があてられる）。その土器型式にはまた多少の器種があり、さらに、いくつかの類型（カテゴリー）に分けられる」と規定している（山内清男「縄文文化の社会、縄文時代研究の現段階」『日本と世界の歴史1 古代、日本』1969）。この「型式」は、弥生土器研究では、小林行雄の様式にほぼ一致するものだ。（田中 1978:21）

山内の型式について、「この『型式』は、弥生土器研究では、小林行雄の様式にほぼ一致するものだ」と、田中は述べてしまった。この発言（山内の型式≡小林(行)の「様式」）が、小林(達)の誤りに輪をかけた誤りなのである。

再説するが、田中が引用した山内(1969)論考中の縄紋土器型式の器種は深鉢、浅鉢などで、類型は精製、粗製などで、器種と類型は社会考古学的探求（例、亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論）のためであった。田中も、小林(達)と同じく、編年の単位としての型式（製作・形態・装飾上の同一性）と社会考古学のための型式（器種と類型）と一緒に縄紋土器研究で利用されてきたことが分からなかったのである。

7. 佐原真弥生土器「様式」編年研究の意義と限界

筆者は、行雄「様式」や達雄「様式」が有用と思ったことはない旨を先に述べた

が、考古学的検証を経ない、かつ、編年の単位ではない行雄「様式」と、多くの誤りを重ねた達雄「様式」が棄却されるべきであることは明白である。だが、先ほど、行雄「様式」が編年の単位であるとの誤解や図3を編年研究とみなす誤解があつた例に、横山(1985)、寺沢・森岡(1989)、設楽(1996)、都出・伊藤(2005)などを挙げたが、佐原真の弥生土器研究の仕事が理解されていないことも関係している。

山内の縄紋土器型式編年研究(図4)と似たような編年研究を弥生土器研究にもたらしめたのは、佐原である。佐原は、山内の「日本遠古之文化」という長大な連続主義に依拠して(「弥生式の遺物には大陸系のものが著明であるが、この他に縄紋式からの伝統を保つもの、弥生式に於いて特有の発達を示すものも亦存在するのである」[山内 1932f: 48 上])、弥生文化の体系化を試みた(佐原 1975: 129-137)。そして、資料を連続主義的に把握するために方法上必要なのが、単位や細別と大別であるから(山内 1937)、佐原は、行雄「様式」を単位として利用して、近畿の大別(前・中・後期)と大別内の細別の整理を試み、さらに各地域にて同様の細別と大別を推進し、最終的には5大別(I~V期)でまとめることを企図したといえよう。その結果、佐原弥生土器「様式」編年研究(細別と大別)が、山内の縄紋土器型式編年研究(細別と大別)と似たものとして、ようやく弥生土器研究の中に生まれたといえるのである(佐原 1979)(図1)。図1と図4を比べてみれば、確かによく似ているのである。

1972年の時点では、山内の細別方針である「縦に横に編年表をますます充実させな

がら」、全国的に共通した大別を仕立てることが未完成だったが、「縦に横に編年表をますます充実させながら」ということが進んで、図1に至ったわけである。今現在も、近畿地方の大多数の弥生土器研究者は、自分たちの研究が行雄「様式」に基づくと思込んでいるが、その「様式」は、実際には、佐原が山内縄紋土器型式に倣って単位として扱った佐原弥生土器「様式」なのである。

その間の佐原の仕事(佐原 1967、1968a・b、1969、1972、1975、1976、佐原・田辺 1966など)は、弥生土器における細別と大別の「エチュード」のようなものであろう。だが、行雄「様式」はもともと等価な単位として扱われていないのであるから、しかも、もともと層位的な証明を伴わない「唐古発見弥生式土器各様式」(図3)に由来する近畿地方第I~V様式を、佐原がどのようにして縦横に比較可能な単位に仕立て直したのかは、一連の仕事(佐原 1967、1968a・b、佐原・田辺 1966など)をみても、残念ながら、その過程は判然としないことを指摘する必要がある。

1983年には、佐原の弥生土器編年研究に基づいた書物『弥生土器I』・『弥生土器II』(佐原編 1983a・b)が刊行された。『弥生土器I』の中で、佐原が弥生土器編年の要諦を述べたものを読むと、

佐原真弥生土器編年の要諦 『弥生式土器集成』本編の北九州地方と畿内地方とを比較すると、どちらも第I様式土器から第V様式にまで分けてある。そして、北九州第I様式土器の方が畿内第I様式土器より早く始まったこと

は確かだが、同じ番号でよばれるそれぞれの様式、つまり第Ⅱ様式土器同士、第Ⅲ様式土器同士…は、ほぼ同時存在とみてよい。そこで、弥生文化の中心的地域をなした両地方の土器によって、第Ⅰ様式土器の時期をⅠ期、第Ⅱ様式土器の時期をⅡ期…と仮称し、全国各地の土器もこれに準拠して時期別しようという発案である。(佐原 1983: 7)

存外、当て推量な編年内容であることに驚く。しかも、

佐原の行雄「様式」理解 山内の「土器型式」と小林行雄の「土器様式」の内容はかなり近いものである。(佐原 1983: 12)

と述べたことから判断すると、前記の田中と大差ない認識しか有していなかったことが判明するのである。

どうしてそうなるのかよくよく考えてみるならば、佐原(小林(達)も田中も他の多くの研究者も)は、縄紋土器と弥生土器は同じ審級で定義されたとみなしたからなのである。同じ審級とは、みて確認できる審級である。佐原は、行雄「様式」に慣れているから、壺と甕で一体となったことを弥生土器の真相と考えたはずである。壺と甕の「様式」から即弥生土器へという認識の道筋に親しんだ佐原だからこそ、縄紋土器型式から即縄紋土器へという回路が頭の中で働いたはずで、縄紋土器を誤解した可能性が高いのである。

私たちは、発掘して出てきた土器資料を

単純に縄紋土器とってしまうことがよくある。だが、山内の立場では、それらは、縄紋土器型式であって、ある地方のある時期に属するものであり、しかも、たまたま消滅せずに残った痕跡的なもの、ということになる。その痕跡を、良好な出土状況下で得られた場合に、先史考古学の立場から、相対編年のための「地方差、年代差を示す年代学的の単位」(山内 1932a: 41 下)である型式とみなすのである。層位と型式を駆使して、日本列島に縦横に型式を配置したものを見渡すと、各地には時代変遷がたどれる型式群があり、また、同時代各地には並行する型式があることになり、しかも、文様帯を手掛かりに見通すと、一系統的に変化する縄紋土器が復元できる、と山内は見立てた次第である。

山内が説く縄紋土器とは、大陸から伝来した後は、日本列島外からの影響がなく連続的につまり一系統的に変遷するということ＝縄紋土器一系統説(孤立的世界の言明)が盛り込まれたもの(「縄紋土器は結局我々が想定して居るように一系統の土器だと認められるであろう」[山内 1932a: 40 上下] / 「この年代によっても地方によっても截然と分ち得ない一体の土器が縄紋土器なのであろう」[山内 1932a: 41 上] / 「縄紋土器文化は、対外関係が不明である一方、内部に種々の発達変遷を持って居る」[山内 1932b: 86 上])である。他方、縄紋土器型式(「地方差、年代差を示す年代学的の単位」)は、縄紋土器が地方によっても時期によっても変化がおびただしいその様態の指標なのである。

つまり、編年作業に注目しながら山内の縄紋土器研究をみれば、土器型式編年研究

によって各地でよく似た変化が継起したことをみいだしながら、型式群を貫く一系統性の方は文様帯系統論で説明するという手筈を整えたものであった（山内 1929、1930）。ということは、山内が1930年代に体系的に説いた縄紋土器は、一系統として連綿と続く相同な基体（変化しないもの）と時間空間上の属性（変化するもの）で構成され、その基体は文様帯が担い、その属性は土器型式が担う、という論理形式、すなわち縄紋土器＝文様帯〈基体〉＋型式〈属性〉になっていたのである（大塚 2008）。

ここで肝心なことは、山内の縄紋土器型式は知覚できる存在（みて確認できるもの）だが、一系統的に変遷するところの縄紋土器は山内が説く理論的存在（みただけではそれとは分らないもの）ということである（大塚 2010c）。それを踏まえて、筆者がさらに指摘したいのは、細別と大別（縄紋土器型式編年研究）だけで縄紋土器研究が全うされたわけではない、ということである。しかも、文様帯系統論とは別に、みただけではそれとは分らないものをいいあてるために実施したのが、縄紋社会を探るための亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論（大塚 2007、2010a・b）といえるであろう。

山内の先史考古学研究の神髄は、みて確認できるものからみただけではそれとは分らないものまで、さまざまな審級での究明を試みたことである。佐原（のみならず多くの研究者）は、理論のないし方法的視野が山内ほどには広くはなかったために、それが理解できなかったのである。残念ながら、日本考古学において、今も山内が試みたことの奥行きが理解されていない状況が続くのである。

おわりに

藤森栄一（1969）提案は、文字通り噴飯物であった。それを批判した佐原真（1972）は、藤森を批判する限りにおいては、全く正しかった。しかし、佐原は、山内清男の説く縄紋土器型式編年研究が何であったかがよく分からなかった。そして、そもそも、山内の説く縄紋土器が何であったかがよく分かっていなかったといわざるをえない。佐原の尽力には敬意を表すが、佐原は、東京考古学会の領袖森本六爾や随伴者小林行雄が実践した弥生土器研究と山内の縄紋土器研究とが何から何まで異なっていたことを正しく弁えずに、細別と大別（縄紋土器型式編年研究）を表層的に弥生土器研究に当てはめたに過ぎないのであった。

今日、日本考古学界をみわたすならば、編年研究に重きを置くどころか、藤森の提案と同趣な編年研究を軽視する発言があいかわらず続くが、過去を探求するために何から出発しどこまで行けるのか、その手続きをめぐって、もう少し冷静に議論がなされるべきであろう。

考古資料＝痕跡的で断片的で匿名的な資料を駆使して過去を認識しようと試みるのが考古学ではあるならば（大塚 2007）、たまたま腐らずに残った痕跡的で断片的で匿名的な物的資料は、みただけではそれとは分らないのであるからして、理論と方法を工夫して資料に臨む必要がある。そう考えると、佐原がおこなった弥生土器「様式」編年研究は、それまでに編年研究に値するものが希薄であったことの反省を踏まえた点では有意義ではあるが、みて確認できるもの（壺、甕など）だけに分析の審級がとどまり、過去へのアプローチを単純化して

しまったといわざるを得ない。しかも、佐原が、食料採集を基本とする時代を縄紋時代と定義して、縄紋時代の土器を縄紋土器とよび、食料生産を基本とする時代を弥生時代と定義して、弥生時代の土器を弥生土器とよぶことを真顔で提案するのを読むと（佐原 1983:4）、小林達雄や田中琢にみられる学史的な錯認とはまた別の錯認（考古学の単純化）が生まれてしまったことを指摘せざるを得ない。

佐原に顕著に現れた、みて分かること（たとえば壺、甕など）にしか目が向かない弥生土器研究の欠点が何かは、考古資料の特性（痕跡的で断片的で匿名的な資料）に鑑みれば、これ以上述べる必要はあるまい。逆に、みて確認できるものだけでなく、みただけではそれとは分からない審級のものをいいあてようとした山内の研究姿勢は、考古資料の特性に鑑みれば、原理的に有意である。佐原のみならず多くの研究者は山内の研究姿勢が何であったかを見抜けなかったのであり、今もそのままである。筆者は、そのような先史考古学上の原理・原則を有した山内の研究だからこそ、大いに批判的にみるべきはみるべし、という立場である。

なお、ここでは、筆者自身の山内清男批判（筆者の山内批判の最大のポイントは、山内が説くような一系統的に変遷する縄紋土器はなかった、である）の論点には触れない。詳細は、拙論（大塚 1996、2000、2007、2008、2009、2010a・b・c など）の参照を希って、擱筆する。

引用参考文献

- 大塚達朗 1996「縄文時代 土器—山内型式論の再検討より」考古学雑誌 82(2)、11-25 頁。
- 大塚達朗 2000『縄紋土器研究の新展開』、同成社。
- 大塚達朗 2007「型式学の射程—縄紋土器型式を例に一」『現代社会の考古学』（現代の考古学 1）184-201 頁、朝倉書店。
- 大塚達朗 2008「縄文土器研究解題—山内清男—」『総攬 縄文土器』872-879 頁、アム・プロモーション。
- 大塚達朗 2009「縄紋土器はなかった」『大学の授業を聞きに行こう』255-278 頁、南山大学。
- 大塚達朗 2010a「入組紋の比較考古学—社会考古を展望して—」『比較考古学の新天地』81-91 頁、同成社。
- 大塚達朗 2010b「亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論の再考」南山大学人類学博物館紀要 28、1-28 頁。
- 大塚達朗 2010c「短期編年の縄紋文化」縄文時代 21、1-24 頁。
- 大塚達朗 2010d「小林行雄『様式』も小林達雄『様式』も不要」『東海縄文研究会 第9回研究会 資料集』214-253 頁、東海縄文研究会。
- 後藤守一 1952「調査結果総括」『吉胡貝塚』（埋蔵文化財発掘調査報告 1）158-183 頁、文化財保護委員会。
- 小林達雄 1975「タイポロジー」『総論編』（日本の旧石器文化 1）48-63 頁、雄山閣。
- 小林行雄 1933「先史考古学に於ける様式問題」考古学 4(8)、223-238 頁。
- 小林行雄 1934「一の伝播変移現象—遠賀川系土器の場合—」考古学 5(1)、9-16 頁。

- 小林行雄 1935「弥生式土器の様式構造」考古学評論 1(2)、1-9 頁。
- 小林行雄 1938「弥生式文化」『原始文化』(日本文化史大系 1) 214-253 頁、誠文堂新光社。
- 小林行雄 1939『弥生式土器聚成図録正編解説』(東京考古学会学報 1)、東京考古学会。
- 小林行雄 1943「補遺 土器の編年的研究」中谷治宇二郎『校訂 日本石器時代提要』359-374 頁、甲鳥書林。
- 小林行雄 1951『日本考古学概説』(創元選書 218)、創元社。
- 小林行雄ほか 1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告 16)、桑名文星堂。
- 坂詰秀一 1997『太平洋戦争と考古学』(歴史文化ライブラリー 11)、吉川弘文館。
- 佐藤達夫 1974「縄紋式土器」『日本考古学の現状と課題』60-102 頁、吉川弘文館。
- 佐原 真 1967「山城における弥生式文化の成立—畿内第 I 様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置—」史林 50(5)、103-127 頁。
- 佐原 真 1968a「畿内地方」小林行雄・杉原荘介編『弥生土器集成本編 2』53-72 頁、東京堂出版。
- 佐原 真 1968b「琵琶湖地方」小林行雄・杉原荘介編『弥生土器集成本編 2』73-76 頁、東京堂出版。
- 佐原 真 1969「河内の弥生式文化」河内考古学 3、3-83 頁。
- 佐原 真 1972「1971 年の動向 弥生時代(下)」考古学ジャーナル 74、3-13 頁。
- 佐原 真 1975「農業の開始と階級社会の形成」『原始および古代 1』(岩波講座日本歴史 1) 113-182 頁、岩波書店。
- 佐原 真 1976『弥生土器』(日本の美術 125)、至文堂。
- 佐原 真 1979「弥生土器編年表(1978 年 6 月作成)」『世界考古学事典上』(全 2 巻) 1118-1119 頁、平凡社。
- 佐原 真 1983「弥生土器入門」『弥生土器 I』1-16 頁、ニュー・サイエンス社。
- 佐原 真・田辺昭三 1966「弥生文化の発展と地域性 近畿」『弥生時代』(日本の考古学 III) 108-140 頁、河出書房新社。
- 佐原 真編 1983a『弥生土器 I』、ニュー・サイエンス社。
- 佐原 真編 1983b『弥生土器 II』、ニュー・サイエンス社。
- 設楽博己 1996「弥生時代 弥生土器の様式論」考古学雑誌 82(2)、62-80 頁。
- 田中 琢 1978「型式学の問題」『日本考古学を学ぶ(1)』12-23 頁、有斐閣。
- 都出比呂志・伊藤 純 2005「解説 小林行雄の弥生土器研究」小林行雄『弥生文化の研究』(小林行雄考古学選集 1) 697-704 頁、真陽社。
- 寺沢 薫・森岡秀人 1989「研究のあゆみと課題」『弥生土器の様式と編年—近畿編 I—』1-37 頁、木耳社。
- 藤森栄一 1969「いつまで編年をやるか」考古学ジャーナル 35、1 頁。
- 森本六爾 1932「東日本縄文式時代に於ける弥生式並に祝部式系文化の要素摘出の問題」考古学 4(1)、7-12 頁。
- 森本六爾 1934a「弥生式土器に於ける二者—様式要素単位決定の問題—」考古学 5(1)、3-8 頁。
- 森本六爾 1934b「筑前藤崎の弥生式土器」考古学 5(1)、24-27 頁。
- 森本六爾 1935「弥生式文化」ドルメン 4(6)、496-499 頁。

- 森本六爾・小林行雄 1938『弥生式土器聚成図録正編』(東京考古学会学報1)、東京考古学会。
- 森本六爾ほか 1934a「弥生式土器の回顧と展望 座談会」ドルメン 3(1)、36-43頁。
- 森本六爾ほか 1934b「弥生式土器問題の回顧と展望 座談会 二」ドルメン 3(2)、124-129頁。
- 山内清男 1929「関東北に於ける繊維土器」史前学雑誌 1(2)、117-146頁。
- 山内清男 1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」考古学 1(3)、139-157頁。
- 山内清男 1932a「日本遠古之文化 一 縄紋土器文化の真相」ドルメン 1(4)、40-43頁。
- 山内清男 1932b「日本遠古之文化 二 縄紋土器の起源」ドルメン 1(5)、85-90頁。
- 山内清男 1932c「日本遠古之文化 三 縄紋土器の終末」ドルメン 1(6)、46-50頁。
- 山内清男 1932d「日本遠古之文化 三 縄紋土器の終末 四」ドルメン 1(7)、49-53頁。
- 山内清男 1932e「日本遠古之文化 五 四、縄紋式以後(前)」ドルメン 1(8)、60-63頁。
- 山内清男 1932f「日本遠古之文化 六一四 縄紋式以後(中)」ドルメン 1(9)、48-51頁。
- 山内清男 1933「日本遠古之文化 七一四、縄紋式以後(完)一」ドルメン 2(2)、49-53頁。
- 山内清男 1935「縄紋式文化」ドルメン 4(6)、492-495頁。
- 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」先史考古学 1(1)、29-32頁。
- 山内清男 1939a『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』1、先史考古学会。
- 山内清男 1939b『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』2、先史考古学会。
- 山内清男 1939c『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』3、先史考古学会。
- 山内清男 1939d『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』4、先史考古学会。
- 山内清男 1939e『日本遠古之文化』(補註付・新版)、先史考古学会。
- 山内清男 1940a『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』5、先史考古学会。
- 山内清男 1940b『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』6、先史考古学会。
- 山内清男 1940c『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』7、先史考古学会。
- 山内清男 1940d『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』8、先史考古学会。
- 山内清男 1940e『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』9、先史考古学会。
- 山内清男 1941a『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』10、先史考古学会。
- 山内清男 1941b『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』11、先史考古学会。
- 山内清男 1941c『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)』12、先史考古学会。
- 山内清男 1952「第二トレンチ」『吉胡貝塚』(埋蔵文化財発掘調査報告1) 93-124頁、文化財保護委員会。
- 山内清男 1969「縄文文化の社会 縄文時代研究の現段階」『古代(日本)先史—5世紀』(日本と世界の歴史1) 86-97頁、学習研究社。
- 山内清男ほか 1936「日本石器時代文化の源流と下限を語る」ミネルヴァ 1(1)、34-46頁。
- 横山浩一 1985「型式論」『研究の方法』(岩波講座日本考古学1) 43-78頁、岩波書店。

図の出典

図1：佐原（1979）文献より。

図2：小林(行)（1939）文献より。

図3：小林(行)ほか（1943）文献より。

図4：山内（1937）文献より。

【後 記】

小論は、南山大学人類学博物館オープン
リサーチセンター事業として文部科学省私

立大学学術研究高度化推進事業に2006～
2010年度採択された「学術資料の文化資源
化に関する研究」成果の一部で、縄文部会
における考古資料の再整理・再検討に由来
する研究である。また、2010年度に、筆者
に与えられた南山大学人文学部個人研究費
による研究成果の一部でもある。

（南山大学人文学部教授）

Chronology of Prehistoric Archaeology in Japan

OTSUKA Tatsuro

Prehistoric archaeology in Japan has some problems in chronology. It is difficult for the author to follow Yukio Kobayashi's theory of the 'style' of Yayoi pottery or Tatsuo Kobayashi's 'style' of Jomon pottery, since their arguments were not constructed on the basis of chronological studies. In order to show the possibility of further study, this article tries to investigate the background to such a situation and also the importance of Sugao Yamanouchi's study, who tried to build the precise chronology of Jomon pottery.

To understand the chronological study in prehistoric Japan, Makoto Sahara is probably one of the main figures who largely influenced the current study of chronology of the Yayoi period. In 1970s Sahara insisted that the study of chronology should be continued, while some scholars believed that the chronological study had already been accomplished, and that, following Rokuji Morimoto, further studies besides chronology should be done. The insistence on chronological studies of Sahara seems to be ostensibly acceptable, but further investigation of his writings makes his argument unacceptable, because Sahara's own study of chronology was in fact not dependent on the precise chronological study of Yayoi pottery. He accepts the importance of the precise classification of pottery which apparently derived from the study of Jomon pottery by Yamanouchi (prepared in the 1930s). But the system he followed came from non-chronological studies by Yukio Kobayashi *et al.* in the 1930-40s.

The study of Yayoi pottery in the 1930-40s was deeply influenced by the political situation. The Japanese government established Manchukuo in 1932 and people believed that it was very important for Japan to keep the newly established state. Scholars of Yayoi period such as Morimoto and Y. Kobayashi, who were strong supporters of Japanese policy (the common reaction at the time, however), insisted that the Yayoi culture had derived from southern Manchuria, in order to justify the close relationship between Manchukuo and Japan in the early 20th century. They believed that the Yayoi culture came from southern Manchuria, landed on northern Kyushu then moved eastwards in the Japanese Archipelago. They believed that there was no direct relationship between Jomon and Yayoi potteries and that the latter influenced the former in later period. The theory of 'eastward movement' was established on the basis of study of the classification of pottery 'style', not on the chronological approach, and this is thought to be the main reason for the problem of the current study of chronology. The theory of Yayoi pottery 'style' by Kobayashi (in the 1930s) was, in fact, established in order to justify the 'story' of Yayoi culture moving eastwards from southern Manchuria.

A criticism on the theory of pottery 'style' was made by Yamanouchi in the late 1930s. He tried to show the difference between the pottery 'style' by Morimoto (and Kobayashi) and the pottery 'type'

which could, according to Yamanouchi, be used for the study of chronology. Yamanouchi insisted that the refined Kamegaoka type pottery of Jomon period (originated in Tohoku), and also its imitation, was widespread in the Japanese Archipelago; this implies that there existed local societies having similar Jomon culture and resembling each other. The argument is different from that by Morimoto and Kobayashi, who suggested the 'eastward movement' of Yayoi culture in the same period. Yamanouchi's argument was not accepted during the Pacific War. Moreover, his argument, which had two phases, that is, the chronological study of Jomon pottery 'type' and social archaeology, is not fully understood today.

Y. Kobayashi seems to have persisted in his own theory even after the war, and his writings based on the theory of pottery 'style' were still used by archaeologists. Many of them followed the theory of pottery 'style', believing that it is based on the chronological study. Some of later archaeologists such as T. Kobayashi (on Jomon pottery) misunderstood the theories, and simply believed that Yamanouchi's 'type' would be exchangeable with Y. Kobayashi's 'style'.

Sahara's study of Yayoi pottery also caused later misunderstanding. He tried to establish the chronological study of Yayoi pottery, using the similar theory of Yamanouchi: the 'broad classification' and 'detailed classification' of pottery. But Sahara's study is still problematic because of its simplification. Yamanouchi distinguished clearly between 'Jomon pottery type' and 'Jomon pottery'; the former is the cognitive existence and the latter is theoretical one. Yamanouchi tried to investigate Jomon pottery through different approaches, and such a standpoint should be followed by Japanese archaeologists.

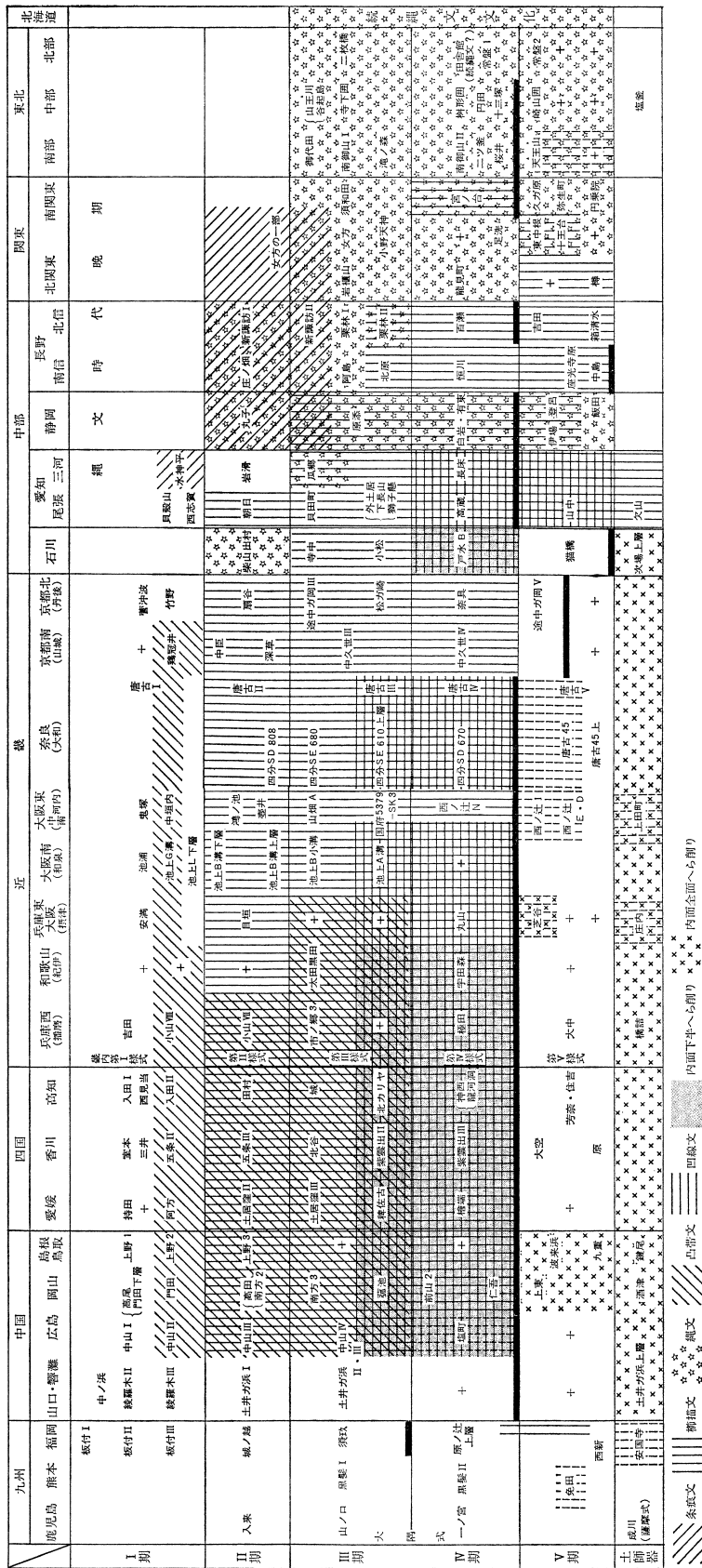


図 1 佐原真による弥生土器「様式」編年研究 (1979)

注 1. この表は、弥生時代を I~V 期に分けて載っている。I~V の各期は、『弥生式土器編年』本籍の北九州地方・畿内地方第 I~V 様式土器のそれぞれ別の時期に相当する。小林行雄および近畿地方、中国・四国地方の研究者は、九州および近畿地方の I~IV 期を中期とよんでいる。杉原佳介は、かつて II 期のみを中期とし、III~V 期を後期とよんだことがある。しかし現在では、九州および近畿の II・III 期を中期、IV・V 期を後期とよび、また関東地方の官ノ台式土器を、畿内頸血様式土器と同時期と考えるため、これを中期に載っている。九州地方の研究者は、北九州地方の II・III 期を中期、IV・V 期を後期とよんでいる。

2. 十で示したのは、該当する土器の存在はあがるが、適当な様式名がつかっていないものである。{ } でくくった様式名は同時共存を示す。

3. 十で示したのは、該当する土器の存在はあがるが、適当な様式名がつかっていないものである。{ } でくくった様式名は同時共存を示す。

4. この表の作成にあたっては、小田原士雄 (九州)、伊東直雄 (山口)、瀬田浩 (広島)、照藤重彦 (岡山)、岡本健児 (四国)、今里悠次 (兵衛)、秋鹿雄 (京都北部)、橋本澄夫 (北陸)、新井弘 (愛知)、中山敏文 (静岡)、西沢浩 (長野)、菊池義次 (東京)、馬日順一 (東北南部)、須藤誠 (東北) を初めとする多くの方々の考えを参照し、全般的には、工業界の用語を得た。しかし土器様式の別名、各地方土器様式間の対応については異議も多く、全体を矛盾なくまとめあげたものとはいえない。

5. 弥生土器にみられる調整技法、文様とのあわせを示すことを示すもの若干を選び、様式名とあわせ示すことを示した。太線以下の時期は、多数が普及したものと認められている。

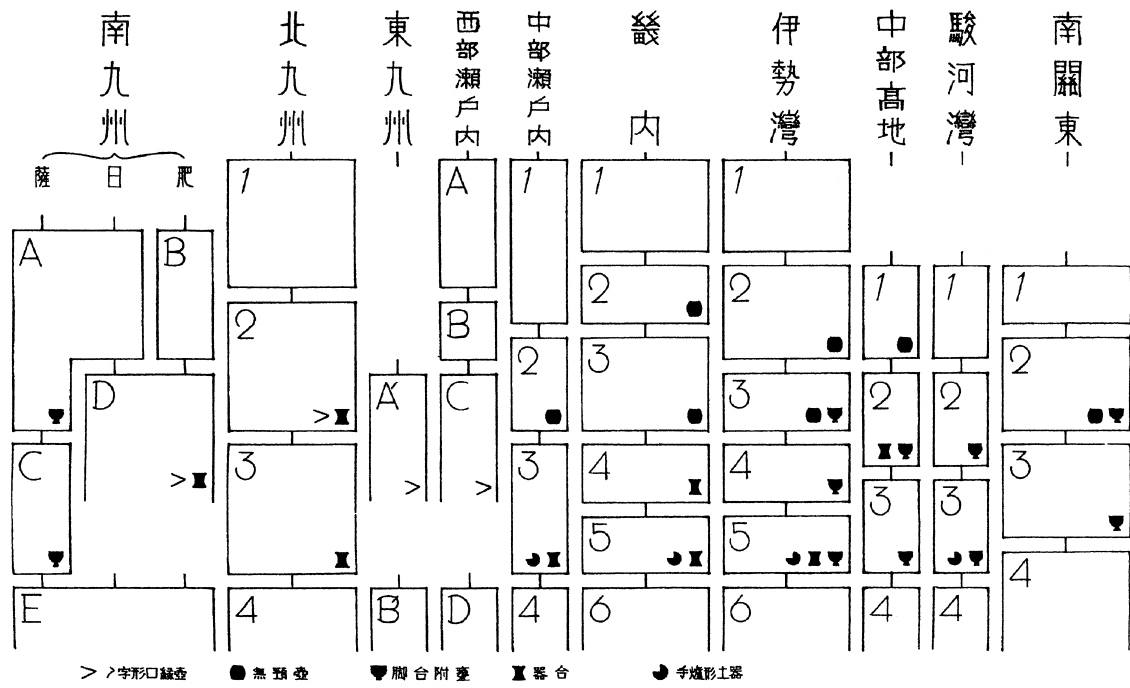


図2 編年研究ではなかった「弥生式土器一覧表」(1939)

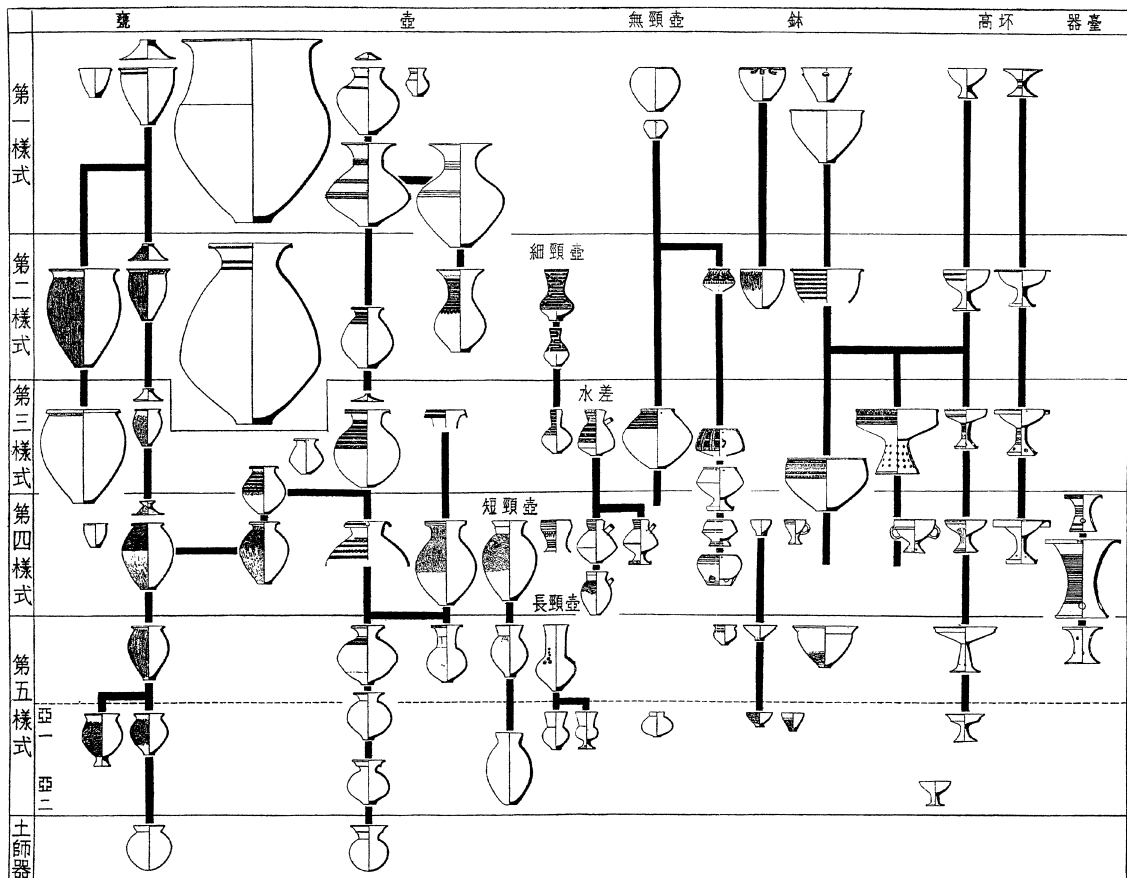


図3 編年研究ではなかった「唐古発見弥生式土器各様式一覧図」(1943)

縄紋土器型式の大別

	渡島	陸奥	陸前	關東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木 1 〃 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根? × (+)	ひじ山 粕畑		黒島 ×	戰場ヶ谷 ×
前期	石川野 × (+)	圓筒土器 下層式 (4型式以上)	室濱 大木 1 〃 2 a,b 〃 3-5 〃 6	蓮田 { 花積下 關山 式 濱 諸磯 a,b 十三坊臺	(+) (+) (+) 跡場	鉢ノ木 ×	國府北白川 1 大歳山	磯ノ森 里木 1	轟?
中期	(+) (+)	圓筒上 a 〃 b (+) (+)	大木 7a 〃 7b 〃 8 a,b 〃 9, 10	御領臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 B 〃 (新)	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 } 阿高 } 出水 }?
後期	青柳町 × (+) (+)	(+) (+) (+)	(+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B " 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾 ×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晚期	(+)	龜ヶ岡式 (+) (+) (+) (+)	大洞 B " B-C " C1,2 " A,A'	安行 2-3 " 3	(+) (+) (+) 佐野 ×	吉胡 × " × 保美 ×	宮瀧 × 日下 × 竹ノ内 × 宮瀧 ×	津雲下層	御領

- 註記 1. この表は假製のものであつて、後日訂正増補する筈です。
 2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
 3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。

図 4 山内清男による縄紋土器型式編年研究「縄紋土器型式の大別」(1937)

南山聖堂古窯址出土遺物に関する再報告

伊東 亜紀

はじめに

南山聖堂古窯は1956年5月に伊藤禎樹氏によって発見され、同年7月11日から当時南山大学の助手であった稲垣晋也氏と学生によって発掘調査が行われた。当該期の東山古窯址群の発掘調査事例は非常に少なく、まとまった量の遺物がある当遺跡資料は貴重な例である。調査の概要は1968年出版の『文化人類学研究会会報』の中で報告されている¹⁾が、遺構図面・写真などの資料がないことや、発掘調査から半世紀余り経過していることを考え、再報告するに至った。

遺跡の立地と現況

南山聖堂古窯は愛知県名古屋市昭和区南山町1南山教会敷地内に所在する。東山古窯址群の西端に位置し、東山丘陵西部から北に張り出した丘陵の北東斜面に立地している。標高は約20mである。遺跡東側に面する道路沿いに現在は歩道の下を流れている小さな川があり、南東方向に流れて隼人池に繋がっている。遺跡西側約600mには山崎川が流れており、川から西は熱田台地である。

調査当時の遺跡周辺は本来の丘陵の形が残されており、周辺は田地が主であった。現在は大学関連施設や商業施設・宅地などになっており、調査範囲も南山教会建設の際に大部分が消滅している。

2010年6月に伊藤禎樹氏と現地調査をしたところ、灰原があったと思われる部分は現在の南山教会会館の駐車場にあたり、遺物は皆無であった。しかし、窯本体があると思われる斜面の一部は丘陵本来の形を留めているように思われ、調査時には発見できなかった窯本体が残存している可能性も考えられる。

概報によると、「高校女子部の構内端」にも灰原が認められたとあるが、場所は特定できなかった。

南山聖堂古窯関係資料について

調査時の図面や写真などの資料は所在が不明である。しかし、部分的ではあるが伊藤禎樹氏が記述した日誌²⁾が見つかっており、その中に「第一図」の記載があることから簡易な図面の記録はあったと思われる。写真は当時学生であった早川正一氏が記録係として撮影した³⁾が、現在のところ所在はわかっていない。

収蔵状況

南山聖堂古窯出土遺物は2009年6月時点では、人類学博物館第1展示室に展示中のものと地下収蔵庫に収蔵されている資料があった。第1展示室展示ケース中には、近世陶器や瀬戸の四耳壺、常滑産の甕などが混在していたが、明らかに南山聖堂古窯に関係ないと判断したものについては、今

回は報告しない。地下収蔵庫の遺物は5箱あり、概報に掲載された遺物を含めて接合部を剥がして破片にした状態で保管されていた。その中にも他遺跡の注記があるものや近現代の遺物などが混入していたが、できるだけ除外して整理した。

今回は概報の再報告であるが、概報に掲載されている遺物の大半は破片に戻して収蔵されていたため、概報にある遺物の全てを報告することはできなかったが、新たに復元できた資料も数点あった。以下、遺物について報告する。

収蔵遺物について

収蔵されていた遺物のほとんどは灰釉陶器であり、緑釉陶器や緑釉陶器素地は皆無であった。灰釉陶器の器種は椀・深椀・皿・耳皿・段皿・折縁皿・長頸瓶・広口瓶・把手付広口瓶がある。そのほか窯体の一部などが収蔵されていた。

1～17は椀である。口径は13 cm前後のものと15 cm台のものに分けられる。口縁端部はわずかに外反するものが多い。施釉方法は漬け掛けが主体で、5・8・10・12には施釉は認められなかった。また、2・6・13・15は内面に降灰釉及び重ね焼き痕が認められた。底部調整は糸切り未調整のものが主であるが、一部ナデが見られる。高台形は基本的に三日月高台を意識したもので、高さは0.8 cm前後である。また、図化しなかったものに輪花を施した破片があった。

18・19は深椀である。18は大型の深椀で、図化しなかったが同種の高台部の破片がこのほかに数点あった。19は小型の深椀であり、同形と思われる資料は他に確認

できなかった。深椀は椀に比べて丁寧に作られていて、器壁も非常に薄い。高台は高めでやや直線的に立ち上がる。

20～26は皿である。口径は13 cm前後であり、漬け掛けのものと無釉のもの(20・21・24)がある。25・26は輪花が施されている。底部調整は糸切り未調整とナデがあり、26の輪花皿にはヘラケズリが施されている。高台は三日月高台を意識したもので、高さは0.5～0.7 cmである。

27は折縁皿である。口径は約12 cmで、底部は接合できなかったが、1968年報告の折縁皿⁴⁾と同一の可能性はある。施釉方法は漬け掛けで、他の器種と同様に器壁は非常に薄い。

28は段皿である。1968年報告の段皿⁵⁾と同一と思われる。口径は約16 cmで、口縁部は大きく外反する。底部調整はナデであり、丁寧に作られている。高台は深椀の高台に似ており、高めでやや直線的に立ち上がる。

29は鉢である。口径は約28 cmで、口縁端部はやや外反する。体部はわずかに内湾する。施釉方法は刷毛塗りである。1968年報告の鉢⁶⁾と同一と思われる。

30・31は長頸瓶である。口径は10～11 cm、30の高さは約19 cmである。胴部最大径は上半にあり、30は胴部が丸みを帯びているが、31は肩が張ってやや直線的に底部に向かってすぼまっている。施釉方法は不明であるが、頸部内面から胴部外面最下部まで厚く釉がかかっている。高台の高さは0.6 cmであり、内傾する面を持っている。1968年報告の細頸壺⁷⁾と同一と思われる。

32は把手付広口瓶である。口径は20 cm

で、頸部は緩やかに外反する。口縁端部は上方につまみ上げるものと、上下に拡張させるものがある。釉が剥落しているため施釉方法は不明である。1968年報告の「把手をつけた大型の壺」⁸⁾と同一と思われる。

33・34は広口瓶である。33の底径は約15cmである。高台の高さは0.8cmで、内傾する面を持っている。34の口径は約20cmで、直線的に立ち上がった頸部から、口縁が強く外反する。33・34ともに内外面とも刷毛塗りが施されている。33は1968年報告の太頸壺⁹⁾と同一と思われる。

以上、出土遺物を概観してきた。このほかにも概報にある土師器や須恵器片などがあるが、前述したように他遺跡の遺物の混入が見られるため、今回は灰釉陶器に限って扱った。遺物の中で最も量が多かったのは椀である。椀・皿類の施釉方法は漬け掛けが主体で、鉢など大型のものには刷毛塗りが見られる。椀は器壁が薄いものが多く、皿は小型化が進んでいる。数は少ないが折縁皿が存在し、図化できなかった破片の中には耳皿のほか、一定量の深椀が認められた。

これらの特徴から南山聖堂古窯址はH-1号窯に併行すると思われ、尾野編年Ⅶ期古段階¹⁰⁾に相当すると考えられる。

終わりに

今回の再報告にあたって伊藤禎樹氏と早川正一氏に聞き取り調査を行い、当時の遺跡及び周辺の状況などについて知ることができた。また、出土遺物については尾野善裕氏にご教示いただいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

注

- 1) 伊藤禎樹 1968「南山聖堂古窯址発掘調査概報」『文化人類学研究会会報』Vol. 4 No1 南山大学
- 2) 写真図版3
- 3) 早川氏の聞き取り調査及び日誌より
- 4) 注1 図1-22
- 5) 注1 図1-24
- 6) 注1 図1-36
- 7) 注1 図1-39、40
- 8) 注1 図1-45
- 9) 注1 図1-35
- 10) 尾野善裕 2006、2008

参考文献

- 荒木実 1994『東山古窯址群』
- 伊藤禎樹 1968「南山聖堂古窯址発掘調査概報」『文化人類学研究会会報』Vol. 4 南山大学
- 尾野善裕 2006「古代土器の編年と暦年代観—10・11世紀を中心に—」『第14回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集—京都府内最新の研究成果—』京都府埋蔵文化財研究会 2008「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市教育委員会

表1 遺物観察表

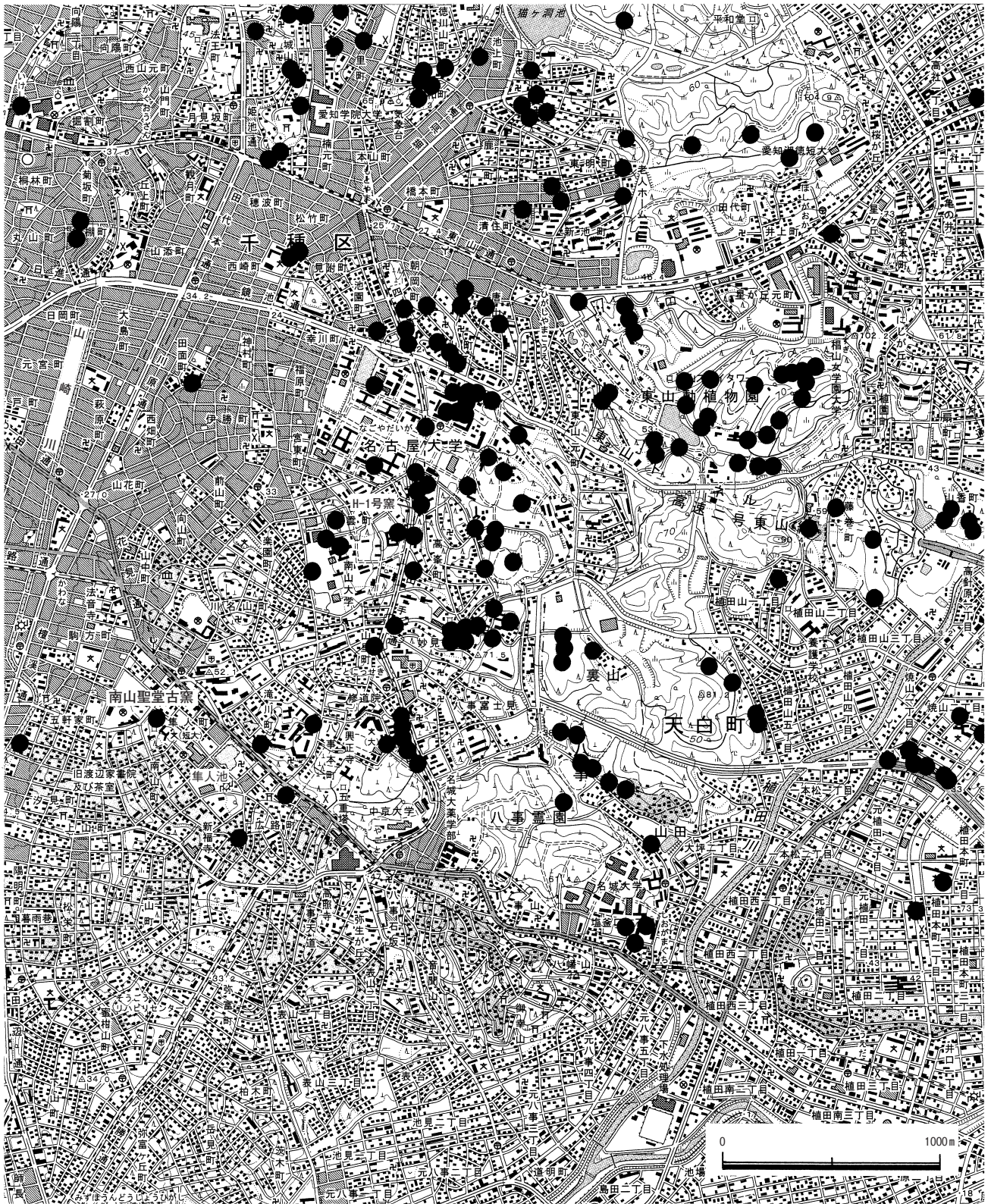
No.	器種	口径	底径	高さ	高台高	底部調整	焼成	施釉方法	残存率(%)	備考
1	椀	12.8	6.2	4.0	0.9	糸切り	良好	漬け掛け	100	
2	椀	13.0	6.2	3.7	0.7	糸切り	良好	漬け掛け	60	内面降灰釉あり。 重ね焼き痕あり。
3	椀	12.9	6.6	3.6	0.8	糸切り	良好	漬け掛け	60	
4	椀	(12.7)	(6.4)	3.7	0.7	糸切り	良好	漬け掛け	40	
5	椀	13.1	6.0	4.2	0.8	糸切り	良好		50	
6	椀	(13.1)	6.5	4.2	0.8	糸切り	良好	漬け掛け	60	内面降灰釉あり。 重ね焼き痕あり。
7	椀	13.2	6.5	3.8	0.7	ナデ	良好	漬け掛け	95	
8	椀	(14.3)	(6.8)	4.7	1.1	ナデ	やや不良		40	
9	椀	15.0	(6.6)	5.0	0.8		良好	漬け掛け	50	
10	椀	(15.3)	(7.1)	4.9	0.9		やや不良		25	
11	椀	(15.4)	7.4	4.8	0.9	糸切り	やや不良	漬け掛け	20	
12	椀	(15.8)	(7.0)	5.2	0.9	ナデ	やや不良		20	
13	椀	(15.2)	7.4	4.5	0.8	糸切り	良好	漬け掛け	80	内面降灰釉あり。 重ね焼き痕あり。
14	椀	15.6		〈3.8〉			良好	漬け掛け	30	
15	椀	15.3		〈3.9〉			良好	漬け掛け	40	内面降灰釉あり。 重ね焼き痕あり。
16	椀	(16.6)		〈4.2〉			良好	漬け掛け	30	
17	椀	(15.0)		〈4.3〉			良好	漬け掛け	40	
18	深椀	18.0	8.2	6.8	1.5	ナデ	良好	漬け掛け	50	
19	深椀		(6.0)	〈3.8〉	0.9	ナデ	良好	漬け掛け	20	
20	皿	(12.5)	(6.1)	2.5	0.5		やや不良		20	
21	皿	(12.9)	(6.5)	2.4	0.6		やや不良		20	
22	皿	(12.8)	(6.1)	2.3	0.5	糸切り	良好	漬け掛け	10	
23	皿	(12.9)	6.8	2.4	0.6	糸切り	良好	漬け掛け	30	
24	皿	(12.8)	(6.5)	2.4	0.7		やや不良		20	
25	輪花皿	(13.4)	6.3	2.3	0.5	ナデ	良好	漬け掛け	60	内面降灰釉あり。 重ね焼き痕あり。
26	輪花皿	(12.7)	6.7	2.8	0.7	ヘラケズリ	良好	漬け掛け	70	内面降灰釉あり。 重ね焼き痕あり。
27	折縁皿	(11.9)		〈1.5〉			良好	漬け掛け	破片	
28	段皿	16.1	6.8	3.3	1.2	ナデ	良好	漬け掛け	98	
29	鉢	(27.8)		〈10.4〉			良好	刷毛塗り	破片	
30	長頸瓶	10.9	8.2	19.3			良好		80	
31	長頸瓶	10.2		〈17.5〉			良好		30	
32	把手付 広口瓶	(20.0)		〈15.3〉			良好		口縁~肩部	施釉は認められるが、 剥がれている。
33	広口瓶		(15.2)	〈14.8〉			良好	刷毛塗り	破片	
34	広口瓶	(19.7)		〈12.4〉			良好	刷毛塗り	破片	

※ () は復元径、〈 〉 は残存高

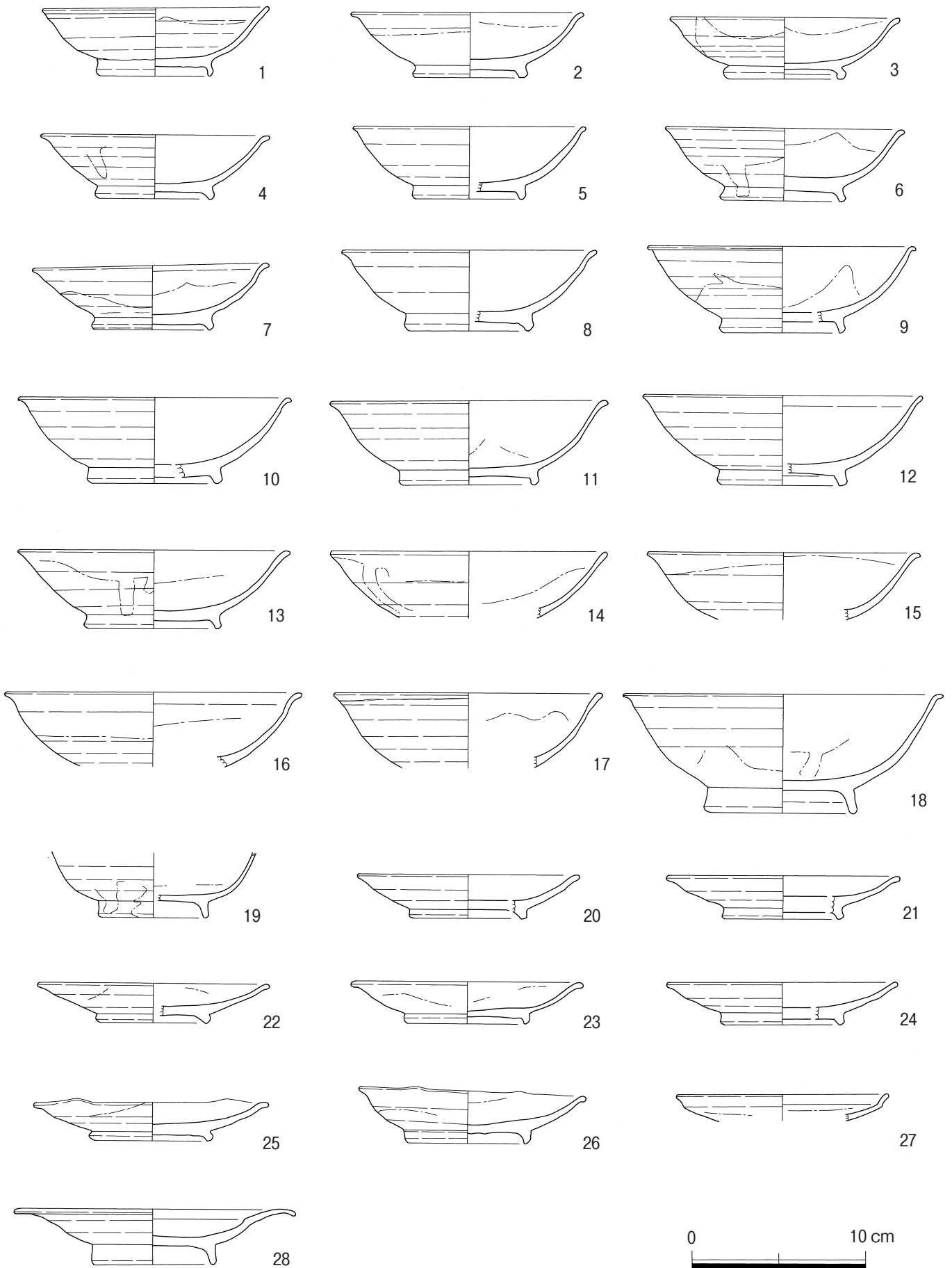
Remains from the Ancient Kiln of Nanzan Catholic Church

ITO Aki

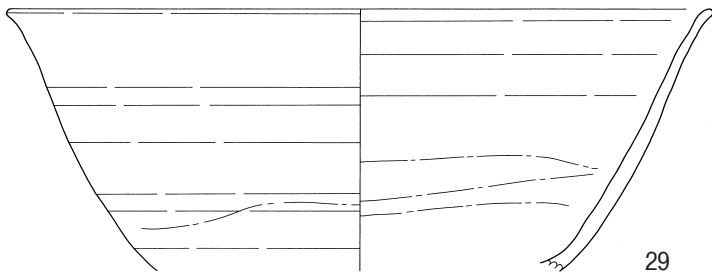
This paper is re-construction of the former report about remains from the ancient kiln located in Nanzan Catholic Church, Nagoya, Japan. This site, one of the Higashiyama kilns, was discovered in 1956 by Mr. Sadaki Ito, then was excavated by Mr. Shinya Inagaki (assistant) and students of archaeology at Nanzan University. The summary of excavation had been published at Nanzan University in 1968, but it lacks any plans and photos. In order to make the present report, the author investigated the site with Mr. Ito in 2010. Besides, an inspection of remains collected in the Anthropological Museum of Nanzan University was made in 2009. Most of remains are fragments of ash-glazed pottery. The investigation of the remains proved that the kiln of Nanzan Catholic Church belonged to the second quarter of the 10th century, classified as being the 7th stage of the early phase according to Mr. Yoshihiro Ono's chronology.



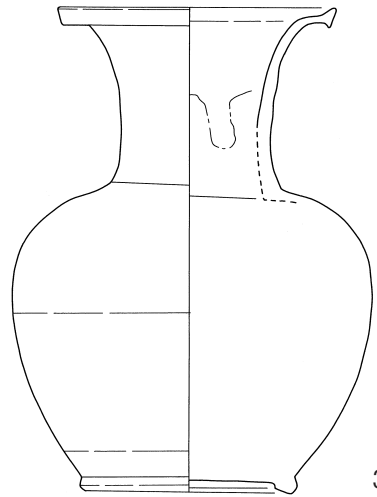
第1図 南山聖堂古窯及び周辺窯跡位置図
 (出典：国土地理院平成17年発行 1/25,000 地形図 名古屋南部)



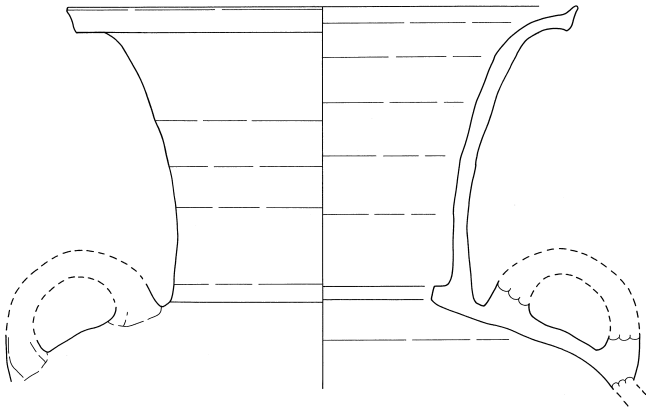
第2図 遺物実測図①



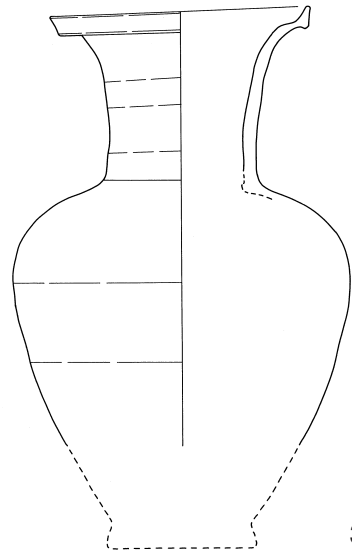
29



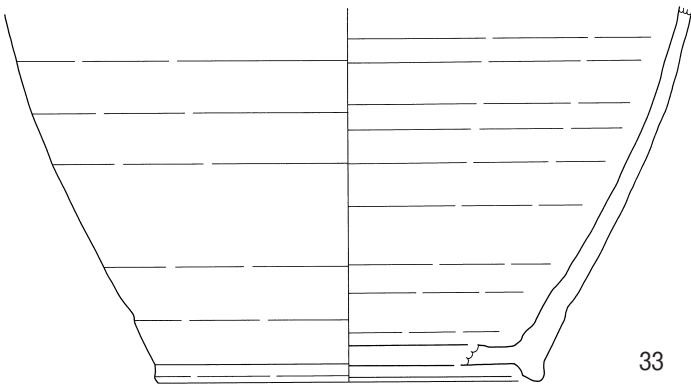
30



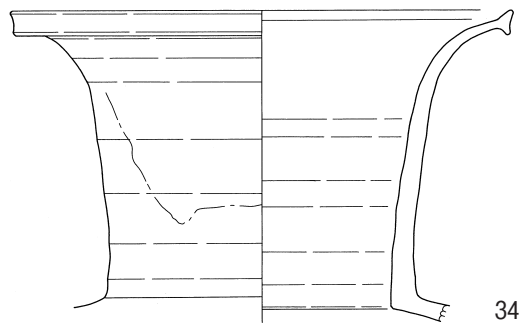
32



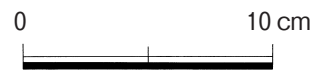
31



33



34



第3図 遺物実測図②



1



2



3



5



6



7



8



9



13



15

椀



18

深椀



25

皿



26



28

段皿



30

長頸瓶



31



32

把手付広口瓶

写真図版 1 南山聖堂古窯出土遺物



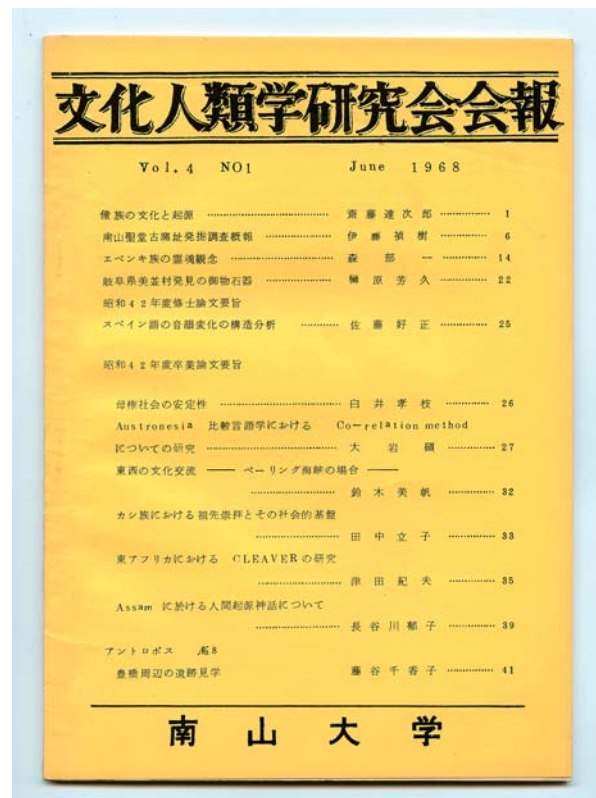
南山聖堂古窯址出土遺物



研究会帳（日誌含む）



南山学園（1956～57年頃）
※南山大学史料室所蔵



文化人類学研究会会報

写真図版 2 発掘調査関係資料

ショーテン諸島のアウトリガーカヌー： 南山大学人類学博物館および沖縄海洋博公園海洋文化館の資料紹介

後藤 明（南山大学）

石村 智（奈良国立文化財研究所）

0. はじめに

本報告は南山大学人類学博物館および沖縄海洋博覧会記念公園内海洋文化館に収蔵されている、ニューギニア島北方に浮かぶショーテン諸島から収集された2隻のカヌーについての資料紹介をするものである。この地域は調査報告が少なく、また管見にふれる限り、同地域のカヌー資料は国内の他施設にはないし、国外博物館などにおいてもあまり見かけない貴重なものと思われる。著者は2人ともオセアニアを専門とするがこの地の調査経験はない。しかし同一地域のカヌーが日本国内に2隻もあるということは報告の価値があると考え、本報告を準備した次第である。

1. ショーテン（メール）諸島

1.1. 地理的・文化的背景

ニューギニア島北東部、セピック川河口に近い所にウエワク（Wewak）がある。この地域一帯、ダルマン（Dallmann）湾沿岸の沖に浮かぶのがショーテン（Schouten）諸島である。この火山からなる小島はオランダ人のスホーテン（Schouten）によって発見された¹⁾。ただし同名の諸島がニューギニア北西部インドネシア領イリアン・ジャヤ洲のゲールヴィンク（Geelkink）湾にも存在し紛らわしい。そのためメール（Le Maire）諸島と呼ぶべきだという意見

もある（Haddon 1937: 299）。

この地域の本島側には非オーストロネシア系の集団が暮らす。一方沖に浮かぶショーテン諸島民はオーストロネシア系の集団であり、本島の集団と交易を行っている。このような複雑な言語状況は、いわゆるラピタ文化複合の移動や起源地論争にも重要な地域であることを認識させる（Terrell 2001；後藤 2003；石村 2011）。考古学的にはこの地域からオーストロネシア集団の初期居住の痕跡は見つかっていないが、言語学的状況から初期のオーストロネシア集団は東南アジア方面からニューギニア島北海岸付近を經由し、ビスマルク諸島に紀元前1500～1300年頃に到達し、ラピタ集団になったと考えられる。そうしたルートを想定した時、ショーテン諸島が彼らの経由地になった可能性は高い。

この地方周辺の民族誌の初期はドイツ人による調査報告である（e.g. Thilenius 1903; Parkinson 1907; Friederici 1912）。それはこの地域が旧ドイツ領、Kaiser-Wilhelm Landに属していたからである。第一次世界大戦後、この地を引き継いだのがイギリスである。この時代の民族学的調査の代表はイギリスのイアン・ホグビンによって行われたものであろう。ホグビンは1930年代に行われた調査（Hogbin 1935a,

1935b) に基づいて『月経する男の島』というモノグラフを書いている (Hogbin 1970)。「月経する男」とは男が子供時代に体内に入った女の血を抜くために蟹の鉗などを用いて自ら性器に傷をつけて血を流し出すイニシエーションを行うことに由来する。

ホグビンが調査を行ったのはショーテン諸島の北西端に浮かぶウエゲオ (Wogeo ないし Vegeo) 島である。カヌー作りに関してもホグビンの報告がもっともまとまったものである (1935b)。

1.2. ショーテン諸島におけるカヌー作りと儀礼

ホグビンはウエゲオ島におけるカヌー製作過程やそれに伴う儀礼を次のように報告している。

削りぬき船体を作るときには切り倒したあと部分的に加工された丸木を海岸まで引っ張ってくる。丸木を持ってきた日には小さな祝祭が行われるが、そのさいカヌーを造る氏族にちなんだ動物の名称の入った呪文が唱えられる。たとえば鳥のミサゴ (fish-hawk) がトーテムであれば、カヌーにもその名称の入った名前が呪文とともに与えられる。最後の段階をのぞいて丸木を彫るのは若衆に任されている。

丸木がおおむね彫り上がるとカヌーは火であぶられたのち、塩水につけられ全体をこすられる。このとき呪術的な効果があると思われるダンスと歌が披露される。この踊りのためにクロトンをはじめ数種類の植物が集められる。男女は体を洗ってこれらの植物で身を清め踊りが始まる。相図とともに一斉に踊りがやめられ人々は飾りを舟の中に投げ入れる。そうして村に戻って食

料の分配が行われる。

次の段階は舳先と艫の彫刻を仕上げることである。この作業はベテランの長老にゆだねられる (Hogbin 1937: Plate IVA)。長老はまた内部の最後の仕上げも行う。この作業の仕上げには伝説で精霊の夫婦の伝承に因んで夫が妻にいった「目がきれいになるように、目が輝くように」という言葉がかけられる。同時に彫刻についた煤がこすり取られる。これはカヌーが目的地まで真っ直ぐ進むという願いが込められている。

造形が完成させられ船体の横にデザインが施される。これが行われる前に呪術が施される。船体のデザイン (浅いレリーフ) は専門家の指導で村人が行う。模様は幾何学的だが (Hogbin 1935b: Plate IIA)、それが象徴しているものによって呼ばれる。この模様の起源を神話では最初の男性が旅に出るとき不貞をはたらかないように妻の体に彫った入れ墨の模様だと語られる。

そして舷側板、アウトリガーの腕木、浮き木、ペグ、甲板などの材料が集められる。これらの部品は呪術的な理由からできるだけ異なった場所から採集される。浮き木の両端には鰐の造形が彫られる。腕木の端は蛇の頭のように仕上げられる²⁾。部材を結縛するための蔓が集められ、村長が結縛する穴を空けるがその作業は夜明け前に行う必要がある。彼は近親者とともにカヌーに赴き彼らが太鼓を叩く中、穿孔作業を行う。残りの者はココ椰子の実を噛んで、穴を空ける部分に吐きかける。また紐に使う蔓にも呪文をかける。

アウトリガーの腕木を船体に結ぶときはとげのついた蔦 (ロタン?) が使われ抜け

るのを防ぐ。進水式の時、浮き木と腕木を結合する X 字に交差されたペグの股の上に、おそらくクロトンのような葉を載せて儀礼が行われる (Hogbin 1935b: Plate III B)。

次に舷側板がつけられ、最後に全体が赤く塗られる。その間マストが造られココ椰子葉製の帆が用意される。マストが軽くなるように呪文が唱えられる。

カヌーができあがるといろいろな天候の時に海に浮かべて性能を試される。カヌーのできに満足がいったら二つのカヌー製作地方に儀礼的な訪問が行われる。このあと本島海岸部との交易に、カヌーは使われる (Hogbin 1935b)。

2. 南山大学人類学博物館の資料

2.1. 形態と構造

船体の長さ 443 cm、幅 30 cm、高さ 42 cm のシングル=アウトリガーカヌー式カヌーである (図 1、写真 3)。アウトリガーを含めた全体幅は 155 cm、浮き木の長さは 238 cm である (図 2)。アウトリガーの構造は、6 組のペグを交互に交差させて、X 字の上に腕木を置く、いわゆる下交差 (under-cross)³⁾ 式である (写真 4)。その結縛はロタン材を用いる。

船体は一本の木から削りぬかれており、その丸太の大きさはおよそ直径 30 cm ほどに復元されるが、樹皮・辺材部分を除去しているので本来の大きさは一回り大きかったと推測される。船体の断面は上がすぼまり、内部が削りぬかれている。そしてその割れ目にはやや外反する幅 10 cm ほどの舷側板が取り付けられている。船体は全体的に赤く彩色されているが、2 本の幅 40 cm

あまりの縦方向の黒い帯状彩色も施されている。

舳先と艫の側面上方には、幅 10 cm ほどの幅で浅彫りの彫刻が施されており、そのモチーフはいわゆるメアンダー文様であるが、S 字状モチーフの連続によるやや不完全な流水文の様相を呈する。舳先と艫の先端にはともに鰐のようなモチーフが象られている (写真 7 左)。鰐の頭は大小のものが前後に連結しており、前方の小さい鰐の頭は何かを咥えているように見えるが、その意匠は詳細ではない (写真 5)。

浮き木は全体にスキー板のように薄く、上に先端が反るような形に仕上げられている。しかし彫刻や彩色などは施されていない。腕木のカヌー側の先端は亀頭状に彫刻されている。

2.2. 収集の経緯

1964 年、南山大学の経営母体である神言会の神父で人類学者であった沼澤喜市を団長として当時人類学的に未開拓といわれたニューギニア東部高地に調査隊が送られた。これには南山大学の教員であり、神言会の神父で現地に詳しい H. アウフェンランガー (Aufenanger) 師が調査主任として任務に当たった。調査は高地が中心であったが (クネヒト 1998)、神言会の伝道所は海岸でセピック川の河口ウエワクにもあった。ショーテン諸島民は定期的な交易のために本島を訪れるので (Hogbin 1935b)、おそらくアウフェンランガー神父がウエワク付近で交易のために来ていたカヌーを入手し、当時の南山大学人類学研究所付設人類学陳列室 (現人類学博物館) の資料として日本に送ったものと思われる⁴⁾。しかしそ

れ以上の詳細はわかっていない。なお沼澤は1966年に再び単独でシェラダー山脈の住民の調査を行っている（沼澤 1969）。

当該カヌーの唯一といえる記録は人類学博物館のカードに記された次の記述とスケッチである：

丸木船 ルプルプ諸島
canoe with carved carvings and outrigger,
Rupurup island
(Schouten I.)

スケッチ（図1）には次のように注記がある：

縮尺 1/20
材質：木造
特徴：一本の木をくりぬいてつくったもの。両船首には、ワニの彫刻が施されている。
彩色：クロ、あずき色（黒みがかった所）
全長：448 m
艇の長さ：235 m。艇を支える棒の長さ左 152 cm、右 159 cm。

同様に付属すると思われる魚のような彫刻のあるパドルについては次のようである：

かい ルプルプ諸島
Oar with carved fish design, Rupurup island.

この記述により、ショーテン諸島の中でもおそらくルプルプ（ホグピンは Bluplup

と記載した島）産と推測するものである。なおこのカヌーとパドルと一緒に、アカカキ、波乗り板、ひしゃくなどショーテン諸島産の民具も収集された模様である（人類学博物館蔵）。

このカヌーと次に述べる海洋文化館のカヌーは舳先に鰐の彫り物がある点、船体の形状、その断面形、さらに舷側の付け方、アウトリガーの構造、すなわちペグと浮き木の結合の仕方、その結合にはロタンが使っている点など構造上はほぼ同型といえる⁵⁾。違いは海洋文化館のカヌーは浮き木の両端に鰐の頭が彫られているが、南山のカヌーにはそのような加工がない点である。しかしスキー状に薄く上に湾曲した形状は同じであり、おそらく鰐の加工は省略されたものと思われる。

3. 海洋文化館のカヌー

3.1. 形態と構造

船体の長さ 666 cm、幅 44 cm、高さ 41 cm のシングル=アウトリガーカヌー式カヌーである（図3、写真5、6）。アウトリガーを含めた全体幅は 176 cm、浮き木の長さは 302 cm である（写真3）。船体と浮き木の間の腕木の上に小さな甲板を作り荷物置きのためにベンチ状の細工が施してある。このベンチないし座椅子は3人用の背もたれが備え付けられている（写真4）。

アウトリガーの構造は6組のペグを交差させた下交差式である。その結縛はロタン材を用いているが、船体と舷側などはヤシの実繊維の紐が使われている⁶⁾。

船体は一本の木から削りぬかれており、その丸太の大きさはおよそ直径 40 cm ほどに復元されるが、本来の大きさは一回り大

きかったと推測される。断面は上がすぼまったような形で内部が削りぬかれている。舷側板は取り付けられていない。船体は赤く塗られているが、中央には幅 20 cm ほどの、その前後には幅 60 cm ほどの縦方向の帯状の黒い彩色が施されている。船体側面にはアウトリガーカヌーやウミガメ、魚（もしくはイルカ）や幾何学文などの具象的な絵画が描かれている（図 3）。

舳先と艫の側面上方には、幅 10 cm ほどの幅で浅彫りの彫刻が施されており、そのモチーフはいわゆるメアンダー文様であり、複合渦巻き文様を呈する。舳先と艫の先端にはともに鰐のようなモチーフが象られている。鰐の頭は大小のものが前後に連結しており、前方の小さい鰐の頭は嘴の両脇にトカゲのような動物を咥えており、一方で別なトカゲのような動物が鰐の頭に噛みついていてような複雑な意匠が施されている（写真 5）。舳先には植物製の房状飾りが取り付けられている。

浮き木は先端が反るような形に仕上げられている。そして先端は鰐の頭の彫刻および黒で描かれている。腕木のカヌー側の先端は亀頭状に彫刻されている。

3.2. 海洋博当時の記録

海洋博記念公園管理財団に残された記録には、このカヌーについて以下のような記録がある：

Schouten Is. は Sepik 河口の Murik Lake 沖の海上に東西に長く横たわっている。島の形態は海面より高く切り立った島でラグーンも浜辺もない。

そこで、この地方の海カヌーは小型で 1

人で浜から島へと運び上げることが出来るように、軽い材質の Elima という木で建造されている⁷⁾。主に漁業と交通手段として使用され 1、2 名のりの小さなカヌーである。

この地方のカヌーの形態は Coastal Sepik Type といい、船首、船尾が船体からそのまま平らに突き出ている、Sepik 川の川カヌーの形態とよく似ている。波のある海で使用するので、アウトリガーが片方についている。

突き出た船首と船尾には彫刻がほどこされている。Sepik の彫刻のようにキメがこまかく、ダイナミックで Sepik の影響が強いという人もいる（牛山 1975：33-34）。

報告書によると日本の調査班はラエ（Rae）の収集家 M. Y 氏の家で同氏がパプア・ニューギニア博物館に依頼されて購入したショーテン諸島の海用カヌーを見たこと記す。このカヌーを購入したい旨博物館の館長 Dr. Dirk Smidt に交渉したが博物館用として確保したい旨告げられ断られた。その後 M. Y. 氏が再び諸島を訪れることを知り、またショーテン諸島では二つの島だけに同型のカヌーが残されているので、これを調査班のために確保することを約束してくれた、と続く。そして博物館長の推薦もあったのでこのカヌーを購入したとある。その島とは Bann ないし Kadovar 島である。カヌーは彫刻入りのパドルと漁具一式とともに購入された。

カヌー船体をつくる木は 700 キロ離れたセピック川支流の April 川から運んでくる⁸⁾。カヌーの彫刻は Coastal Sepik Type に特徴的な鰐が木登り蜥蜴（tree lizard）を

喰っているデザインを中心に人面、トビウオ、多産を象徴するマンゴーの切断面と種子などである。

先に紹介した Hogbin (Hogbin 1935b) の報告した ウェゲオではカヌー材には島に生えている木を利用していると書かれているので、この島が収集されたといわれる Bann ないし Kadovar とは状況が違うのであろうか。

4. 資料の比較

4.1. 全体の形態と装飾

ショーテン諸島のカヌーは本島の海岸と一括して「ダルマン港地域 (Dalmann Harbor District)」の資料として記述されることが多い (Haddon 1937: 302-310; Neyret 1974: 146-151)。

ショーテン諸島のカヌーは多かれ少なかれ同型であるが、カドヴァル (Kadovar) 島のカヌーは装飾が凝っている一方、ブルブルプ (Blupblup) のは装飾が貧しい (Haddon 1937: 309)。カドヴァル島で作られた可能性のある海洋文化館のカヌーに比べると、(ブルブルプ島で作られた南山のカヌーは浮き木の両端には鰐が彫られていない点など、装飾が簡素であるのはそのためであろうか。

ショーテン諸島の住民の主な交易相手はセピック川河口のムリック (Murik) などの集団である。まず細身で舳先や艫が真っ直ぐな船体の形態はセピック川のカヌーと類似している。なにより舳先に鰐が彫られる点で共通している (Newton 1971)。セピック川のカヌーは日本では海洋文化館や奄美の原野資料館に資料が存在する (写真 6)。

鰐の意匠は東南アジア大陸部やインドネシアからオセアニアへと至る重要な流れである (e.g. Lommel 1939)。ニューギニア島では北海岸にそって、セピック川流域、東部のシアシ海峡、さらに南部のパプア湾岸でも見られる。しかし島東方のトロブリアンド諸島を含むマッシュム地域では見られないが、ビスマルク諸島に至るとニューアイルランド島のマランガン様式などに再び見られるようになる。一般に鰐は水界でもっともどう猛な動物ゆえ、戦闘カヌーや交易カヌーの魔除けのような意味で彫られる。同時に創世神話で水界の霊の代表格でもあるので神話的な意味も込められているだろう (Preuss 1897; Schmidt 1923/24; Speiser 1936; Bühler 1961)⁹⁾。本島のガウス (Gauss) 湾のカヌーは舳先に深彫りで鰐が彫られているがその尻尾は人間の頭に変形している。そして繊維を編んだ飾りが舳先に装着されている (Haddon 1937: 300)。

舳先に鰐が彫られるのは確かにセピック川の Korewori スタイルの特徴である (写真 8)。しかし鰐が動物を咥える、あるいは鰐の嘴を咥えるように他の動物が彫られ、さらに口の左右に別の動物を加えるような、海洋文化館のカヌー装飾とは異なる。むしろ尖って先が曲がった鼻という点では Beak スタイルの様相も呈している (e.g. Bühler 1962)¹⁰⁾。また鰐の裏側 (腹側) に彫られた鋸歯状で四方に花びら状に広がる渦巻き文はおそらくセピック川の特徴と考えてよいだろう。

さらにセピック川中流域のカヌーは舳先部に船体を仕切るように波よけが装着されるが、これはショーテンのカヌーには見られない。また川のカヌーにはアウトリガー

が付かないのが普通である。ショーテン諸島のようになだらかに反るが基本的に真っ直ぐな細身の舳先を持ち、すぼまった断面を持つ船体はダルマン湾の東西、西はベルリン (Berlin) 湾、東はアストロラブ (Astrolabe) 湾、さらにシアシ海峡までの特徴のようである。

中型以上のカヌーはしばしば舷側板が装着され (Haddon 1937: 298-307)、また帆走用の大型カヌーになると舳先と艫を横断するように波よけが装着される (e.g. Neuhaus 1911: 347-365; Barlow and Lipset 1997)。これは本稿で取り上げたカヌーにはないが、地域差なのか機能差 (本稿のカヌーは小型のパドリングカヌーである) なのかは判断できない。またベルリン湾に行くと舳先と艫が反り上がった型式のものが出現する点が異なる (Neyret 1976: 142-151)¹¹⁾。

一方ニューアイルランド島北西に浮かぶセント・マシアス島まで行くと舳先の装飾が特徴的でショーテンの型式には似ていない。またニューアイルランド島やニューブリテン島のカヌー、とくに交易や戦闘用のカヌーは舳先と艫が高くそりがり、それぞれ鶏冠やカブトムシの角などを象り、鰐の装飾は見られなくなる (Stephan 1907)。ショーテンのように鰐が彫られるのはアドミラルティーまでに止まるようである。

フリーデリッチはショーテン型の船体はマヌス島などアドミラルティー諸島も基本的に類似していることを強調している (Friederici 1912: 266)。写真9はドイツのブレーメン海外博物館に収蔵されているマヌス島のカヌーである。船体の全形、X字下交差のペグなどショーテン諸島の構造に類似している。ただし舳先と艫にはタカ

ラガイを配した装飾になり、元型の鰐はすでにデフォルメしている。

断面が半円形ではなく上がすぼまった形で削りぬいた丸太を船体にするのはニューギニアからビスマルクまで見られる特徴である。セピック川河口から東方、フーオン半島付近まではその側板が高く、船体の上にもう一つ長い箱を置いたような形態になっており、船首と船尾側に高く装飾された波よけが付けられる。たとえばシアシ海峡交易網の中心たるシアシ (Siassi) 島やベルリン湾のタミ (Tami) 川河口のカヌーはこの舷側板が赤く塗られ全面に装飾を施される (Neuhaus 1911: 347-365) (写真10)。

船体に浅彫りされた連続渦巻き (メアンダー) は東方海上、とくにマッシュム地方の棍棒や石灰用籠に彫られた文様を想起させる (e.g. Haddon 1894: 184-196)。ホグビン論文のウェゲオ島のカヌーには船体に流線紋が観察できる (1935b: Plate IIA)。この文様は海洋文化館、南山両カヌーの船体の文様と曲線的な模様としては共通しているが、三者の文様は異なる。海洋文化館は5、6本の曲線が曲線からなるメアンダー、南山の資料は横にしたS字が互い違いに連続した模様、ホグビン論文の写真にある模様は銅鐸に見られるようないわゆる流紋のようである。

4.2. 部材

次にショーテン諸島のカヌーの腕木は2ないし3本が普通だが4本の場合もある。装着材 (connective) ないしペグは5~6組、あるいはそれ以上の数の組を用いた下交差 (under-crossed) 型である。浮き木の多くは両端に鰐が彫刻されている。浮き木の彫

刻は本稿で扱う2隻ともに見られる特徴であるが、これもアドミラルティーのカヌーと類似している (e.g. Thilenius 1903: Fig. 29; Ohnemus 1996: Fig. 397)。ウォゲオ島のカヌーはしばしば浮き木に取っ手が二つ付けられている。これは運搬のためであろう。

腕木の上に造られる甲板には3つの座席と背もたれ用の横木が渡してある点は南山の資料にはなく海洋文化館資料と一致する。大型カヌーでは甲板が2段になっており下段にはパドル、ポール、土器あるいは食料などが積載される。海洋文化館資料の方が外洋航海による交易活動により適した構造といえよう。

アウトリガーの腕木や浮き木であるがショーテンのように数本のX字交差に腕木が装着されるのはアドミラルティーやパラ・ミクロネシア¹²⁾に見られる (e.g. Thilenius 1903: Fig. 53) (写真9右、写真11)。2本ないし3本の腕木はX字交叉ペグの木の中央近くで結合されるというバランスも類似している。同じ傾向はビスマルク諸島の一部にも見られるが、ニューアイランド島やニューブリテン島に至ると、浮き木から真っ直ぐ立てた2本のペグに腕木を挟むような構造に変化する (Gräbner 37: 45)。ペグの上部はしばしば鳥を象る装飾がなされている。ショーテン諸島のアウトリガー構造に類似したものの詳細図はティレニウスがパラ・ミクロネシアのタウイ (Tau'i) 島から報告しているものであろう (Thilenius 1903: Fig. 29, 31 & 32)。

ショーテン諸島において帆は四角でココ椰子の葉から編まれ、帆にはヤード (帆の上桁) とブーム (下桁) が装着される。浮

き木は必ず右舷に付けられる (Haddon 1937: 299)。本稿で扱っている2隻のカヌーはパドリング用で帆はないが、ホグビンの写真を見るとショーテン諸島も同様に四角帆を使っていたようである (Hogbin 1935b: Plate IIIA)。またこのシアシ海峡から西にイリアン・ジャヤまで、さらに沖に浮かぶパラ・ミクロネシアからビスマルク諸島まで、おそらくインドネシアの影響で四角の帆が一般的である (写真9~11)。

5. おわりに

本稿では海洋文化館と南山大学人類学博物館に収蔵されたショーテン諸島産のアウトリガーカヌーについて報告と比較を行った。カヌーは単に水上運搬具として見るだけではなく、きわめて象徴性の強い物質文化として分析する必要性も論じられている (Munn 1977; Barlow and Lipset 1997; Tilley 2002; 後藤 印刷中 b)。たとえばインドネシアからニューギニアにかけてカヌーと住居建築との形態的および観念的類似性について指摘されている (Vroklage 1936)。とくにニューギニアからソロモン諸島およびバヌアツにかけてのカヌーはショーテン諸島の事例のように動物などを象った部位と螺旋などの装飾で充填された船体などが多く見られるが、その装飾のモチーフあるいは装飾部位と全体との関係を考えると、カヌーとは全く用途の異なる木椀、割れ目太鼓、骨壺など位相幾何学的に相似形である他の物質文化との比較分析も必要になってくるだろう (後藤 2009)。日本国内にもカヌー資料は少なからず存在し、また中にはすでに現地では入手、観察できない資料もある。今後はそのような収

蔵資料の再分析がひとつの重要な課題となるだろう（後藤 印刷中 c）。

〈付記〉

本稿に関して、後藤は南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2、石村は国際常民研究機構（神奈川大学本部）「海民・海域史の総合的研究（研究グループ 1-3）：環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究（後藤明代表）」による研究成果の一部である。

注

- 1) ホグビンは英語で skowten = スコーテンと表記しているが（Hogbin 1935b: 375）、この諸島を西欧人として最初に発見したオランダの探検家に因めばスホーテン諸島と呼ぶべきかもしれない。しかし南山大学人類学博物館および海洋文化館両館での記録はショーテン諸島となっているので本稿ではそれに従う。
- 2) 浮き木の先端が鰐や蛇のように彫刻されるは、エルミット（Hermit）諸島のカヌーなどで見られる（Parkinson 1999: 203 の写真、本稿写真 9）。その実物は現在ベルリンの民族学博物館で実見できる。
- 3) ペグを交差させてその交差部の上に腕木を置いて結縛する場合を下交差、交差部の下に腕木を置いて結縛すれば上交差（over-crossed）となる。またショーテン諸島の事例のようにペグをほぼ中央で交差させ、そのため X 字状を呈する場合と、ペグの上部で交差させるために△状を呈する場合などの地域差が知られている。また同じ下交差

でも X 字の中央の交差部に腕木を置いて結縛する場合（ショーテンやアドミラルティ諸島等）と、X 字の上の方で結縛する場合（エルミット諸島あるいは下の方で結縛する（アゴメス Agomes 諸島）といった地域差が見られる（cf. Thilenius 1903）。

- 4) この調査に当時大学院生として参加した早川正一南山大学名誉教授のご教示による。
- 5) このカヌーの収集に現場で立ち会った方の聞き取りは不可能であるが、高地部の調査に参加された早川正一名誉教授はこのカヌーが日本に送られてきたとき梱包を解いて陳列を行ったが、そのときアウトリガー部は輸送のために外されていたと記憶している。腕木とペグの部分が離れており自分たちが結縛した可能性もあるが、むしろアウトリガー部がすっぽりと外れており、船体に結んであったロタン紐の空隙に腕木を差し込んだのではないかということである。なおアウトリガーカヌーが輸送のためにアウトリガー部や帆、マストが外されて来ることは珍しいことではない。
- 6) ポリネシアやミクロネシアなどロタンの分布しない地域では船体もアウトリガー部も結縛はココ椰子繊維だが、メラネシアではアウトリガー部はロタン、船体はココ椰子繊維という違いが指摘できる（後藤 印刷中 a）。
- 7) おそらく erima が正しく、ダスティカ科の *Octomeles sumatrana* ないしその近種を意味するであろう。『世界有用植物事典』（平凡社、1989：743）によ

ると、東南アジアからニューギニアにかけての熱帯雨林地方に広く分布し、二次林的な林に多い。成長の早い、高さ 45~65 m に達する大高木である。木材は日本にも輸入され主に合板の芯用材、梱包材などに用いられるとされている。

- 8) 神戸市看護大学准教授紙村徹氏によると、エイプリル (April) 川は現在もお到達するのがかなり困難な川である。ショーテン諸島へ運ぶのなら、より近いウェワク南方のトリセリ山脈の森から伐採して運んだとする方が合理的ではないか。海洋文化館の記録はおそらく民族資料コレクターの説明を鵜呑みにしたのではないかという。
- 9) これらの地域は鰐の生息地なので鰐の意匠が見られるのは当然かもしれないが、鰐の生息しないポリネシアにも鰐の意匠の変形と思われるモチーフが重要であるのは興味深い民族の記憶 (folk-memory) の問題を提示する。たとえばフィジー、トンガ、サモア、さらにマルケサスに見られる戦闘用の棍棒 (多くは象徴?) の頭に鰐の形を想起させるものがある。ポリネシアに至ると神話では鰐は多くの場合、オオトカゲをモデルに変容している (Skinner 1964)。
- 10) 関連があるかどうか不明だが、セピック川河口のムリック (Murik) 集団のカヌーにおいてビークスタイルの彫像がカヌーの精霊として報告されている。モデルはコウモリやサイチョウのようである (Barlow and Lipset 1997: Figure 9, 12, & 13)。

11) 反り上がった舳先と艫はオセアニアではソロモン諸島のモン (*mon*) 型カヌーの特徴であるが、むしろマルク海のクラコラ (*korakora*) 型の影響と見る方が適当であろう。ベルリン湾より西のイリアン・ジャヤは明らかにインドネシアの影響がアウトリガー構造 (ダブルアウトリガー式の出現) や四角帆に見られるからである (Neyret 1974: 151-162)。

12) パラ・ミクロネシア (Para-Micronesia) とはマヌス島の西方に浮かぶ Wuvulu 島、Aua 島、Ninigo 諸島、Luf 諸島、Kaniet 島などを指す総称である。ドイツ時代には西方諸島 (Westliche Inseln) と総称されていた。その名称の由来は肌や髪の色がミクロネシアに近く、ミクロネシアとメラネシアの混合文化のように思われていたからである (Koch 1969: 133-138)。文化変容が早くから起こり、文献や研究がもつとも少ない地域でもある。物質文化も独特で刀や櫂などにはミクロネシアのキリバスとの類似性も指摘されているが、カヌーの形態、多数の X 字型のペグで浮き木用の腕木を固定する方法などは周辺のメラネシア、マヌスやビスマルク、またこの諸島の南に浮かぶショーテン諸島により近いものと思われる。

引用文献

- Barlow, Kathelen and David Lipset
1997 Dialogics of material culture: male and female in Murik outrigger canoes.
American Ethnologist 24 (1): 4-36.

- Bühler, Alfred
 1961 Kultkrokodile vom Korewori. *Zeitschrift für Ethnologie* 86: 183-207.
 1962 *The Art of the South Sea Islands*. New York: Crown Publisher.
- Friederici, Georg
 1912 *Beiträge zur Völker-und Sprachenkund von Deutsch-Neuguinea*. Deutschen Schutzbieten, Mitteilungen, Ergänzungsheft 5, pp. 1-324.
- 後藤 明
 2003 『海を渡ったモンゴロイド』、講談社。
 2009 「オセアニア航海民の魂の器としてのカヌー」『アジア遊学』128: 136-147。
 印刷中 a 「オセアニア・カヌーの材質について——海洋文化館収蔵カヌー植物材質の射程——」『沖縄国際海洋博覧会記念公園管理財団・総合研究センター委託研究報告書』
 印刷中 b 「船の旅化粧」『万葉古代学研究所年報』9
 印刷中 c 「カヌーにおける技術的選択について——ニューギニア北東海上部の資料を中心に——」『南山大学人類学博物館オープンリサーチ・プロジェクト』報告書。
- Gräbner, F.
 1905 Kulturkreise und Kulturschichten in Ozeanien. *Zeitschrift für Ethnologie* 37: 28-53.
- Haddon, A. C.
 1894 *The Decorative Art of British New Guinea: a Study in Papuan Ethnography*. Dublin: Royal Irish Academy.
 1937 *Canoes of Melanesia, Queensland, and New Guinea*. (*Canoes of Oceania*, Vol. 2), B. P. Bishop Museum, Special Publications 28.
- Hogbin, Ian H.
 1935a Native culture of Wogeo: Report of Field Work in New Guinea. *Oceania* 5: 308-337.
 1935b Trading expedition in northern New Guinea. *Oceania* 5: 375-340.
 1970 *The Island of Menstruating Men: Religion in Wogeo, New Guinea*. Scraton: Chandler Publishing.
- 石村 智
 2011 『ラピタ人の考古学』、溪水社。
- クネヒト、ペドロ
 1998 「南山大学による「東ニューギニア学術調査団」の行動と成果の回顧」『アカデミア 人文・社会科学編』67: 83-108.
- Koch, Gerd
 1969 *Südsee*. Berlin: Museum für Völkerkunde.
- Lommel, Andreas
 1939 *Schlange und Drache in Hinterindien und Indonesie*. Inaugural-Dissertation, Frankfurt am Main.
- Munn, Nancy D.
 1977 The spatiotemporal transformations of Gawa canoes. *Journal de la Société des Océanistes* 33: 30-53.
- Neuhauss, R.
 1911 *Deutsch Neu-Guinea*, Vol 1. Berlin.
- Newton, Douglas
 1971 *Crocodile and Cassowary: Religious Art of the Upper Sepik River, New Guinea*. New York: The Museum of Primitive Art.
- Neyret, Jean
 1974 *Pirogues Océaniques*. 2 vols. Paris: Association des Amis des Musées de la Marine.
- 沼沢喜市

- 1969 『ニューギニア・ピグミー探検』、大陸書房。
- Ohnemus, Sulvia
1998 *An Ethnology of the Admiralty Islanders*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Parkinson, R.
1907 *Dreißig Jahre in der Südsee*. Stuttgart: Berlag von Streder & Schröder. (R. Parkinson, 1999, *Thirty Years in the South Seas*. Bathurst: Crawford House Publishing)
- Preus, K.
1897 Künstlerrische Darstellungen aus Kaiser-Wilhelms-Land in ihrer Bedeutung für die Ethnologie. *Zeitschrift für Ethnologie* 20: 77-139.
- Schmidt, P. Joseph
1923/24 Die Ethnographie der Nor-Papua (Murik-Kaup-Karau) bei Dallmannhafen, Neu-Guinea. *Anthropos* 18/19: 700-732.
- Skinner, H. D.
1964 Crocodile and lizard in New Zealand Myth and Material Culture. *Records of the Otago Museum* 31 (1): 1-43.
- Speiser, Felixs
1936 Über Kunststile in Melanesien. *Zeitschrift für Ethnologie* 68: 304-369.
- Stephan, Emil
1907 *Südseekunst: Beiträge zur Kunst des Bismarck-Archipels und zur Urgeschichte der Kunst überhaupt*. Berlin: Dietrich Reimer.
- Terrell, John Edward
2001 Ethnolinguistic groups, language boundaries, and culture history: a sociolinguistic model. In: J. E. Terrell (ed.), *Archaeology, Language, and History*, pp. 199-221. London: Bergin & Garvey.
- Thilenius, G.
1903 *Ethnographische Ergebnisse aus Melanesien. Theil II: Die westlichen Inseln des Bismarck-Archipels*. Leipzig: Druck von Ahrhardt Karras.
- Tilley, Christopher
2002 The metaphorical transformations of Wala canoes. In: V. Buchli (ed.), *The Material Culture Reader*, pp. 27-55. Oxford: Berg.
- 牛山純一
1975 『海洋文化館調査報告』、日本映像記録センター。
- Vroklage, B. A. G. von
1936 Das Schiff in den Megalithkulturen Südostasiens und der Südsee. *Anthropos* 31: 712-757.

**A report on outrigger-canoes from the Schouten Islands, Papua New Guinea:
Two canoes from Anthropological Museum, Nanzan University,
and Oceanic Culture Museum, Okinawa Maritime Expo Memorial Park.**

GOTO Akira and Tomo ISHIMURA

This essay reports two outrigger canoes collected from the Schouten Islands, northeast of New Guinea. The canoe collected during 1960s' is preserved in the Anthropological Museum, Nanzan University, and the canoe collected during 1970s' is in the Oceanic Culture Museum, Okinawa Maritime Expo. Memorial Park. These canoes were collected with other items such as paddles, bailers and so on. The Schouten Islands are located in a complicated situation where of both Austronesian and Non-Austronesian language groups interact. At the same time, these islands lie in an important location for considering the Austronesian expansion and the origin of the "Lapita Cultural Complex." However, researches have been limited so far, and the canoes from these islands are rarely shown in museums of Japan and other countries.

The purpose of this report is to identify the characteristics of these two canoes, and compare them with those from adjacent areas. As a result of analysis, we concluded that although the decoration of these canoes (e.g. motif of crocodile) have similarities with canoes from mainland New Guinea (e.g. Sepik), the form of hull and the structure of outrigger device contain similar features with those in Admiralties and Para-Micronesia.

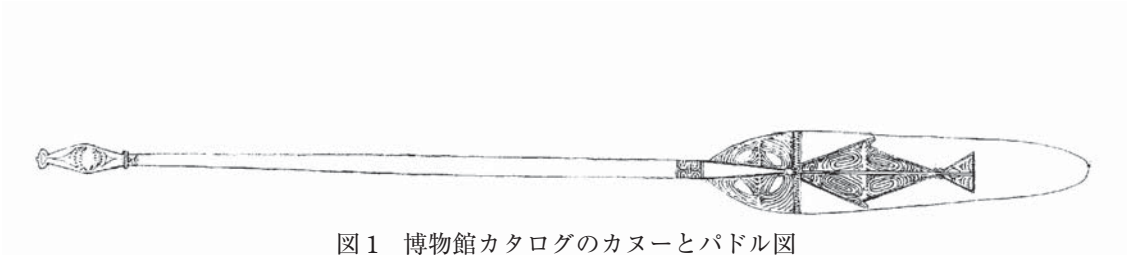
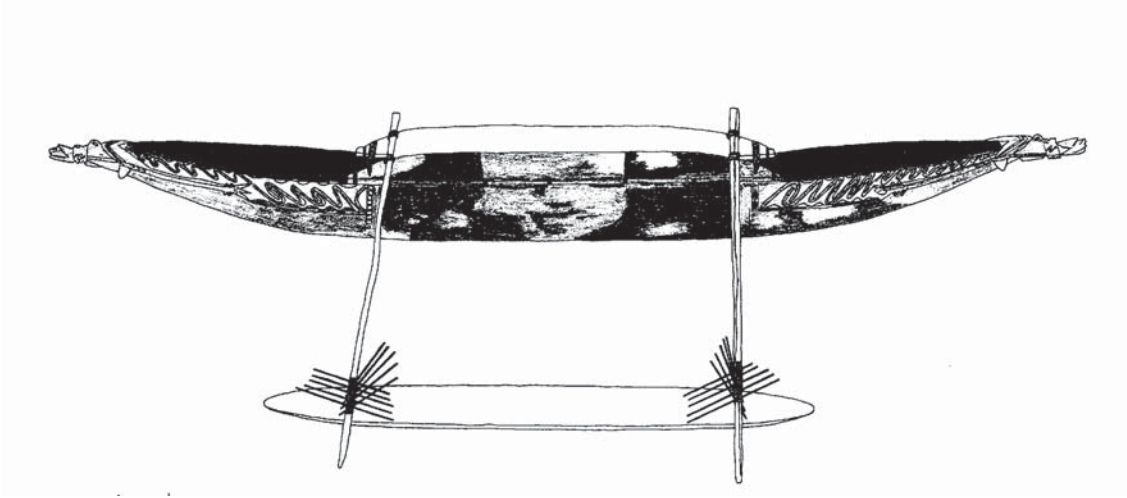


図1 博物館カタログのカヌーとパドル図

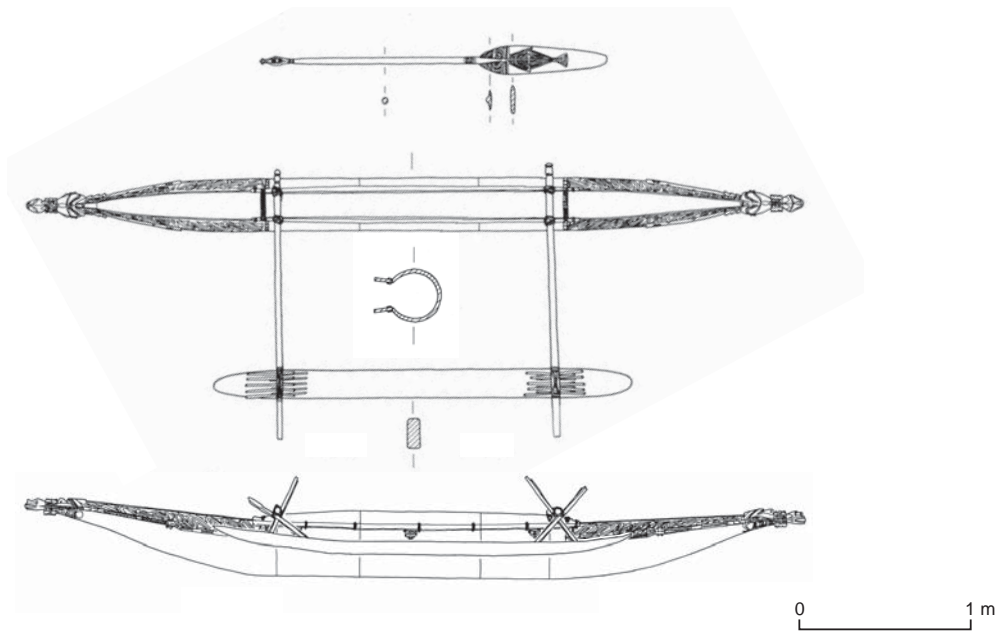


図2 南山大学人類学博物館カヌーの実測図

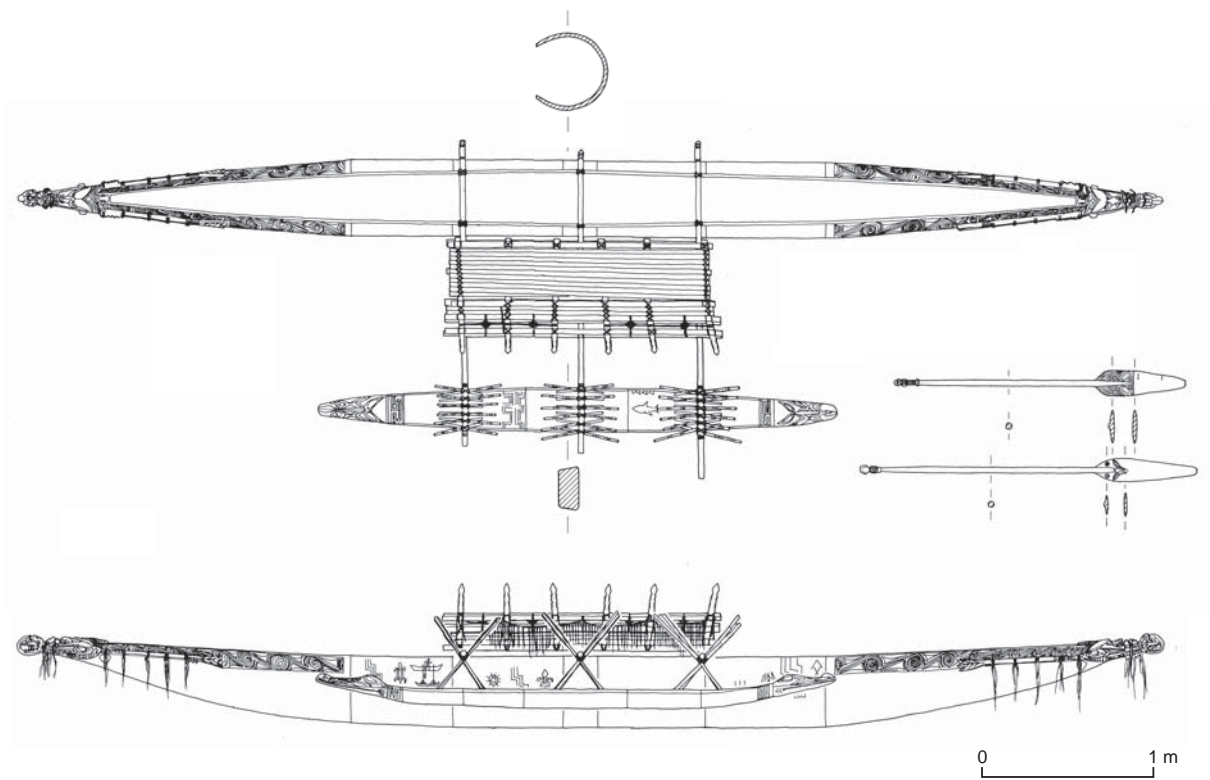


図3 海洋文化館カヌーの実測図



写真1 ニューギニア島北東海域地図



写真2 ショーテン諸島付近



写真3 南山カヌーの全形
(撮影：石村 智)



写真4 南山カヌーのアウトリガー拡大写真
(撮影：石村 智)



写真5 海洋文化館のカヌー全体
(撮影：石村 智)

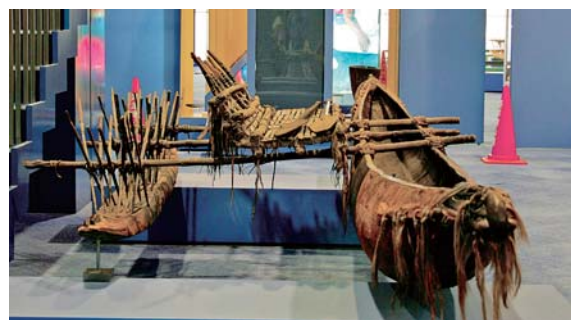


写真6 海洋文化館カヌーのアウトリガーと甲板
(撮影：後藤 明)



写真7 カヌーの舳先の意匠の比較 (撮影 石村 智)
 左：南山大学人類学博物館の資料、右：海洋文化館の資料



写真8 セピック川のカヌー
 (海洋文化館蔵 撮影：後藤 明)



写真9 アドミラルイティ諸島マヌス島のカヌー
 左：全形、右：アウトリガー部の拡大
 (ブレーメン海外博物館蔵 撮影：後藤 明)



写真10 シアシ島の帆走カヌー
 (ハンブルク民族学博物館
 撮影：後藤 明)



写真11 パラ・ミクロネシア、エルミット
 諸島のカヌー
 (ベルリン民族学博物館；Parkin-
 son 1999: 203 頁写真カヌーの実
 物 撮影：後藤 明)

鶴ヶ島市寄贈・今泉ニューギニア美術コレクションについて

後藤 明、中尾 世治、如法寺慶大、長谷川真美

はじめに

本稿では2010年12月に埼玉県鶴ヶ島市から委譲を受けた今泉オセアニア美術コレクションの譲渡経緯と南山大学人類学博物館における資料の取り扱いや現状について報告するものである。

筆者は2007年に東京国立博物館外来研究員の丸山清志氏から鶴ヶ島が所蔵するオセアニアコレクションの移転先を捜しているが、南山大学の人類学博物館で移管を受けることは可能かと打診された。そこで学内の博物館運営委員会に問い合わせを行った。審議の結果、ぜひいただきたいが、全点を収蔵することは収蔵庫の状況からして不可能であるとの結論を得た。その後、国内の某機関から全点の移管を受けるのは可能かという問い合わせがあったと聞かすが、その話も結局諸般の事情で実現しなかったようである。

収蔵状況はおそらく他の機関でも似たりよったりであると考え、複数の機関での分割委譲を提案し鶴ヶ島市もその案に賛成していただいた。分割案にさいし、いくつの機関ならベストということは決めるのは難しいが、あまり多くの機関に分散してしまうのは望ましくないと考えた。またもともと鶴ヶ島市で一括して収蔵展示していた資料であるので、委譲を受けた機関がその後も連携してさまざまな形で研究や展示に連携し、本来の意図を継承したいとも考えた。

そこでこのたびのように早稲田大学博物館と天理大学天理参考館と南山大学人類学博物館の3大学博物館で分割委譲の計画を立てた次第である。

分割方法であるが、各機関がほしい物をつまみ食いするのではなく、何らかの基準を設けて分割する方が望ましいと考えた。神像、装身具、武器のようなカテゴリーにそった分割も考えたが、それぞれの民族資料はそれぞれの地域でセットになって意味があると考え、地域による分割を提案した。その結果、天理大学ではニューギニア島の西部、イリアン・ジャヤおよび南部湾岸地帯、早稲田大学はニューギニア東部のセピック川から本島東部地区さらにトロブリアンド諸島付近まで、南山大学はその東ビスマルク諸島、ソロモン諸島以東の島嶼部、という形で分割を行った。

2009年12月に各大学に資料の運搬が行われた。その後南山大学では臨時収蔵庫を設けてもらって今日まで収蔵を行っている。そして2010年度春学期、筆者の大学院のゼミ生を中心に資料の確認調査を行った。その内容であるが鶴ヶ島市から委譲を受けたカタログにそって資料の確認、保存状態の精査、3次元にわたるサイズ計測、写真撮影という作業を行い、確認調査は終了した[写真1、2]。今後は人類学博物館が2013年にリニューアルにさいしては新博物館の収蔵庫に全展収容の予定であり、

さらに詳細な分析、カタログ化を目指す計画である。また新博物館の展示ではすでに収蔵されているニューギニア・コレクションとあわせて、有効な展示方法を模索して行きたい。

なお2010年11月24日、南山大学人類学研究所主催の催し「人類学フェスティバル in NAGOYA」が開催されたがその中での企画として、今泉コレクションの一部が展示として利用された(山本 2011) [写真3]。(後藤 明)

1. 今泉コレクションの成立——収集と寄贈の経緯

本章では、今泉コレクションがどのように成立したかを明らかにする。まず、鶴ヶ島市へと寄贈されるまでの過程を、つぎに今泉コレクションの収集の経緯を述べる。

昭和58から昭和61年のあいだ(1983-1986年)、パプアニューギニアを中心にしたオセアニアの「民族造形品」の輸入販売を専門とした「パシフィック・アーツ」というギャラリーを大橋昭夫氏が営んでいた(大橋 2005: 166)。昭和61(1986)年の春、今泉隆平氏¹⁾が、「パシフィック・アーツ」の「民族造形品」を購入し、これを今泉氏の故郷の新潟県南魚沼郡塩沢町²⁾に寄贈することで博物館をつくりたい旨を提案した(ibid.: 167)。これに大橋氏が承諾し、その後昭和61年から平成2年までの五年間(1986-1990年)、大橋氏は博物館資料の補充の為に収集をおこなった(ibid.: 178)。平成2(1990)年に塩沢町立今泉博物館³⁾が開館したが、補充された資料のうち平成元(1989)年から平成2(1990)年にかけて収集したものは今泉博物館に収蔵されず、

塩沢町の法授寺の本堂と大橋氏の倉庫に保管された(ibid.: 178)。平成7(1995)年と平成8(1996)年に二度に分けて、これらの資料が今泉隆平氏の弟で埼玉県鶴ヶ島市在住の今泉清詞氏の力添えによって、鶴ヶ島市に寄贈されることになった(ibid.: 163, 178)。平成17(2005)年の時点で、今泉コレクションは、新潟県塩沢町立今泉博物館、塩沢町・薬照寺の宝物殿と本堂、鶴ヶ島市第二小学校展示室に三分割されていた(ibid.: 178)。

今泉コレクションとは、大橋昭夫氏が収集し、今泉隆平氏が買い取り、塩沢町と鶴ヶ島市に寄贈したオセアニアの民族資料群全体をさす。そして、今泉コレクションは、輸入販売を目的として収集した資料と博物館の展示・収蔵を目的として収集した資料に大別できる。それぞれの収集の経緯を述べたい。

パプアニューギニアでは、独立の二年前の昭和48(1973)年に、国連の信託統治をおこなっていたオーストラリア政府の指導の下に、「文化開発法」(The Cultural Development Act)が成立し、その法に基づいて「国立文化評議会」(National Cultural Council)が設立された(Voi 1994: 89)。この国立評議会は、文化と芸術の振興事業の推進とともに、文化財保護を目的とした政府によるより規模の大きい博物館やアート・ギャラリーの設置などを文化と芸術の保護事業として提言していた(ibid.: 89-90)。しかし、「国立観光局」(National Tourism Office)の職員が国立文化評議会に参加するようになり、これらの施策が効力を持ったのは昭和56(1981)年まででそれ以降は、観光へと重点が置かれていった

(ibid.: 90-91)。

おそらくこうした文化財政策の変更の流れと対応して、昭和 54 (1979) 年、パプアニューギニア政府は民族造形品を取扱う業者を捜すために世界各国に使節団を派遣、日本にも経済使節団が来訪した (大橋 2005 : 169)。なかなか業者をみつけられなかったところ、大橋氏と出会うことになった (ibid.: 169)。こうして日本での市場開拓を期待したパプアニューギニア政府の要請から、大橋氏は民族造形品の輸入販売業を始めた (ibid.: 165, 169)。

昭和 55 (1980) 年、大橋氏は初めてパプアニューギニアを訪れ、昭和 60 (1985) 年まで毎年収集活動をおこなった (ibid.: 171, 174)。多様な表現様式がみられ、著名な「セピック・アート」が手に入るという効率性から、直接の収集はセピック地方で行い、他の地域のはパプアニューギニア国内の専門業者から購入した (ibid.: 173-174)。セピック地方では第二次大戦後から専門業者による収集活動が活発化し、特に 1980 年代は非常に盛んになっていた (Wasori 1990: 596)。このことをうけ、「国有文化財 (保護) 法」(The National Cultural Property (Preservation) Act) が昭和 40 (1965) 年に制定され、国立博物館の調査によってセピック地方を重点的に昭和 55 (1980) 年までに 300 点以上、平成 2 (1990) 年までには新たに 350 点を国指定文化財とし、獲得および輸出を禁じていた (Eoe 1990: 599-600)。このような状況のなかでセピック地方を中心に輸入販売を目的として主に直接収集された資料が約 3000 点、塩沢町に寄贈された。

昭和 61 年から平成 2 年まで (1986-1990

年) の 5 年間は、博物館資料の補充を目的として、すでに海外に持ち出された民族資料をオーストラリアや欧米の市場やコレクターからの購入によって大橋氏が収集した (大橋 2005 : 174-175, 178)。購入元の主な専門業者としては、オーストラリアのシドニーに拠点を置く「ニューギニア・プリミティブ・アーツ」、「ギャラリー・プリミティブ」など、個人のコレクターとしては、オランダ人のディーラーでありニューヨークで「アート・オブ・マン・ギャラリー」を主催したロバート・イエペスなどが挙げられる (ibid.: 175-176)。そのほかオークションも利用し、国際的なものとしては、ロンドン、ニューヨークのサザビーズ (Sotheby's) やクリスティーズ (Christie's)、ローカルなものとしては、シドニーのサザビーズやローソンズ (James R. Lawson's) から大橋氏が購入した (ibid.: 178)。このようなかたちで収集された資料のうち、昭和 61 (1986) 年から昭和 63 (1988) 年にかけて収集されたものは塩沢町へ、平成元 (1989) 年、平成 2 (1990) 年に収集したものは鶴ヶ島市へ寄贈された (ibid.: 163, 178)。

鶴ヶ島市より南山大学人類学博物館に分割移譲された資料は、平成元 (1989) 年、平成 2 (1990) 年に、博物館資料の補充を目的として、オーストラリアや欧米の専門業者とオークションを介して、大橋氏が収集したものである。入手元が不明とされている資料が大半ではあるが、一部には鶴ヶ島市の「オセアニア民族造形美術調査カード」に記録が残されている。主な専門業者としては、オーストラリアのゴールド・コーストに在住していたピーター・ハリナン

(Peter Hallinan) (ibid.: 176) の4点、メルボルンのディーラーであった H. M. リサワー (H. M. Lissauer) (ibid.: 176) の2点、専門業者と推測されるトッド・バーリン (Todd Barlin) の30点などが挙げられる。オークションとしては、シドニーのローソンズから入手した資料が3点ある。(中尾世治)

2. コレクションの内容

南山大学が所蔵することになる資料の総数は約160点であり、丸太を削りぬいたスリットゴングや位階象徴像などの大型資料から仮面や棍棒などの中型、小型の資料までがある。そのうち、我々が現在までに確認および整理作業⁴⁾を行なった資料は144点である。その内訳は、パプアニューギニア=25点、ソロモン諸島=49点、フィジー=24点、バヌアツ=11点、サモア=3点、トンガ=5点、クック諸島=1点、ニューカレドニア=4点、オーストラリア=13点、キリバス=4点、ニュージーランド=3点、チリ領イースター島=1点、仏領ポリネシア・オーストラル諸島=1点である。

パプアニューギニアにおける収集地は東ニューブリテン州ガゼレ半島、ギャゼレ半島、ニューアイルランド州ニューアイルランド島、タバル島、タタウ島、北ソロモン州モートロック諸島、ニューブリテン島となっており、分散した形である。その内容はファイヤードダンス用の被り面やマランガン像など中型のものが中心となっている。次に、ソロモン諸島であるが、ここもパプアニューギニアと同様に収集地がいくつかの地域に分けられる。ソロモン諸島、サンタクルズ島、マライタ島、ガダルカナル島、

サンクリストバル島、サンタカタリナ島である。その内容は主に、棍棒、腕輪、胸像、杖、鉢、位階章などが挙げられ、また、マライタ島からは貝ビーズ製の貝貨が収集されている。両者と並んで点数が多いフィジーであるが、その内容はかなり一貫したのものとなっている。投げ棍棒、戦闘用棍棒、舞踏用棍棒など、棍棒がそのほとんどの割合を占めている。これらの地域と同様に収集地が分散しているのがバヌアツである。その内容はマレクラ島、ムブリム島であり、その全体に対して農耕儀礼用の精霊の仮面と棍棒の比率が大きい。他には、野ブタの牙と粘土製の舞踏用人形や頭部彫刻が挙げられる。ちなみに、先述したヘゴ製の位階象徴像もバヌアツのものであるが、まだ整理作業は行われていない。

さて、サモアとトンガ、両者から収集された資料は、サモアはその全てが棍棒であり、トンガもそのほとんどが棍棒である。4点が収集されているニューカレドニアもこれらと似ており、棍棒が主な資料として挙げられる。キリバスはギルバート諸島とライン諸島に収集地が分散し、ギルバート諸島からは人歯のネックレス、ライン諸島からはウナギ漁の罟が収集されている。ニュージーランドでは3点が収集され、同じものはなく、呪術用の杖、疑似餌、タパ木槌がその内容である。オーストラリアはその収集地にクイーンズランド州が挙げられており、わりと種類が多い。その内容は戦闘用楯が最も数が多く、棍棒、ブーメランが主な資料であり、他にディジュリドゥと呼ばれる楽器などが収集されている。

最後に資料数が1点の地域とその内容を紹介しておく。クック諸島が儀礼用石斧、

チリ領イースター島が男性像、仏領ポリネシア・オーストラル諸島が儀礼用櫛である。

以上が、南山大学人類学博物館が分割移譲され、我々が整理作業を行った資料群である。なお、これらはいずれも小型もしくは中型の資料であり、スリットゴングや位階象徴像などの大型資料に関しては作業人数、安全面などを考慮し、現状では作業が行われていない。この内容について詳しくは次章の長谷川を参照していただきたい。

南山大学はもともとパプアニューギニア、セピック地方およびショウテン諸島の民族資料を所蔵しており、これらは世界的にみても貴重なコレクションである。今回の鶴ヶ島コレクションの移譲によって、今までカバーされていなかったメラネシア地域の資料が拡充した形となり、その数と内容はともに充実したものとなった、といえるだろう。これらの資料はオセアニア研究者や教員、または学生にとっても、研究対象として、教育の教材として、興味・関心を刺激するものとして、非常に意義深いものになると考えられる。このような貴重な資料をいかに我々が活用し、さらには後世に残していけるか、今後の活動へつなげていくことが望まれる。(如法寺慶大)

3. コレクション整理作業報告

資料は南山大学へ搬入された後、一時保管場所としてG棟1階「心理工作室」に移動させ、現在も同室にて保管されている。その後、筆者を含む南山大学大学院人間文化研究科の大学院生3名を中心に2010年8月4日～6日、18日～23日の日程で整理作業を行った。これは、南山大学人類学博物館所蔵資料として登録させるための基礎

作業として、併せて同市より移譲されたメタデータとつき合わせ、点数確認、資料番号の合否、台帳の有無の確認、計測、撮影、劣化状況、収集地、使用素材等を調査した。また、資料はプラスチック梱包材に包まれた状態で搬入・保管されていたため、余分な梱包材を処分し、整理作業の後は薄葉紙で梱包し直し、再び保管場所へ戻す作業も行った。

この調査と並行して、今年の夏の猛暑によって資料の劣化が見られたため、出来る限りの保護処置の検討・実施が早急に求められた。資料の量、重さ、大きさに見合った保管・作業スペースと作業人員の確保が困難だったため、作業は苦難を強いられたが、防虫・防カビ対策として薬剤薫蒸、虫害対策として害虫侵入状況の調査、防虫剤（エコミューアーFTプレート）の設置、湿度管理・換気対策として扇風機の設置、天井を有効利用することで資料と資料の間のスペースを広く確保すること、などの処置を施した。

この整理作業では、現状（鶴ヶ島市で管理されていた時）のデータ管理体制を踏襲し、鶴ヶ島市作成の資料番号、資料台帳の内容（書式、観察項目、資料名称など）をほぼそのまま利用して行われた⁵⁾。この整理作業で新たに各資料へ加えられた情報⁶⁾は、三方位（ $x \times y \times z$ ）の計測値（それまでは最大値のみが記載されていた）、より詳細な材質名称（それまでは見落とされていたり大雑把だったりした箇所があった）、劣化状況等の資料の状態、デジタル一眼カメラによる四面（正面・背面・右側面・左側面）展開撮影および細部拡大撮影の写真データ、その他の備考といったところであ

る。現時点で164点中147点の資料の整理が完了し、博物館資料として登録する準備が整った。未整理の残り17点は、その大半が大型資料であり少人数での手作業では危険が伴うため、また、一部の資料で劣化が激しく作業が困難であったため、現在その適切な整理作業の方法を検討中である。

なお、以上の整理作業を済ませた時点で、一部の資料は一般公開されている。2010年11月21日には南山大学名古屋キャンパスにて、南山大学人類学研究所主催イベント「人類学フェスティバル2010 in NAGOYA 人類学のおもちゃ箱」の企画として、仮面や鉢など6点が、続く2010年12月9日～16日には南山大学人類学博物館にて、博物館学芸員養成課程の展示実習として、仮面と彫像4点が、同大学の学部生らによって展示・公開された。

現在、事後作業として、写真データのナンバリング、手書き台帳のデジタルデータ化を進めている。デジタルデータ化は、南山大学人類学博物館作成の既存の生活資料用の書式（エクセルファイル）に入力することとし、2014年に新設される南山大学人類学博物館で本格的に展示・データ利用が出来るよう、リニューアルオープンまでに完了させる予定で入力作業を進めている。

4. おわりに

最後に、以上の整理作業から明らかになった課題を二つ述べておく。まず一つは、資料にとって最良の保管状態を確保しなくてはならないことである。様々な事情がある中で管理が行われている状況ではあるが、それでもなお、常に現状に対する危機意識を持って長期的な改善策を考えてい

く必要がある。場合によっては思い切った修復を敢行する必要もあるだろう。ただし、この資料群の特徴として、その多くが木や骨、泥、ゴム、果てはクモの巣といった、有機素材が複合的に用いられている点に留意しなくてはならない。各資料の素材、状態に見合った方法でなければ、あらゆる対策は不十分・無意味で、場合によっては状況を悪化させてしまう危険があり、管理・修繕の実施には、十分な検討と注意が必要である。

また、もう一つは、より良い資料の活用を目指したデータの管理体制を整えることである。当館の資料として、展示においても、データ管理においても、既存の資料と首尾よく統合させることが必要である。また、将来この資料群が当博物館に至った経緯に関係する施設等（今泉博物館・鶴ヶ島市・早稲田大学・天理大学など）と情報の共有や、連携活動に取り組むには、各資料・各施設の独自性・個別性を尊重しつつ、各資料・各施設である程度汎用可能なデータ管理を行う必要があるだろう。

さらに、当館は世界的にも貴重なコレクションを有する博物館である。今後さらなる利用の幅を広げるべく、国内外の博物館や他分野へアピールし、連携を図っていくために、データ管理においても国際的に通用するような体制を整えることが望まれる。国内において共用データベースの国際標準というのはまだ確立されていない状況にあるが、大学組織全体でその方法が検討されていくことを期待したい。

以上の課題から言えることは、何よりも「基礎」が侮れない重要な部分となることであろう。つまり、現状手作業で取り組め

る整理作業やデータ入力等の質が最も問われることである。将来、誰が取り扱っても不便なく柔軟に利用・対応できるよう、しっかりとした基礎データの構築を目指して、正確に慎重に、計画的に今後も作業を進めていく所存である。

謝辞

本報告書にて報告した整理作業では、南山大学人文学部の江本純先生、黒沢浩先生および南山大学人類学博物館の職員の皆様に大変お世話になりましたことを、この場を借りて篤く御礼申し上げます。ありがとうございました。(長谷川真美)

注

- 1) 今泉隆平氏は、明治41(1908)年に新潟県南魚沼郡石打村に生まれ、石打村役場で公職に就く(大橋 2005:164)。昭和29(1954)年に埼玉県朝霞に転居し、養鶏業を営む(ibid.: 164)。市町村合併の際に昭和30(1955)年に石打村長に就任し、昭和32(1957)年に、西武新宿線の新所沢駅付近に開拓農として広大な開墾地を手に入れて入植(ibid.: 164)。ほどなくその地域で宅地開発が始まり、土地が急騰し、資産家となった(ibid.: 164)。平成9(1997)年3月に逝去、享年89歳(ibid.: 163)。
- 2) 現在の新潟県南魚沼市。
- 3) 現在の南魚沼市立今泉博物館。
- 4) この作業は博物館資料登録への基礎作業として行われた。この作業は鶴ヶ島市より資料とともに移譲された台帳と写真等を用いて、資料の点数、資料番号、台帳および写真の有無を一つ一つ

確認する作業であり、さらに、計測、写真撮影、劣化状態を調査した上で、薄用紙とプラスチック梱包材で梱包するまでの作業を指す。

- 5) 個別資料の認識が出来ない状態にあったセット物の資料(V-270-2S)は、新たに枝番a~cを振ってカウントし直すなど、一部で現状を改変した。
- 6) 各資料における調査情報の記録方法や、劣化状況の判断は、主に北海道立北方民族博物館の手法(笹倉 2000)や「資料状態調査マニュアル」(金山 2007:25)を参考に行った。

参考文献

大橋昭夫

2005「現代文明への警鐘——鶴ヶ島市「オセアニア・コレクション」の意義」、埼玉県鶴ヶ島市教育委員会編『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』:163-210、里文出版。

金山正子

2007「複合的な素材を含む資料の状態調査法」、『元興寺文化財研究所 研究報告 2006』:21-32.

笹倉いる美

2000「北海道立北方民族博物館の所蔵資料とその整理について」、『北海道立北方民族博物館研究紀要』:9:85-104.

Eoe, S. M.

1990 The National Cultural Property (Preservation) Act and the Art of the Sepik. In: N. Lutkehaus (ed.), *Sepik heritage: tradition and change in Papua New Guinea*, pp. 598-601. Durham: Carolina Academic Press.

Voi, M.

- 1994 An Overview of Cultural Policy in Papua New Guinea since 1974. In L. Lindstrom and G. White (eds.), *Culture, Kastom, Tradition.*: 87-94. Suva; Institute of Pacific Studies, The University of the South Pacific.
- Wasori, J.
1990 Sepik Artifacts in the National and Provincial Framework. In N. Lutkehaus, N (ed.) *Sepik heritage: tradition and change in Papua New Guinea*, pp. 596-597. Durham: Carolina Academic Press.
- 山本祥子
2011 「文化人類学的資料の展示：鶴ヶ島オセアニアコレクションの例」、南山大学人文学部提出研究プロジェクト論文。

A Report on the Imaizumi Oceanic Art Collection, Donated from the City of Tsurugashima.

GOTO Akira, NAKAO Seizi, NYOHJOJI Keita and HASEGAWA Mami

This paper reports the New Guinea Art Collection delegated from Tsurugashima City, Saitama Prefecture. The collection was originally donated by Imaizumi to the City of Tsurugashima. The collection has been used for exhibitions and workshops educational in which school students and citizens have participated. However, for the financial and management reasons, the city has decided to transfer the collection to research institute. Since the collection is extensive (more than 2,000 items), it is divided into three institutes, Waseda University Museum, Tenri Sankokan Museum of Tenri University, and Anthropological Museum of Nanzan University. Our Museum at Nanzan has received specimens mainly from Island Melanesia (Bismarck, Solomons, Vanuatu and Fiji), Polynesia, Micronesia and Australia. We have then started to check the status of the collection in order to use it for the future exhibition to be presented in 2013 at newly built museum.



写真1 コレクションの確認調査



写真2 資料の計測



写真3 人類学フェスティバル in Nagoya における展示
(2010年11月21日)

インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベールが見た馬と牛¹⁾

加藤 隆浩

1. はじめに

17世紀のクロニスタ、インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベールは、『インカ皇統記』第9書で長文を費やし、旧大陸から新大陸にもたらされた品々のリストに、あまたのエピソードを加え、アメリカ大陸でそれらの産物がどのように拡大、浸透していったかを詳細に描写している。彼はその記述の目的を次のように説明する。「当代の、そして次代の人びとにとって、スペイン人による征服以前のペルーには存在しなかった事物を知ることは興味深いことであろうと思われるので、そのためにいくつかの章を割くことにしたが、そうすることによって、一見したところ人間の生活に不可欠と思われるものを数多く欠きながらも、かの地のインディオたちが日々の生活に満足して暮らしていたことが分かるというものである」(ガルシラーソ 1986: 445/446)。

この文章から多くの事柄を指摘できるが、少なくとも3つの重要な事柄を読み取っておかなければならない。1) 作者には、同時代に起こった事柄、知りえた事実を書き記しておくというクロニスタとしての文字通りの使命感が満ち溢れていること。2) インカは人間生活に不可欠なものを欠いてもなお高度な文明を構築しえたことを証明し、それによってインカ文明を礼賛しようとしていること。3) 人間にとって不可欠なものを数々持ち込みえたスベ

イン文化への暗黙の敬意、である。

とはいえ、1) はよしとしても、2) と3) は矛盾するようにも思える。なぜなら、一方で征服された側の文化を美化しその文化に高い特別な位置を与えながら、他方では、「不可欠なものを」すべてを供給できる最高の到達点にスペイン文化をおいているからである。メスティーソ文化とは所詮そうした矛盾に満ちた両面をもつもの、と片付けてしまうことも可能性かもしれないが、しかし、この「矛盾」は、混乱でも錯乱でもないことは、インカ・ガルシラーソ自身が記した系統立ったクロニカを読めばすぐに理解できる。

メスティーソ的判断を一般化することはできないが、少なくともはっきりしていることは、ここでの判断は、何もスペイン的なものとインカのそれとを足して2で割って得られる平均値ではないし、ましてや、征服戦の勝敗の結果に価値判断を委ねるものでもない。われわれのクロニスタがインカを礼賛するのは、スペインとの優劣の比較から出てくる評価ではなく、インカの社会や文化への絶対的評価の表明でしかない。言い換えれば、こうした観点は、スペインはスペイン、インカはインカと区別し、スペインの文化とは無関係に独自の文明を築いたという事実を述べるだけのことである²⁾。そして、スペイン文化が生活の必要を満たしてくれるものと評定するのも、た

だ単にスペインの事物が驚嘆すべきものと考え、その文化のレベルについて言及しているにすぎない。要するに、クロニカには、インカの事物とスペイン産のものが並記されているが、それは、絶対的な価値のものさしに照らして文化を測定されているのではなく、ある意味で、各々に固有な価値を見出そうとする文化相対主義的な態度で書かれたことになる。

彼は時々「私はインディオだ」と書くが、それによって、自らのメスティーソという生き立ちを否定したり、インディオ性を自虐的に告白しようとしているわけではない。彼は、スペインの血を受けながらも、インディオの側に立ってモノを見ることができる——また「インディオ」「メスティーソ」と言わなければ、逆に、スペイン人の視点から——と宣言しているだけのことであり、そこにはスペインの側のみならず、忘れられがちな先住民の側——ただし、共にガルシラーソなりの——からの見方も含めてバランスのとれたメスティーソならではの価値観が担保されている。だからこそ彼はそのパラダイムを操作し、自らを堂々と正当化することができる。実際、そうした営為——『インカ皇統記』を書くという行為もこれに当たる——の根底には、彼固有のパラダイムのポリティクスが作用しているわけである³⁾。だとすると、上記の箇所からは、旧大陸からもたらされた事物について、スペイン、インカそれぞれ別々の側からの視座で書かれた、インカ・ガルシラーソのコメントを得ることができるはずである。

インカ・ガルシラーソの挙げたリストには、さまざまなものが記載されているが、

ここでは、別の論考(加藤 2009;2010a)で考察中の馬を取り上げ、それがインディオにとってどのようなものであったを検証し、それを基に、先住民の思考様式の一部を明らかにする予定である。馬をテーマとする理由はいろいろあるが、まずは多岐にわたる多くの事例があること。何よりも、それらがインカ・ガルシラーソのおかげで生き生きと描写されていることである。その上、断片的ではあるが、他のさまざまなクロニカにも民族誌学的資料が紛れ込んでおり、ガルシラーソの言及を裏付けることが可能ということも重要である。また、馬は、これまで征服の軍事作戦上の役割に関してのみ注目され、しかも、それはスペイン側の視座に立った通り一遍の分析にとどまっている。だからその動物が征服でほんとうに重要な役割を演じたと主張するのであれば、大型獣が、先住民にとってどのようなものであったかという疑問が当然浮上してくる筈である。言い換えれば、「インディオは馬を恐れる。だから、われわれスペイン人はそれを逆手にとって先住民の氣勢を削ぐ」とした典型的なエスノセントリズムに根ざしたスペイン人の行動にとどまらず、インディオ側の馬のイメージをさらに明らかにすることで、これまで等閑視されて光の当たらなかった事柄の本質、つまり、先住民が抱いた「恐れ」に注目し、彼らの思考あるいは認識の構造にメスを入れる必要があると考える。スペイン人がアンデス地方に到来した時、彼らを「ビラコチャ」と見做し、神格化したインディオが多数いたことはよく知られた歴史的事実である。そうした先住民の精神性に根ざす現象については、優れた研究がいくつかある

が、その白人と一体化し、半人半獣である
とすら考えられた馬には何ら注目が集まら
ないのも不満である (cf. 加藤 2010b)。ま
た、未知の馬を既知の動物として意味を与
えていくプロセスから出発し、少し大袈裟
に言えば、最終的にはインカ人のモノの認
識構造の一端に辿りつくと思われる。だと
すればそこでその中に組み込まれたワカ
(huaca) という観念が重要となり、これま
でほとんど議論されたことのなかったアン
デスの認識論におけるワカの占める位置と
その役割の一部を解明する研究の出発点と
したいとも考えている。

2. 馬恐怖症の仕組み

では、これからいよいよインカ・ガルシ
ラーソの記述を基に、当時のアンデス地域
の先住民にとって馬はどのようなもので
あったのか、また、その大型獣をめぐって
いかなる現象が先住民の間で巻き起こった
のかを解いていくことになるが、その前に
インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベガがし
ばしば参照するイエズス会士ホセ・デ・ア
コスタの記録を見ておく。実は、彼は、イン
カ・ガルシラーソと同様、欧州から新大
陸にもたらされた事物をその書『新大陸自
然文化史』第4巻第33章で列挙し、それそ
れに独自のコメントやエピソードを付して
いる (アコスタ 1966: 418-421)。アコスタ
の記述をまず見ておくことは、ガルシラー
ソのクロニカの当該部分を際立たせるため
に重要な作業である。

アコスタは、動物を扱うその章の中でま
ず羊を取り上げ、次に牛、山羊、豚と続き、
馬は5番手として登場する。馬についての
神父のコメントは、「優秀なものを産する。

行列や祭のため、旅行や荷役のため、カス
ティーリャ産のものと勝るとも劣らないく
らいの品種もある」(アコスタ 1966: 420)
と述べるにとどまり、ここで問題とする動
物についての記述は実に簡潔でおざなりな印
象を禁じえない書き方になっている。これ
は、彼の、馬への関心をそのまま反映した
ものであろうが、では、アコスタ神父の関
心は何であったのか。その答えは、問題の
章で何よりもまず先に取り上げている羊の
記述からはっきりと窺うことができる。彼
の最初のコメントは「もし羊毛をヨーロッ
パに送って利益をあげることができれば、
それは、新大陸随一の富の源泉となるだろ
う」であり、「肉は通常豊富で安く、羊から
取れるそのほかの余得物資、つまりチーズ
や乳なども同様である」(アコスタ 1966:
418) となっている。要するに神父の関心
は、引用で出てくる「利益」「富」「豊富で
安く」という言葉や表現からも明らかなよ
うに、もっぱら新大陸にもたらされた動物
の経済的価値⁴⁾——しかも、それは新大陸
にとっての価値というよりも、「羊毛が貧
者には大いに助かる」(アコスタ 1966: 418)
というように、スペインが新大陸にもたら
した恩恵に対しての価値が強調されている
——向いていることが分かるし、そのよ
うに見れば、2番目、3番に取り上げられる牛、
ヤギについても同様の視点で書かれている
ことも明白である⁵⁾。だとすると、馬の場
合も、推して知るべしであり、神父は、取
り上げられる順序からして、馬に対しては
他の動物に比して大きな経済的期待を抱い
ていなかったことが伺われ、それゆえ先の
動物のリストではその益獣の登場が他の動
物に比べて大きく出遅れたものと思われ

る⁶⁾。

これに対しインカ・ガルシラーソのコメントは興味深い。彼は、アコスタ等と同じく、馬の戦略上の価値と経済的価値を指摘するが、彼は、ほかの動物に先んじて馬を取り上げており、その点からしても、彼にとって馬が大きな意味を持ったことが窺える。彼が馬好きだったのは周知の事実（Garcilaso 1956）だが、彼がそれをおくびにも出さず、一番手に馬を取り上げたのは、その動物が新大陸で果たした歴史的役割が大であったと確信していたからであろう。事実、インカ・ガルシラーソは、馬の話題に入るパラグラフの冒頭で「(馬は) そもそもの初めからスペイン人と行を共にし、新世界の征服を可能ならしめた、重要な動物」（ガルシラーソ 1986：445）と喝破し、征服という歴史的な大転換期での馬の不可欠性に注目している。ここで「馬の不可欠性」と表現するのは決して誇張ではない。なぜなら、そのすぐ後で「実際、険しい地勢のペルーにあっては、追いかけて逃げたり、あるいはまた、山を登ったり降りたりすることにおいて、そこで生まれ育ったインディオの方が白人よりはるかに敏捷だったので、馬なくしてはいかなる勝利もおぼつかなかった」（ガルシラーソ 1986：446）と解説し、馬さえ存在していなければインカが負けることはなかった、と征服戦で馬が果たした決定的な役割を強調しているからである。つまり、ガルシラーソによれば、この戦いの明暗を分けたのは、馬を持つか持たないかの差にすぎず、人と人との戦いであれば、インカは決して白人に打ち負かされる筈はなかったというわけである。言い換えれば、戦闘の結果は人間の能力の違

いに由来するのではないという、文化相対主義にも繋がる、このクロニスタの歴史観の表明となっている。

馬の軍事的役割は、それに続く彼の先住民の視点ならではもうひとつのコメントと結びつく。それはインディオの馬恐怖症に関するものである⁷⁾。ただしこれは、先住民のこうした心理的性向に気づき、それを軍事的に利用した一件や、それをネタに先住民をからかい、その恐れを助長するような話を記録しているスペイン人クロニスタのものとは質が異なる。インカ・ガルシラーソは、同じ現象を目撃しながらも別の視点からそれを記述している。すなわち、先住民がどのように怖がり、なぜ恐ろしいかという心の動きを汲み取り、それを解説するわけであり、いふならば、インディオの心の内側に踏み込んで書かれたものといつてよい。インカ・ガルシラーソの記述は長いですが、彼の描写は当面の課題を考察するのに興味深い現象を扱っているので以下に提示しておく。

「一般的に言って、インディオはウマに対して大変な恐怖心を抱いている。それゆえ、ウマが疾駆するのを見ると、彼らはどうしようもなく動転してしまい、そこがいかにかに広い通りであっても、片側の家の壁に身を寄せて、ウマが通り過ぎるのを静かに待つということさえできない。すなわち、どこにいても、まるで未知の真ん中に寝そべっているのと同じように、ウマに踏みつぶされてしまうと思ひこむほど怯え、とり乱してしまうのである。また、彼らは、ウマが走ってくるのを目にすると、じっとしてはられず、自分ではウマから逃げるつもりで、二度も三度も道を横切る。つまり、

こちら側の壁の傍にいと向かい側の方が安全に思われるが、向かい側に移ったとたん、また反対側の壁がより安全に思われるので、すぐに戻るというわけである。そして、かくも狼狽し、やみくもに動き回るものだから…ウマから逃れるはずが、自分の方からウマにぶつかるといった悲劇が何度も（現実に私も目撃したが）繰り返されることになった。…私がペルーにいた当時、インディオたちがウマに抱いた恐怖感はいくら強調してもしきれないほどである。……さらに付け加えておこならば、新世界の征服当初、インディオたちはウマと騎手を、まるで…半人半馬の怪物のような一体のものと見なしていた」（ガルシラーソ 1986：449-451）。

上記の引用に見られる馬への特殊な心理的反応について注目すべき点は数多いが、とりわけ本稿にとって以下の7点が重要である。

1) これは、ガルシラーソがペルーで目撃しているわけであるから、少なくとも彼がスペインに渡った1560年までは見られた現象である。

2) 戦闘や軍事的作戦という脈絡に限らず、単なる日常での馬との遭遇であれ、インディオは馬からの攻撃なしでも、馬に対し極度な恐れを一方的に（あるいは無条件に）抱いてしまう⁹⁾。

3) 彼らの恐怖は尋常ではなく、気が動転し、正しい判断がつかなくなるほどの思考停止の状態にまで達してしまう。

4) これに付随して、馬には人馬一体のような幻想的なイメージが付与され、馬は、超自然的な性質をもつという思考が固定されている。

5) 馬に対する恐怖心がもとでおこった事件は、一回ではなく繰り返されているので、馬への衝突は単発的、偶発的出来事と見るべきではなく、一つの社会・文化的現象と考えなければならない。

6) インカ・ガルシラーソが「一般的に」と述べることからして、この現象は特定の先住民に起きた現象というよりも、先住民全体に固有のものに見做しておかねばならない。

7) インカ・ガルシラーソの書き方からすると、彼がスペインに渡り、クロニカを執筆する頃には、アンデス世界でも馬との接触の機会がふえ、時代が下るにつれて恐怖心は次第に和らいでいったように見える。

馬に危害を加えられなくても、馬の存在だけでそれに脅えてしまう「馬恐怖症」は少なくともガルシラーソがアンデスに滞在していた最後の時期（1560年）までは見られたが、では、この現象をいったいどのように考えたらよいであろうか。換言すれば、スペイン人であれば何ら恐れることはない状況にあるのに、なぜインディオは動転するか、である⁹⁾（cf. 加藤 2009：80）。このように考えると当面の問題は、アンデスの先住民が馬をどのように捉えていたかという認識の問題に収斂する。要は、インカの人々、先住民の頭の中で何が起きているか、である。もちろん、認識はそれだけで孤立しているわけではなく、社会的意味づけ、行動と密接に結びついている。したがって歴史とメンタリティとの関係を解くというのであれば、それらの結びつきを射程に入れながら議論を進めていく必要がある。そのためには「史料自体に語らせ、われわれには異様にひびく声、すなわち…

土着の人々の証言の声に、謙虚に注意を払い、敬意をこめて耳を傾け」(ワシュテル 1984:17) るといふしなやかな研究態度が大切になる。なぜなら、民衆の様々な声に注意を払うことではじめて見えてくる世界があり、その世界を描き出すことが、これまで忘れられてきた人々の日常の生活を解明していく手段となるからである。

ワシュテルはこうした方法論で、征服期初期の、人馬一体と見られたもののうち「人」の部分についての論証を行っているが、その論考は、ここでの馬の分析の手がかりとしても多くのヒントを提供してくれる。ワシュテルの問題意識は明白である。「どんな社会にも、それ独特の論理によって律せられた精神構造や世界観が存在する。歴史上の出来事でも、自然現象同様、おのおのの文化に固有の神話や宇宙進化論の説明の枠組みのなかに位置づけられる。この合理的な秩序からはみ出るもの(その行動が奇妙に映ずる動物とか、異常でない事件)はすべて超自然の力、また神の力が俗世に乱入してきたものとされる」(ワシュテル 1984:31)。アンデス世界に突然出現した風貌の異なる白人は、その意味でまさに「秩序からはみ出るもの」であるわけだから、その世界に「超自然の力、また神の力」を体現する存在として「乱入してきた」わけである。

この問題意識は鋭く、解釈は鮮やかと言わざるを得ないが、しかし、少なくともアンデス世界の事例——ここでは、その地域に限定するが——に忠実に向き合おうとすると、この問題意識だけではうまく説明がつかない事例が出てきてしまう。それは、たとえば、ワシュテルも引用しているティ

トゥ・クシの「余にたいしてとった行動を見るなら…ピラコチャではなく、悪魔(スーパイ、supay)の子」(ティトゥ・クシ 1987) という部分である。「インディオ(「インカ人」と読み替えてよい：筆者)の世界観には、白い人々が神(強調：筆者)である可能性が含まれていた」(ワシュテル 1984:31) のは確かだが、それは神と言っているのであって、「悪魔」ではない。だとすると、問題は明らかにインカ人の頭の中で生じた、ピラコチャからスーパイへの変換と、その意味づけと結びつく認識構造ということになる。

こう分析すると、おそらく当然のこのようにワシュテル信奉者——筆者もその一人である——からは、先に引用した別の部分で「超自然の力」と述べているではないか、ワシュテル先生の言葉の揚げ足取りをするな、という意見が出るかもしれない。しかし、そうだとすると、そういう人々に対しては、アタワルパは神とも悪魔とも明白には見做さなかったという事例に対しどのような説明を加えるのかと直ちに問い返さねばならなくなる。「白人を神と見做す可能性が含まれてい」るのに、なぜ、アタワルパ陣営ではワスカル派ほどピラコチャ到来というテーマが表立って出てこなかったのか。上記の考え方に立てば、この点でも乱入するものに「神の意味づけ」作用が働いたとすべきであろう。ところが、アタワルパ派は、仮に超自然力を持つにしてもそのスペイン人に対し、彼ら、あるいは近隣に住む彼らと同じカテゴリーの人間という意味づけをしたにすぎなかったのである。要は、乱入したものを無条件かつ固定的に「超自然の力」や「神」と結びつける

のではなく、乱入してきたものに意味を与える相を付け加えなければならない。逆に言えば、未知なるものは、初めから意味を与えられているわけではなく、社会に意味を付与され、潜在的には多義的になる可能性があるというわけである。そして、歴史を考える上で「意味」という重要な概念を組み込むとすれば、当然それにも動態を持たせることも大切になる。実際、ワスカル派にとって、白人は永遠に神ではなく、すぐに悪魔とされてしまったように、意味は常に変わる可能性を秘めているからである。

人間はもとより象徴体系を操作し、それによって身の回りの事象のみならず、有形無形の森羅万象を把握する。そして、その体系に照らし各々に意味を付与し、それによって生活を営むものである (cf. ギアツ 1987)。だとすれば、何らかの原因で象徴体系が脅威にさらされたとすると、人間はたちどころに一種の意味の混乱に直面し、大きな不安を抱え、新たな意味を探りあてようとすることになる。

3. アンデス的認識論としてのワカ

ここで、本題の馬のテーマに戻る。

1530年代、アンデスの人々は、大きな4つ足動物を見た。それは銀の足を持ち、背中には白い人々を乗せて走り回った。口から火を吐き、尻尾で人を真っ二つに切ってしまう力を持つ。白い人々からは、それは金や銀を食べると聞かされた (cf. Guillén 1984: 150)。ピラコチャはピューマ (ライオン) を引き連れてくるという神話をインカ人は持っていたはずだが、彼らは未知の動物をピューマとは見做さず、その形状を

頼りに、もっとも近い類比でこの未知の存在を「リヤマ」と呼び、自らの認識体系にそれを組み込もうとした。そうすることで、その乱入者を自らの世界の中に位置づけることが可能だと考えたからである。しかし、リヤマと名づけてはみたものの、それは明らかにリヤマとは異なる。人を乗せること、金銀を食べること、銀の足を持つこと。このいずれをとってもリヤマの特徴ではないからである。そして、それらを解釈しようにもそれ以上の解釈は底を尽き、彼らの想像力が枯れてしまうと、今度はそれが得体の知れないものとして立ち現れ、最終的に「意味の錯乱」を引き起こす。そして人々を襲う「恐怖」のもとと化す。馬をリヤマと見ることができない人々にとって、解釈不全の事態は、意味のカオスに転化し、薄気味悪さや恐怖の根源となったわけである。ギアツが言うように、「カオスは、解釈そのものではなく解釈の可能性を欠くことから生ずる事柄の混乱」(ギアツ 1987: 165) であり、「経験のある面に対処することができないかも知れないということがほんのかすかに示されていることを感じただけで、人間はきわめて深刻な不安に陥る」(ギアツ 1987: 164) からである。

要するに、インカ人が示した馬への驚愕の原因は、アンデスの既存の象徴体系で、前例のないその動物を把握できず、適切な認識処理が行えなかったことにある。しかし、これは決して何も分からない白紙の状態という意味での「分からない」ではない。実際、彼らは馬を人馬一体の片割れと見做したり、「リヤマ」と呼んだり、さまざまな超自然的な属性を付与しその正体を突き止めようとしている。結果的にそうした努力

は実らず、彼らの既成の認識の枠内でそれを把握できなかっただけのことある。しかし、アンデス人にとって、この枠をはみ出することは大きな意味を持つ。なぜなら、得体の知れない要素を掬い取りそれを世界観に組み込むアンデスの認識装置が機能しはじめるからである。それがあの有名なワカ(huaca)という観念である。

ワカというと、今日ではすぐにセケ・システム(Sistema de ceques)が思い起こされるかもしれないが¹⁰⁾、複数のワカ間の諸関係に基礎をおくセケと、単独で出てくるワカとは別次元に存在するものであり、セケ(ceque)を論ずることとワカを分析することとがまったく異なる作業であるという点を忘れてはならない。だとすると、ワカに関しては不覚にもここ半世紀ほど極めて大きな研究上の停滞があったことに気づかされる。セケ・システム論の出現後、ワカの研究がすべてセケに吸収され、両者を同一視して、ワカのそのものの研究が見落とされてきたからである。

では、枠をはみ出る未知なる動物がなぜワカと関係するかをここで説明しなければならぬだろう。インカ・ガルシラーソは、ワカを「多種多様な意味合い」(ガルシラーソ 1986: 113)を持つとし、その語の用法を列挙している。そのリストには次のものが含まれる。たとえば、偶像や岩や大きな石や樹木、金や銀や材木でできた捧げ物、あるいはその他の御供、神殿、墓地、信託所、同じ株のなかでもっとも大きく美しいバラ、同じ木のなかで最も大きなリンゴ、ナシ、特大の大蛇、双子とそれを産んだ母親、双子のリヤマとそれを産んだ母親リヤマ、黄身が二つある卵、逆子や体を曲げた

ままで生まれた赤子、手足の指が6本ある者が、せむし、兎唇、斜視、何らのかの身体的障害者、湧き出る泉、奇妙な形を石(cf. ガルシラーソ 1986: 113-114)等々、多種多様、多岐にわたる。

インカ・ガルシラーソのリストを一瞥すると、数あるワカのリストの中に早くも欧州産の産物が含まれていることに気づく。バラ、リンゴ、ナシ、おそらくはニワトリの卵、がそれである。したがって、この観念が、旧世界の産物を排除するのではなく、それさえも取り込めるものであることを前もって指摘しておきたいが、いま、当面の課題として重要なのは、一見羅列されているだけのように見えるワカにも目を引く共通の属性が存在するということである。ガルシラーソはワカという名詞が「泣く」という動詞に近く、紛らわしい語であることは認めているが、それよりも興味深いのは、彼がワカのリストを列挙する際に使うさまざまな修飾語や説明である。彼の言葉をそのまま引用すれば「同種の他のものより際立っている」「その種の中で卓越している」「通常の成り行きから逸脱している」「異常さゆえに」「常とは異なるがゆえに」(カルシラーソ 1986: 113-114)である。要するに、表現こそ多様だが、それらが共有する属性、あるいは基本原理は「他とは異なっている」ことに収斂する¹¹⁾。このように考えると、上記には列挙しなかったが、インカ・ガルシラーソが他の個所で説明する「太陽のものとなったがゆえに」とか「恐怖と驚きを掻きたてるような醜怪なもの」という理由でワカと見做されたものも、その枠に組み込むことができるだろう。前者は他の神々ではなく、最高位のインティのため

に選ばれたものであり、その意味で他とは異質のものとなっている。また後者は、普通であれば驚くに足りない事柄でしかないのに、驚愕や奇異の念を引き起こす異常なものとして、それ自体常軌を逸していることの証左となるからである。また、偶像、いけにえ、神殿、墓、神託所にしても同様である。偶像はほかの物体とは異なりそこに霊（ガルシラーソの言葉では「悪魔」）が宿り、神殿、墓、神託所も他の空間とは異なりそこが超自然的な世界と繋がっているからである。

このように見ると、ワカの本質の研究は、決してアニミズムかアニマティズムかといった古い論争、あるいは生活上有用か否かで決まるとする陳腐なプラグマティズム的解釈（cf. Kato 1999）に巻き込まれることなく、ワカをめぐるインカ人の民俗的カテゴリーと認識の問題となる。ブランデーは正当にも早くから、ワカの語源を「外れた、他の、遠い、分離、異質さ、あるいは敵意」を意味する huac に求めている（Brundage 1967: 144）¹²⁾。その上で、彼は huacsuyu「敵軍」という語を一例として検討し、最終的に huaca を「見知らぬもの、向こうのもの」の意と解している（Brundage 1967: 145）。付け加えれば、「狂人」（huaca runa）もワクチャ（huaccha）¹³⁾ も「外れた」という意味で、huac を語根に持つことになる。おそらくブランデーは、ワカの語源を突き止めたにもかかわらず、自らの卓見の真の意義に気づかず、ワカという語の、その共通の意味を探る前に、その多義性に目を奪われてしまったように見えるが、ここで大切なのは、あくまでも彼の指摘する「常軌を逸したもの」「ほかとは

離れたもの」というワカの意味であることを改めて指摘しておくことは無駄ではあるまい。

では、ワカという語が持つこの含意はいったい何を導き出すのだろうか。ここで想起すべきは、ある事物が、特定のカテゴリーをはみ出し、他のカテゴリーにも侵入する場合、あるいは二つの異なるカテゴリーが重なる部分には特別な意味を付与される傾向にあると言語記号論的に説いた、いまや古典となった 1970 年代のイギリス社会人類学のカテゴリー論である。ただし、ここで問題としているのは、アンデスの観念、ワカである。インカ・ガルシラーソをよく読めば、アンデス世界では異質なものが存在すると、それはワカと見做され、そのワカが安置される空間もそこで捧げられる供物も、他とは異なる存在としてワカとされ、日常世界との対比で特別な位置を与えられる。要するに、ワカは既成のカテゴリーからはみ出るもの、カテゴリーとカテゴリーとの間に位置するものであり、それらは特別な属性——多くは超自然的なものであるが、それがどのように発現するかは個別の問題となる——を付与される。言い換えれば、ワカは、カテゴリー化によって形成された秩序とそこからはみ出るものとの弁証法的関係の上に成立し、それが位置する場に見合った特殊な意味を獲得しながら、より大きな秩序に再び組み込まれるのである。

だとすれば、ワカの観念はアンデスの森羅万象の異質な部分、事象が生起するごとに適用されることになろうが、この観念は決して固定的、静的ではない。多くはカテゴリーに収まり、秩序を形成しているが、

そこからはみ出るもの、そこに押し込められないものが予期せぬ形で出現した場合、それはワカとしてそのカテゴリーに吸収され秩序に組み込まれる。このプロセスは、インカ・ガルシラーソの何気ない先の記述にも見られたように、他所からもたらされた未知の産物にも当てはめることができたのである。

このように分析してくると、馬は当然インカの思考様式の中で特別なカテゴリーをなすことが分かる。はじめは、どのカテゴリーにも属さず、意味を生み出す象徴体系の網に対する脅威として恐怖をもたらした。しかし、次の段階では、インカ人のカテゴリー化の努力が始まる。しかし、それは、神話のなかで伝承されてきたピューマではなかった。それには「リヤマ」という名が与えられ、アンデスの世界観の中に応急処置的に一定の位置を与えられた。しかし、それは、銀の足をもち、人を乗せて疾走する「リヤマ」であり、そうした相違ゆえに、「人馬一体」「切れ味鋭い尻尾」「不死身」「金銀を食べる」といった現実にはありえない神秘的な属性をもつ特有の超自然力が付与されたのである¹⁴⁾。ただし、ワカというカテゴリーに入れられたとしても、そのことによって本質的にその中身を解明されたわけではないので、この新参の「ワカ」への恐怖はそのまま引き継がれていく。それは、アンデスに根付いたワカが超自然的存在として常に注意深く取り扱われていたことと同じことである。

では、このアンデスのワカはどんな性質を持つのか。ここでは、その多様な相を描き出すことが主題ではないので、馬と関わる現象を解明する部分に限定し、その聖性

にほんの少しメスを入れるだけに留めておこう。

ワカというと、インカ人もまた研究者も、それは神聖であり人間にとって何かと聖性を伴った恩恵をもたらすものと捉える傾向がある。確かにクロニスタはそのように記述する場合がほとんどだが、視野を少し広げ、きめ細かにその性質を観察してみると、そうした見方は一面的にすぎないことが容易にわかる。実際、然るべき崇拜を受けることがなくなったワカが信者に逆襲して災厄をもたらすという有名な宗教運動タキ・オンコイ (Millones 2007) を想起するだけでこの点は十分であろう。それは、植民地時代になって創出された要素にすぎないと主張する論者があるかもしれないが、インカ時代のパチャクティがワカをクスコに集めた宗教政策を思い起こせば、そうした観念がその時代から脈々と息づいていたことが理解できる。つまり、それは「(インカに組み込まれた) 他地域の住民たちが、自分たちの神々に復讐を加えられることを恐れて、反乱を起こさないようにするための手段」(ロストロボウスキ 2003: 67) だが、これは、ワカが取り扱い次第で恩恵や安寧をもたらすものから一転し、否定的な属性で災厄をもたらすかもしれないという信仰を巧みに利用したインカの軍事戦略の一つだったのである。

要するに、ワカは恩恵 (+) と災厄 (-) の2面性を備える。これは、ある神性が固定的に (+) あるいは (-) のいずれかであるという西欧的二元論とは異なり、それが (+) に振れるか (-) に振れるかはワカと人間との互酬関係によって規定されるということである (Kato 2003)。すなわち、

「アンデスのワカ...に援助や恩恵を受けたいと思ったら、供物を捧げなければならなかった。それが満たされてはじめて、ワカ...は信者たちと密接な関係を結」(ロストロボウスキ 2003:40)ぶのである。これは、言うまでもなく、人間がワカに対し (+) を与えれば (+) で、また (-) であれば (-) で償われることを意味する。別の見方をすると、ワカは本質的に両義的で、ワカの役どころ、あるいはその意味はワカそのものが先験的に内包しているのではなく、あくまでも人間とワカとの互酬関係の中での遣り取りの中で創り上げられていくということである。

実は、こうした思考こそがティトイ・クシが陳述した「(白人は) ビラコチャではなくスーパイだ」という謎めいた言葉を解釈するためのカギとなる。筆者は、先住民が白人をワカという言葉を用いて呼んだ例を知らないが、白人は、それでも、先述の「他とは異なるカテゴリー」に属するものという意味でワカそのもの——少なくとも潜在的に——であり、実際その概念と底通しながら、はじめから聖なるものという属性を獲得し、それを特殊化した形でビラコチャという呼称を得、アンデスの世界観に位置づけられたのは確かである。その証拠に、インディオは、白人に供物を奉納し、「ビラコチャ」からはその見返りとしてそれに見合った形で (+) の恵みを期待できると考えた。しかし、現実には、白人が先住民に反対給付したものは、消極的互酬性つまりティトゥ・クシのいうような、一方的な略奪と危害、(-) のお返しでしかなかった。だとすればそれは、ワカの否定的側面あるいは (-) の面そのものであり、スーパイ

の名に値するものと見做されたとしても何ら不思議ではない。信者側の (+) に対し (-) を返すワカに破壊的な仕打ちがなされたという事例はいくつか知られているが、抹殺を目的としてそれが実施されたことを考えると、(-) のレッテルを張られた超自然的存在へのそうした対応から推して、それはこの世には存在させておいてはいけない邪悪なものと見做されたはずであり、実際、スーパイと化した白人へのインディオの態度も行動もそれに沿ったものであった。

以上は、異質な事象をワカとし、そのワカを介して異分子をアンデス全体の認識の枠組に取り込む仕掛けに白人を当てはめた例だが、では、人馬一体の片割れ、馬はどのようなのか。先述したように、馬はアンデス世界に類のないものとしてワカの範疇に入れられる¹⁵⁾。したがって、それは、潜在的には (+) と (-) の両面の属性を持ち合わせた超自然的な力を獲得した筈だが、しかしインディオの馬への態度から判断すると、馬の聖性は現実には (-) にしか振れず、どうやらインカ人の、馬への恐怖が先立ち、その動物に対して (+) な面を見出すことができなかつたように見える。事例としては、必ずしも接触直後のものではないが、災厄をもたらす馬は、互酬性を無視し給付をあだで返えず統制不能なワカとして、徹底的に忌避されている。(-) の属性を持つワカはスーパイとして破壊してよいという先述のアンデス流の対処法にしたがつて惨殺され、死体は頭と蹄を切断された¹⁶⁾。馬は、スペイン人と一体となってインディオを苦しめ、彼らにしゃにむに攻撃を加えてくる——当然だが——だけで、白

人が少しは持ち合わせた互酬性さえ果たさない存在として、(-)の意味を無条件に付与されたものと考えてよかろう。つまり馬ははじめから白人に与えられた二つの意味のうちのスーパの側だけを引き受けることになっていたのである¹⁷⁾。

馬はこのようにインカ人から恐れ嫌われたが、インカ・ガルシラーソをさらに読み進むと、興味深い別の事実も浮かび上がる。それは、インカ人が馬の対極にあたる(+)の側に振れたワカを見出したように見えることである。スペイン人がもたらした(+)のワカの正体は牛である。ガルシラーソは、馬を扱った章のすぐ後に、独立した別の章を設けて並列させ、自身のエピソードも含めてその動物について詳細に記述している。クロニカによれば、彼が幼少の頃には、牛も馬もともに少なく、また売買の状況も似通っていた。さらに、牛も時には人を襲う危険な動物であると指摘し、牛と馬との共通点を列挙するが、しかし、最終的にはそうした類似点を完全に打ち消すかのように、馬と牛とのコントラストを際立たせて説明している。

インカ・ガルシラーソを引用しよう。「私がクスコの谷で土地を耕す雄牛を初めて見たのは、1550年頃であった...牛が土地をすき返すというのは前代未聞の珍事だったので、それを見物するために、あちらこちらからインディオが押しかけたが、私もそうしたインディオたちのあるグループに連れられて見に行ったのである。実際、動物が畑仕事をするなどというのは、インディオたちにとって、そして私自身にとっても、驚嘆すると同時にあきれ返るような光景であって、人々は口々に、怠惰なスペイン人

は楽をしようとして、本来なら自分たちですべき仕事を、ああした大きな動物に押しつけているのだ、と言っていた。実を言うと私は、この牛の畑仕事のことは、今でも特にはっきりと記憶している。というのも、心を躍らせた牛見物の遠足は、その後のきついお仕置きで相殺されたからである。(中略)牛と一緒に農作業をしていたのはインディオであった。(中略)正直なところ、クスコ市に姿を現した牛を見る人々の興奮と好奇心は、最盛期のローマにおいて、凱旋する将兵を迎える人びとのそれにおさおさ劣るものではなかった、と私は思っている」(ガルシラーソ 1986: 452/3)。

この記述から指摘できることは数多い。しかし重要な点は次の6つである。

1) この記述は、インカ・ガルシラーソがまだペルーに在住した時代を扱っているので、これは、先述した馬をめぐる生起した現象と同時期の事柄であるということ。

2) 馬と同じ大型獣であるにもかかわらず、この記述には牛に対する恐れはいささかも見られないこと。

3) それどころか、牛に対する尋常ではない親近感や憧れがみなぎっていること。見たいという好奇心に駆られるや、たとえば、ガルシラーソのように、学校をさぼってしまうというような、後先を考えない感情が先走り、それが強く表面に出てしまうこと。

4) この好奇心は、ただ単に牛に対する物珍しさを乗り越え、熱狂、憧憬、驚嘆となって、ほとんど牛を神格化するような事態にまでなっていること。これは、ガルシラーソがローマの将兵の凱旋にたとえていることから肯ける。

5) ガルシラーソの明確な言及にはないが、インディオの牛の見物会は、「集団」「あちらこちら」という言い方からすると、この現象はただ単発的なものではなく、逆にしばらくの間は繰り返し見られた光景と見做せること。

6) 同様に、先述の表現からこの現象は、ひとりガルシラーソ、あるいは特定の先住民個人のことを言っているのではなく、先住民一般に当てはまる現象だったと考えてよいこと¹⁸⁾。要するに、先住民の牛への関心は、馬のように忌避することではなく、むしろその逆に、それを自分の側に取り込みたいという願望であったという点。

ガルシラーソの同時代の人々の牛に対する態度と、先の馬に対するそれを見比べてみると、二つのヨーロッパ産の大型獣には符合を変えただけのほとんど正反対の様相——過度の恐れと、過度の親近感——を呈していることが分かる。もちろん、その現象は同じ時代に、同じアンデスで見られたものであり、それは単なる偶然の産物などではない。馬が、スペイン人のように否定的なものとして忌避されたのは、それがスペイン人と一緒になって先住民に消極的互酬関係を強いたからと述べたが、では、牛は人とどのように関わっているのか。人々が注目したのは、牛が畑で働くことである。しかも、インディオとの共同作業に携わる。この場合、まず押さえておかなければならないのは、スペイン人到来以前には農耕を手伝ってくれる動物は存在しなかったという点である。その意味ではそれは動物らしからぬ動物であり、と同時に、牛は働く家畜としてインディオの側にいる。また「怠惰なスペイン人は自分たちですべき仕事

を、ああした大きな動物（牛）に押しつけているのだ」というインカ・ガルシラーソの記述を基に考えてみると、こうした言葉の裏には「スペイン人＝怠惰」という等式に対応する「牛＝勤勉・働き者」という発想が隠れており、さらにまた、牛を扱う者がインディオであるとすれば、牛とインディオはスペイン人に対して共に「労働を強いられる者」として同じカテゴリーに位置し、極めて近い関係にあることになる。そして、最も重要なことは、畑仕事は、インカ人にとって生業の中心であるが、牛は、協力者として、その労働の中軸にまで入り込み人々に対して（+）に関与しているという点である。

このように見ると牛は、スペイン人の「足」となり「手先」となって先住民社会を荒らしまわった馬の対極にある。だから牛は、インディオに手足を貸す同僚ないし相棒として、馬とは正反対の（+）の記号を付与されても不思議ではない。もちろんこの益獣は、畑で共に働く動物を知らなかったアンデス先住民にとっては、馬と同様に未知であり、それは既存のカテゴリーの枠をはみ出したものとして、（+）の超自然力を持つワカあるいはそれに準ずるものだったということである。白人がビラコチャとスーパイの間を揺れたというアナロジーを借りれば、馬はまさにスーパイ、牛はビラコチャの位置に対応すると見てよい¹⁹⁾。

4. 結語

これまでの考察の論点は以下の通りである。アンデスの認識のメカニズムは、森羅万象に現れる「はみ出したもの」「他とは異

なるもの」を捕捉し、それにワカというカテゴリーを当てはめて秩序化し、それを全体の中に吸収する。その際、ワカは、人間との互酬関係を睨みながらその意味を規定していく。インカ人はそれに照らして、未知の大型獣、馬と牛にそれぞれ(+)と(-)の記号を付与し認識体系の中に組み込もうとしたということである。

未知のもの——馬、牛、白人、さらにはここでは取り上げなかったが、キリスト教の神、聖像、十字架、衣類等——を既知のものとしていくプロセスの解明は今後の課題として興味深い(加藤 2010b)が、ここでガルシラーソに戻って、馬や牛についての彼の認識がどのようになっていたかについて一言述べて本稿を締めくくりにしよう。

『インカ皇統記』で牛や馬について言及される部分を読んでみると、インカ・ガルシラーソは自分が「インディオだ」と告白しながらも、もはや個人としては馬に驚いたり、牛に過剰な親近感を覚えたりしているようには見えない。そのクロニカの執筆は、彼がスペインで成人してからのことであるから、その頃にはいくらなんでも牛馬にも慣れてしまっていたのだろう、と推測するむきもあるだろうが、しかし、それは完全に事実誤認である。彼が大型獣に慣れたのは、すでにペルーに居る時であったからであり、クロニカによれば、彼は子供の頃から「騎馬槍試合」に参加し、幼少から馬に接し、それを御する術を教え込まれた。そして後に大の馬好きになったのも、つとに知られた事実である。また、牛への過剰な好奇心についても、彼が述懐するように、父親のきつい「お仕置き」によって矯正さ

れてもいる。つまり、彼は、一般の先住民が時代の流れに身をゆだね、未知を既知に変えていくゆっくりとしたプロセスをたどっていったのとは対照的に、よりラディカルな形、すなわち「教育」あるいは「しつけ」という形でスペイン流の価値観を叩きこまれている。

では、だからといって、彼はスペイン人の発想に手なずけられてしまったのだろうか。これは、彼の言葉から推し量るしかないが、決してそうではなかったはずである。彼は、馬や牛についてのエピソードをただ単に書き綴ったわけではない。彼は、インディオの馬に対する恐れ、牛への熱狂についてだけでなく、そうした現象がなぜ起こるかの説明にもページを割いている。その際、彼が持ち出すのは先住民の言葉、心理であり、彼はその内容を吟味し、意味を咀嚼しながら説明を加えている。だとすれば、そこには、インディオのものともそうでないものを峻別する彼独自の基準が存在しており、少なくとも彼の内には、彼なりのインディオ的発想があった、あるいはその発想を理解し受け入れる思考を備えていたということである。言い換えれば、冒頭で述べたように、それはメスティーソの思考だからといって、そのすべてがスペイン的思考とインカ的思考の平均というわけではないし、スペイン的思考にアカルチュレートされた先住民のイデオロギーと安易に呼べるものでもなかった。彼の発想は、ワカが(+)にも(-)にもなりえたように、スペイン的にもインカ的にもなりえ、それを自在に使い分けることができたのである。そして、利害を守り、正当性を主張する際には、必要があれば、彼は事柄の信

憑性、歴史的正当性の問題さえ脇に置いて両者を操作しようとした。インカ・ガルシラーソは正に、時と場所、場合に対応するしなやかな思考の持ち主だったのである。

付記

本稿は2010年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 によりまとめられたものである。記して関係者各位にお礼申し上げる。

注

- 1) 2009、2010年、本誌に「アンデス先住民が見た馬：未知から既知へ(1)(2)」を投稿した。本来ならば、「アンデス先住民が見た馬：未知から既知へ(3)」を執筆し完結とする予定であったが、それ以前に、アンデスの馬のイメージを支える根源的な問題について未解決であるので、ここでは、少し脇に逸れてその部分を纏めることになった。(3)に関しては現在準備中である。なお本稿は、並行して書いた“Equinofobia entre los indígenas andinos recién conquistados: Acerca de la identidad cognitiva en el Inca Garcilaso” (inédito) をもとにしている。
- 2) 先住民の側からの、先住民だけで自立しえたという視点が確実に示されているとあってよい。つまり、これはインディオの価値を前提とする認識方法がインカ・ガルシラーソの思考の一部として定着しているということを示すものであろう。
- 3) 「足して2で割る」という平均、あるいは混ぜ合わせて新しい価値観、という

ような事例もあるであろうが、ここではこれ以上深入りしない。

- 4) もちろん、これは、アコスタだけにとどまらず、そもそも富を求めて新大陸にやってきたスペイン人にとってはきわめて当たり前の発想であったことは想像に難くない。
- 5) 牛に関しては「利用法は...肉、バター...肉をとるために使い、また、去勢して農耕にも用いる。...エスパニャに積み出されるこれら皮革は...最大の商品のひとつ」(アコスタ 1966: 419) としている。ヤギに関しては「若い山羊は乳が利用できるほか...重要なのは獣脂で、それがたいそう豊富なため、オリーブより安く...」と記録している(アコスタ 1966: 420)。
- 6) もちろん、馬に対するスペイン人の関心は、はじめから経済的な価値にむけられていたわけではない。インカ・ガルシラーソが書きとめている、途方もない大金を積まれても馬を手放そうとしなかったスペイン人の例は、この点を考えるのに示唆的である。馬は、しばしば指摘されるように、まずは軍事力の一部、また征服で名を上げるための——究極的には、その名誉の形成が経済力と結びつくと言えなくもないが——極めて有力な道具であった。実際、時期は前後することもあるが、一般に馬は征服者にとって優れて軍事的価値を持つ動物として導入され、後に商業活動の支えとして経済的価値を付与された。アコスタの1570年代の観察に基づく言及の順序からすると、その時点で経済的な価値ではトップの座

を占めてはいないように見える。時代の推移につれて馬の意味のあり方が変化するということであるが、軍事的意味が付与されようと、また商業的価値を見いだされようとも、馬の価値は、スペインの側に属するものとして判断されるという点で変わることはない。

- 7) 以下の記述は、拙稿（加藤 2009：80）と問題の捉え方が同じであり重複する部分がある。
- 8) ただし、戦闘ではこの点はより鮮明に現れる。騎兵の武力という以前に、馬に対し先住民の自滅的な行動があったことは注目してよい。スペイン人は馬をわざと先住民の前に連れ出す。疾走、いななき、方向の急転換、後ろ足立ち、馬に装着された「鳴り物」から出る耳障りな騒音、馬が発する攻撃的な行動、耳慣れない奇怪な音で、インディオを驚愕させ、最終的には戦意を喪失させるために馬は重宝された。要するに、インディオは、馬に過剰に反応し、馬はインディオを無力化してしまう動物とスペイン人は見做したのである。その際、先住民がなぜ馬を恐ろしがるのかはどうでもよく、ただ恐ろしがることを逆手にとって、先住民のその性向を軍事的に利用したのである（cf. 加藤 2009）。この点が重要なのは、それを見落とし、インディオの驚愕の構造を見ようとしないとなれば、その研究は結果的に征服者の態度と同じ方向を向くことになり、いきおい征服者に与し、同様の視点でしかモノを見ていないことになってしまう恐れがある。

- 9) ガルシラーソの記録によれば、そうした恐怖に引きずられる形で人々はまだ馬を嫌悪し、60年代までは馬と関わる仕事をする者は一般的にはなかった（ガルシラーソ 1986：449）、という。しかし、こうした馬恐怖症は、次第に克服され、その後は、馬がインディオに社会・文化的に処理されてそこに別の意味を付与されることになる。馬を積極的に身近におこうとする先住民の誕生である。この時期に入ると戦闘の時代はほぼ幕を閉じ、馬の役割は、人や荷物を乗せて運ぶ輸送手段、さらには祭礼用に大きくシフトしてくる（ガルシラーソ 1986：449；cf. 加藤 2010）。
- 10) セケ・システム研究は、ワカとワカとを結びその関係を分類体系として抽出し、それと関連する社会関係や、コスモロジーに関する仮説を立てようとするものである。この方法論のからくり、功罪については別稿を用意する。
- 11) アコスタは「他と違うものなら何でも」（アコスタ 1966：132）と表現している。
- 12) ロドルフォ・セロンは、ケチュア語の音韻体系では、huac という切り方は不自然だとしてこの説を必ずしも評価していない（私信 2009）が、huac を別の語源から説明する説得的な解釈を提出しているわけではない。
- 13) 「狂人」を表す huaca runa のうち runa は「人」を意味するので huaca は「異質の」を指すと考えざるを得ない（cf. Karsten 1926: 340）。ワクチャは「孤児」の意味。インカ王の即位式では、

王となろうとする者は、ワクチャでなければならなかった。

- 14) ただし、馬をワカと呼んだという証拠はない。しかし、馬に対するインカ人の行動様式は、ワカに対するそれと寸分たがわない。ジャガー、ピューマ、クマを神と見做した人々が、それらと出くわした時に、それらから逃げ出すどころか、地面のにひれ伏し…食われるままになっていた、というインカ・ガルシラーソの記述（ガルシラーソ 1986：40）は、馬に脅える先住民を想起させる。
- 15) 超自然性を付与されたことを考えれば、そう判断してもよいと考える。
- 16) バラバラに解体された馬の死体には、花を添えるという特殊な死体処理もあったが（Hemming 1970: 112）この儀礼行為から、馬の機敏さ、機動力を根こそぎにしておもうとする意図が窺える。
- 17) 検証は今後必要となるが、現在の民族誌的データでも、馬が否定的な超自然存在となったり、その乗り物としてマイナスと結びつくという例は枚挙の暇もないほどである（cf. アルゲダス 1979：150、155 etc.）。
- 18) 残念なことに、このクロニスタはこの現象がどこまで続いたかというデータを示していない。
- 19) 馬が、人間に害をもたらす化け物であったり、その乗り物である場合の例は、注 14 に挙げた通りだが、牛はその逆に、魔物を退治し人間を解放してくれると信じられることもある（cf. アルゲダス 1976：144-148）。

参考文献

- アコスタ、ホセ・デ（Acosta José de）（増田義郎 訳）
1966『新大陸自然文化史 上』岩波書店、東京。
- アルゲダス、ホセ・マリア（Arguedas José María）（三原幸久・在田佳子 訳）
1979「マンタロ谷の民俗」『インカの民話』新世界社、東京。
- Brundage, Burr
1967 *The Lords of Cuzco*, Norman, Oklahoma.
ガルシラーソ・デ・ラ・ベータ（Garcilaso de la Vega）（牛島信明 訳）
1986『インカ皇統記 二』岩波書店、東京。
- Garcilaso de la Vega, El Inca
1956 *La Florida del Inca*, Fondo de Cultura Económica, Buenos Aires.
- ギアツ、クリフォード（Geertz Clifford）
1987『文化の解釈学』、岩波書店、東京。
- Guillén Guillén, Edmundo
1978 “El testimonio inca de la conquista del Perú”, *Boletín del Instituto Francés de Estudios Andinos*, VII, no. 3-4, pp. 33-57, Lima.
- Hemming, John
1970 *The Conquest of the Incas*, Macmillan; New York.
- 加藤隆浩
2009「アンデス先住民が見た馬：未知から既知へ(1)」『南山大学人類学博物館紀要』第27号、pp. 35-46。
2010a「アンデス先住民が見た馬：未知から既知へ(2)」『南山大学人類学博物館紀要』第28号、pp. 57-68。
2010b「プロセスとしての出会い、あるいはその解剖学」『天理大学アメリカス学会ニューズレター』No. 63、pp. 1-3。

Kato, Takahiro

1999 *El informe del Señor de Wimpillay*
(inédito)

2003 *La reconsideración de las Aldeas Sumergidas*, Cuadernos de Investigación del Mundo Latino, Número 25. Centro de Estudios Latinoamericanos de la Universidad Nanzan.

Karsten Rafael

1926 *The Civilization of the South American Indians*, Argonaut Inc., Publishers Chicago.

Millones, Luis

2007 *Taki Onqoy: De la enfermedad del canto a la epidemia*, Centro de Investigaciones Diego Barros Arana, Santiago.

ロストウォロフスキ、マリア (Rostoworowski, María) (増田義郎 訳)

2003『インカ国家の形成と崩壊』、東洋書林。
ワシュテル、ナタン (Wachtel Nathan) (小池祐二 訳)

1984『敗者の想像力——インディオのみた新世界征服』、岩波書店。

How Did Inca Garcilaso de la Vega Understand Horse and Cattle?

KATO Takahiro

In Book 9 of the *Comentarios* (17th century), Inca Garcilaso de la Vega shows a long list of materials and technology introduced into the New World by Spaniards in the first decades of colonization. Horse was one of those introduced by the colonists, and some indigenous people of the Andes first believed that a mounted man and his horse were a half-god united in one body. Horse was then feared by them for some decades. This article tries to investigate how the understanding of horse of the indigenous people of the Andes changed in this period; this would be helpful to understand the structure of recognition among them.

As a mestizo, Inca Garcilaso had a unique standpoint at the time, and his *Comentarios* clearly suggests the difference with other contemporary authors from Spain. José de Acosta, the author of *Historia natural y moral de las Indias* (*The Natural and Moral History of the Indies*) and a Jesuit, was one from whom Inca Garcilaso sometimes quoted in his *Comentarios*. While Inca Garcilaso focuses on horse among newly introduced animals, Acosta's reference to horse seems to be rather perfunctory; the latter's interest was mainly in economical value. Inca Garcilaso clearly believed that horse was inevitable for Spaniards to conquer the New World. He states that Spaniards could not have conquered the indigenous people without the help of horse. Although he himself was a horse-lover, Inca Garcilaso also recognized the fear of horse among the indigenous people of the Andes. They extremely feared horse at the first stage of colonization (at least by the time of Inca Garcilaso's departure for Spain in 1560). N. Wachtel suggests that every society has its unique way of thinking, and that something sticking out from such theory would be understood as being supernatural; this seems to be helpful to understand the fear of horse among the indigenous people of the Andes.

When horse first came to the Andes, some people tried to understand that the animal was a kind of llama. But such an understanding was difficult because of the feature of war-horses mounted by Spaniards; the animal put man on its back and had silver feet, and so on. People were then confused and the horse became the fear. To understand the situation, the concept of 'huaca' is important. Inca Garcilaso suggests that 'huaca' has many meanings including temple, cemetery, one big and beautiful rose from the same root, the biggest fruit from the same tree, twins and their mother, twin llamas and their mother, disabled people, strange formed stone, etc. He understood extreme or different thing/person/animal as being 'huaca', and that from Europe was also included. This means that the Equinophobia among the indigenous people of the Andes should be understood as being the problem of folkloric category and recognition. 'Huaca' is thought to be something sticking out from the existing category, and also something situated among different categories so that such a thing takes a special

property. Its property is not stable, and the meaning of such a thing is gradually changed. 'Huaca' was ambiguous concept: both favorable and unfavorable which may be exchanged depending on the situation. In the case of horse, the indigenous people first believed that the animal was only malevolent and dangerous to them.

While horse was dealt with as being horrible existence ('supay' in their language), another newly introduced animal, that is cattle (ox/cow), was thought to be benevolent and useful to them ('viracocha'). Before the coming of the Spanish conquerors and their cattle, people of the Andes did not use animals for farming, thus such animals working on the field were believed as being extraordinary positive (the opposites to horses). This means that the people of the Andes tried to understand and categorize those animals introduced by the Spaniards as being kinds of 'huaca' (supay or viracocha) in order to construct them into their traditional structure of thinking.

道具の研究を推し進める

——方法論的検討と実践の試み——

坂井 信三

はじめに

生きていくということはどういうことだろうか。何かが生きていくということは、そこにある物質の集積、つまり体が動いていることではじめてそれとわかる。動かない体は生きていない。だから生きていくという生命の作用は、生きて動く物質の集積から分離できない。

ところが普通私たちは、この二つを分けて考えることが習慣になっている。生き物に関していえば、体の構造を研究する解剖学的なアプローチと生理作用を研究する生理学的アプローチとの分離だ。生命現象をこのように物質的な構造の面と生理的な機能の面に分離することに、分析上大きな利点があることは疑いない。現代の生物学においては、たとえば遺伝物質としてのDNAとその表現形としての生物体の関係のように、両者の因果関係を確定的に記述することが生命を理解する具体的な手法であり、かつ目標でもあるとみなされている。

人文科学における社会と文化の研究でも、同じような問題構成が少しちがった形で、しかしやはり支配的なものになっている。自然科学では、たとえば物質的な質量性をもった遺伝子が規定的な要因として扱われ、多様な生命現象はそれから派生する表現形態とみなされる。それに対して人文科学の領域では、精神に内在する意味や觀念に規定的な役割が与えられ、それが物的

な表象として外界に表出されるというように問題が構想されることが多い。もちろんこれは極端な単純化だが、それでも記号論的あるいは象徴論的な文化研究が、内在的な意味とそれを支える外在的な物質的形態との理論上の分離の上に成り立っていることは確かだろう。

こうした問題構成が、世界に対する私たちの認識に大きな成果をもたらして来たことはくり返すまでもなく確かなことだ。だが同時にそれが問題構成の一つの様式であって、そのまま現実ではないことも忘れてはならないだろう。生の経験をとらえる問題構成は他にもありうるし、より豊かな理解をもたらしてくれる問題構成があるかもしれない。実際人文科学でも自然科学でも、主流となっている問題構成とのあいだで緊張関係を保ちながら、それを補いあるいは乗り越えようとする知的運動はこれまでもさまざまな形でおこなわれてきている。

私は数年来隣接科学におけるそのような知的運動を人類学に架橋しながら、人類学の研究・教育の中に新しい方向性を探る試みをおこなってきた。過去2年間についていうと、南山大学パツへ研究奨励金から援助を受けながら、道具使用の研究を手がかりに文化の理解に関する方法論的な基礎研究をおこなった。ここではその経過をふり返りながら、道具研究をとおして人類学の

問題構成を組み直す可能性を、方法論と実践論の両面から探ってみたい¹⁾。

1. 道具研究の方法論的検討

(1) 道具研究の領野

G. バイトソンは『精神の生態学』の中で次のような啓発的な質問をしている。

「杖に導かれて歩く盲人を考えても面白い。その人の自己は、どこから始まるのか。杖の先か、柄と皮膚の境か、どこかその中間か。こんな問いは、ナンセンスである。この杖は、差異が変換されながら伝わっていく経路の一部に過ぎない。それを横切る境界線は、盲人の動きを決定するシステム全体のサーキットを切断してしまうものだ。」
[バイトソン 1990 : 432]

彼は西欧哲学において長く超越という観念をとおして考えられてきた「自己」をシステム論的にとらえ直す意図でこの例を出しているのだが、考えてみると実際この場合、精神的活動としての認知が手の先端で終わっているのではなく、杖の全長をつうじて地面に接するその先端まで拡がっているということに気づかされる。杖の石つきは感覚器のように地面の状態を探知し、杖の軸がその震動を神経のように手に伝えているわけだ。

M. メルロ＝ポンティも同様の事態に言及しながら、人間の世界経験における習慣化された道具使用についてこうしている。

「盲人の杖も、彼にとって一対象であ

ることをやめ、もはやそれ自体としては知覚されず杖の尖きは感性帯へと変貌した。杖は、盲人の触覚の広さと行動半径を増したのであり、視覚の同類物となったのである。…習慣とは、新しい道具を自分に付加することによってわれわれの世界内存在を膨張させること、ないしは実存のあり方を変えることの能力の表現である。」[メルロ＝ポンティ 1974 : 240-41]

前者はサイバネティックなシステム論の観点から、後者は常識化した思考習慣を括弧に入れて「生きられた」生の経験を内在的に記述しようとする現象学の立場から、いずれにしろ道具使用を反省の糸口として、生の経験を認識と行為、主体と対象の分離をとおして記述する根強い慣習を相対化しようとする努力を示している。バイトソンもメルロ＝ポンティも道具研究を目指していたわけではないが、道具研究が文化研究、ひいては人間的生の理解に向かう姿勢の再定式化のためのよい手がかりになることがわかるだろう。

認識と行為、主体と対象の分離を乗り越えようとする同様の努力は認知研究の領域にも見いだせる。実験心理学とコンピュータ・サイエンスを背景にしたいわゆる認知科学においては、主体と対象を分離し、脳内に格納された機構に認知の主導的な役割を配分する心理主義あるいは認知主義が非常に強い支配的パラダイムとして働いている。しかしたとえば生態心理学の立場に立つ E. リードは、認知という現象を人間に限らず生物が環境内で生を実現するアフォーダンスを探索する行動ととらえ、主

体の認知と対象への行為を、身体と環境とのあいだでつねに同時的かつ循環的に生起する「切り結び」(encounter) としてとらえようとしている²⁾。その上で彼は人類の道具使用を、環境内のアフォーダンスのたんなる利用ではなく、「当面の課題に関連したアフォーダンスを環境から選択、発見、抽出する能力」によって裏づけられた活動として位置づけている[リード 2000:248]。

こうした一連の試みを見ながら人類学における道具研究をふり返ってみると、物質文化という用語のもとに、道具をたんなる文化的対象物としてとらえてきた従来の人類学の見方の外側に、豊かな研究領野が広がっていることが理解される。もちろんこれは非常に単純化したいい方で、人類学の中でも主客の分離を批判的に乗り越えようとする物質文化研究の有力な試みは早くからあった。たとえば A. ルロワ＝グーランの「動作連鎖」の概念 [1973] はその代表的なものだろう。さらに最近では、とくにエスノアーケオロジーを背景に「物質的関与アプローチ」[レンフルー 2008] や「マテリアル・エージェンシー」論 [De Marrais et al. 2004, Knappett et al. 2008] などという形で、物質文化研究をてこに文化研究の新しい領野を切り開こうとする動きが目立ってきている。

(2) 道具の存在論的境位

しかしあまり先走らずにここでもう少し立ち止まって考えてみると、人類の道具使用をめぐって確認しておくべきいくつかの問題が浮かんでくる。さしあたりそれを「道具の存在論的境位」をめぐら問題とっておこう。

道具使用は人類学研究において人類を定義する要件として、いわば暗黙の前提となってきたとっていいだろう。だがここ数十年のあいだに、人類以外の動物、とくに野生チンパンジーに多様な道具使用というべき行動が見いだされるようになってきたことは、ここであらためて指摘するまでもない [山越 2000]。さらに最近では新世界ザルの一種であるオマキザルが石で木の実を割る例や、木の枝や棘のある葉で虫を引き出すニューカレドニアガラスの例のように、進化的に人類につながる類人猿以外の系統でも道具使用の例が知られるようになってきている [ハンセル 2009]。

このように道具使用が人類以外の多くの種にも認められ、さらに環境と身体の出会いにおけるアフォーダンス利用の様態として生物一般の行動にまで拡張されるなら、人類の道具使用は、たとえば生理学者スコット・ターナーが『生物がつくる〈体外構造〉』[2007] で論じているような生物に広く見られる生態的行動の範疇に入るもので、人類の道具にそれ固有の存在論的境位を認める理由はなくなってしまう。だが事実としてホモ・サピエンスの出現以後、とくに約一万年前に始まる定住の開始とともに、人類が膨大な量と種類の人工物を作り出し、それに取り囲まれて生活するようになってきていることは否定できない。人類における道具のこのようなあり方を、生物における体外構造と同一視することにはやはり無理があるだろう。

ここであらためて数十年前の現象学者たちの思索をふり返してみよう。彼らの利用した動物行動学や実験心理学の知見は、今ではすっかり古くなってしまっている。だ

がその考察は、私たちにとって人間を理解する上でやはり示唆にとんでいる。

M. シューラーは現象学的人間論を論じた「宇宙における人間の地位」[1977(1927)]で、J. フォン・ユクスキュルの動物行動学 [1995 (1934)] を参照しつつ動物の「世界繫縛性」に対して人間の「世界開放性」について述べている。それは人間が事物の認識において一定の適応行動の図式に縛られておらず、ある行動図式におけるある事物を別の行動図式においてもそのものとして維持することができること、つまり人間は限定された状況における事物との特定の適応的關係を離れて、その事物をそのものとして認識することができるということである。

メルロ＝ポンティが『行動の構造』[1964 (1942)] の中で検討している人間にとっての世界と他の動物における世界との構造的相違も、同一線上にある。以下、木田にしたがってまとめてみよう [木田 1984 : 67-83]。

メルロ＝ポンティはケーラーの有名な『類人猿の知恵実験』(1925) を例に引きながら、チンパンジーと人間における対象物のあり方のちがいを論じている。チンパンジーは特定の状況で特定の対象物を道具として使うことができるが、それを他の状況でも潜在的に利用可能な道具として保持しておくはできない。それに対して人間は、「限られた環境に対してだけでなく、可能的なもの、間接的なものに対しても向きを定め」、「現実的環境の向こうに各自が多く局面から見ることのできる一つの〈物の世界〉を認め」ることができる [メルロ＝ポンティ 1964 : 261]。木田はこれを、「現

に与えられている構造がそのひとつのヴァリエーションとしてとらえられるような高次の構造を構成しようところに、人間の間たるゆえんがある」といいかえている [木田 1984 : 82]。つまり人間は、生物学的な環境に閉じ込められることなく、〈世界〉へと超出し、〈世界〉に開かれた行動の構造をもった「世界内存在」であるということだ³⁾。

一見すると、こうした思索を再評価することは時代遅れの人間中心主義を擁護するものと感じられるかもしれない。しかし人間の生を生物一般の生に還元解消してしまえばいいわけでは決していない。人間の生を生物一般の生との連続性の中におきもどすと同時に、その固有の次元を再構築することが必要なのである。実際メルロ＝ポンティは〈世界〉へと超出し環境世界を変えていく人間の行動をヘーゲルにしたがって「労働」と名づけているが [メルロ＝ポンティ 1964 : 242]、このとらえ方は、ハンナ・アーレントが『人間の条件』の冒頭で、生物個体としての人間の生命維持活動 (labor) に対して「仕事」(work) と名づけた人工物の創出活動、つまり個々の人間の生物学的生をこえて永続する歴史化した人間的世界の創出活動へとつながっていくものだ [アーレント 1994 : 19-20]。このように見ることによってこそ、人類の文化において物質が帯びることになる歴史性、政治性を適切に取り扱う準備ができるだろう。

(3) 道具の社会性の基礎

人間の行為がこのように個体をこえた次元に拡がっているにしても、そのことは、個体の発達においてどのようにして可能になるのだろうか。

リードは幼児の発達過程の観察から、対象物の認知が幼児の個体に限定された身体—対象という次元から、やがて養育者との対面的相互行為をとおして主体—養育者—対象物のあいだの「動的三項関係」という社会性を帯びた次元へと展開していくことを指摘している [リード 2000: 274-288]。これはいかえれば、幼児にとっての環境が個体の環境であるばかりでなく、養育者の環境と相互浸透した複合的な環境になっていくこと、そして環境のアフォーダンスは他者の環境と相互浸透し社会性を帯びたアフォーダンスとなることを意味しているだろう。

リードの指摘は、進化心理学者のトマセロが「9ヶ月革命」という言葉でいっていることと正確に一致している。トマセロによると、幼児は生後9ヶ月ごろまでに大人と一緒に同一の対象物に関心を集中することができるようになるが、これはいわゆる「心の理論」すなわち他者を自分と同様に意志と意図をもった行為の主体として理解する能力を前提としている。この能力をベースに、幼児は12ヶ月ごろまでに自分を意図をもつ主体として経験するだけでなく、自分とは別の他者の意図をシミュレーションできるようにする。こうして成立する間主観的な現実の中で、模倣、教示、共同作業による人間に特有の「文化学習」が展開していく [トマセロ 2006: 71-104]。

つまりリードが個体と環境の生態学的インタラクションの社会的拡張としてとらえた問題を、トマセロは同種個体間のインタラクションにおける学習の問題としてとらえているわけである。いずれにしろ両者ともに、人類における認知の特性をその社会

的広がりに見いだしており、われわれとしてはそこに人類の道具使用の固有の特性を見いだすことができるだろう。道具は、環境への技術的働きかけのために選び出された対象物であるだけでなく、その製作と使用が本質的に社会的関係の中におかれている対象物なのである。

(4) 物質的関与と社会的現実

ところでトマセロによると、同種の他個体の行動を学習する「社会学習」は多くの哺乳類や霊長類に広く見られる行動の獲得の仕方であるが、同種の他個体とのインタラクションの中で対象物に関与する三項関係において成立する学習、すなわち「文化学習」は現生の類人猿では観察されないという [トマセロ 2006: 18-46]。だとするなら、人類の文化の進化において模倣による文化学習の成立が大きな意味をもったことが推測されるだろう。進化心理学者 M. ドナルドは、類人猿の文化的行動を episodic culture と性格づけ、それに対してホモ属の文化を「模倣的文化」(mimetic culture) としてとらえて、その確実な表現をホモ・エレクトゥスのアシューレアン型の石器製作に見いだしている [Donald 1991: 162, 179]。実際、きわめて長期間にわたってしかも非常に広い地域に分布したアシューレアン型石器は、その背景に模倣にもとづく強力な伝承形成の存在を感じさせる。

とはいえ「模倣的文化」からアーレントのいう「仕事」とおした歴史化された世界の構築までは、まだまだ長い道のりがある。ここではその過程をたどる余裕はないが、ただ一つ指摘しておきたいことは、「模倣的文化」はそれに関与するエージェント

たちの時間的・空間的共在を必要不可欠の要件としており、したがってそこでおこなわれる道具製作・道具使用も必然的に限定的な社会的広がりしかもちえないということである。先史考古学の知見からいえば、社会的時空のそうした限定性は前期旧石器時代から中期旧石器時代までにわたるホモ属の文化の特徴であるといっているようだ。ヨーロッパの先史社会を追究した社会考古学者 C. ギャンブルが綿密な方法論的検討をとおして示しているとおおり、社会的時空の拡張は明らかにホモ・サピエンスの登場とともに明白になってくる。彼によれば、社会的時空の拡張はエージェントの不在を乗り越えて社会的パフォーマンスの持続を可能にする装置があって始めて可能になるが、それはまさにホモ・サピエンスの生み出した多様な人工物の創出によっている [Gamble 1999: 351-416]⁴⁾。

ある程度恒久的な物的施設（炉、小屋、儀礼施設、埋葬施設など）の構築は、エージェントの身体的共在をこえた社会関係の拡張を可能にする。ということはいいかえれば、この場合物的施設は、拡張された社会関係を外在的に表現したものではなく、それ自体が拡張された社会関係を生み出す契機となっているとみなさなければならない。空間内の一定の場所に、ある耐久性をもった木材や石材などの物質的素材を配置することで生まれる施設は、それ自体が空間に不動の場所を刻印し、時間の経過に抗する持続を生み出す。それが身体的共在に限定された対面的な社会関係に、時空をこえる拠り所を与えるわけだ。

こうした物質性を社会関係に持ちこむことによって、それがなければ成立しがたい

社会的現実を創出する効果を、レンフルーは「物質的関与」(material engagement)と呼んでいる [レンフルー 2008: 175-177]。トマセロやリードが指摘する三項関係において、対象物は共在するエージェントたちのあいだにあってその経験を相互に関わらせ、対面的関係を共同的＝協働的な社会的関係に変容させる契機となっている。それに対して「物質的関与」においては、対象物はそれがもつ物質的諸特性 (properties) に応じて、生物学的な生をこえて不在のエージェントたちをもまきこんだ新たな種類の社会的経験、社会的現実を生み出す。たとえば埋葬施設の存在は、生物学的な親子関係をこえた社会的な親族関係の創出に決定的な重要性をもっているだろう。世代をこえた親族関係の認知が先にあってのちにそれが外在化されるのではなく、外在的に存在している物的施設が不在の者たちの親族関係を想起させ、それを記録しあるいは操作する可能性を創出しているのである。

注目すべきことに、この「物質的関与」において活用されているのは、対象物が身体との直接的な関係においても生態学的なアフォーダンスだけではない。時代をこえて存続するモニュメントや広範な経済的交換の媒体となる貨幣などを考えてみればよい。素材としての木や石や金属がもつ耐久性・不変性、あるいは均等分割性や整形可能性などの物質的プロパティは、生きた身体にとってではなく、諸身体が構成する社会という集合体に固有のパフォーマンスにとって有用なアフォーダンスを提供している。人類が定住生活を始めて以来、ますます複雑化する社会生活を支えているのは、

物質的プロパティが供与するこのような二次的な社会的アフォーダンスだといえるのではないだろうか。レンフルーは「物質的関与」の概念化にアフォーダンスの概念を利用していないようだが、生態心理学の一次的・直接的な生態学的アフォーダンスにくわえて、二次的・間接的な社会的アフォーダンスを考えることは、認知科学的・発達心理学的方法と社会学的・歴史学的方法との架橋を可能にしてくれるだろう。

さきに道具の存在論的境位について論じた際に、人間は「現実的環境の向こうに各自が多く局面から見ることのできる一つの〈物の世界〉を認め」、そうした世界の中に「世界内存在」として住みこむというメルロ＝ポンティの省察をふり返った。彼の現象学的な思索は、ここでいう物質的プロパティに支えられた二次的・間接的な社会的アフォーダンスのアイデアと重なり合っているだろう。その〈世界〉とは、個体とその生態学的環境との関係をこえて、物質的プロパティの認識と活用を媒介に諸個体の生をからみ合わせつつ拡張する歴史的に構築された社会的現実だといえるかもしれない。

現代の人文諸科学に現象学的省察を導入しようとする場合、諸制度に媒介された日常的生から身体の「生きられた」経験へと向かう下降的な方向に関心が向けられることが多いようだ。しかし人間的世界の理解のためにはそこからもう一度反転して、身体性から社会性へ、生態から歴史へと上昇的な方向に向かうことが必要なのではないだろうか。

2. 道具研究の実践のころみ

上記のような道具研究の方法論的検討に並行して、南山大学人類学博物館の特別展への協力という形で実践の試みにも関与した。特別展そのものは博物館特別嘱託職員である木田歩さんの活動だが、この展示のもつ道具研究としてのねらいについて、私に関与した限りで考えを述べてみよう。

(1) 「道具を回路で考えよう」

「道具を回路で考えよう」という展示のテーマは、だれにとっても聞きなれないものだろう。「回路ってなに?」、と多くの人思ったにちがいない。だが上の方法論的検討を読んでくれた読者には、それがある程度わかるだろう。冒頭に述べたとおり、それは形態と機能、主体と対象を分離してしまう思考習慣にゆさぶりをかけようとするものなのだ。そしてさらにいえばこの展示は、研究対象としての「道具」の展示ではなく、道具を研究するときの「方法的態度」を意識的に視覚化しようとした展示でもあった。

「回路」とは、第一に道具を使用しているときに実際におこっている事態のことを指している。それは、ベイトソンの言葉でいえば認識＝行動をおこなう「自己というシステム全体のサーキット」のことであり、リード的な言葉でいえば認知＝行動において環境とエージェントとのあいだで同時的かつ循環的に生起している事態のことだ。だがそれと同時に展示は、そうした事態について考えようとするときに私たちの思考に絡みついてくる慣習的な思考方法を明るみに出して、それに批判的に対峙するための思考のツールとしても「回路」のイメー

ジを使っている。ここにもまた、思考内容
と思考形式とを分離しないように志向する
方法的態度が表明されているわけだ。

具体的にいえば、三枚のパネルでボック
ス型に設置された展示空間の全体は回路の
ように配置されており、三つのセクション
に展示された展示品と説明文はパネル上の
配線につながっていて、見る人の視線と歩
みを誘導しながら巡回していく。展示品と
パネルの説明文、そして展示空間全体に対
する照明にも、細心の注意が払われている。
パネルは通常の展示とはことなっており、全
面に反射の多い真っ黒な紙が張られ、そこ
に白いシールで説明文がつけられている。上
からスポットライトが当たると、説明文は
黒地を背景にくっきりと浮かびあがり見え
、抽象的な内容の解説に見る人の目を引
きつけるように工夫されている。ここで説
明文はたんに情報として展示品に添えられ
ているのではなく、それ自体が見る人の積
極的な関与を引き出し、配線をたどりなが
ら問題を探索していくように、見る人の視
線と歩みをみちびくアプローチと一体化し
た形でデザインされているのである。

「回路」のアイデアを提供したのは山崎
剛くんだが、展示を構成する素材の物質的
プロパティを十分に活用しながらそれを展
示空間に具体化したのは木田さんの仕事で
ある。

(2) 「することは、しること」(sensor)

展示の第一セクションは「することは、
しること」。これはベイトソンやメルロ＝
ポンティが視覚障害者の杖の例から考えた
思考実験を、来館者にそのまま感じてもら
うことがテーマだ。表面がでこぼこした台

の上においた紙に鉛筆で字を書くとき、鉛
筆は「書くための道具」であるだけでなく、
紙とその下の地の物理的特性を探り出して
力の入れ具合を調節するためのセンサーの
役割を果たしている。同じように煮込んで
いるカレーをかき混ぜるシャモジは、「液
体をすくう道具」ではなく具材の煮え具合
を感知し、鍋の底が焦げついていないか察
知する装置としても働いている。この展示
は、鉛筆や台所道具をとおして見る人の記
憶と想像を引き起こし、すぐに直感的に理
解される。そうすると見る人は、「道具は
何かをするだけでなく、何かを知る道具で
もある」ということを、自分の生活の中で
次々と発見していく目をもつことになるだ
ろう。理論的にいえば、これは道具を介し
た環境とのインタラクションを意識に上ら
せる思考実験の展示だということになる
う。

(3) 「やっているのに、やらされている」 (agent/patient)

第二セクションのテーマは「やっている
のに、やらされている」。意図的・意識的に
やっているつもりだが、実は無意識の
うちに誘導された慣習的な行動になってい
ることがある。私たちの生活の中で、いろ
いろの道具がそうした誘導装置となってい
るかもしれないことに気づいてもらうのが
目的だ。展示台の上に設置された赤い大き
な押しボタンを見た人の多くは、実際に手
を出してボタンを押してみたようだ。どこ
にも「ボタンを押してください」という指
示はない。でも、ボタンを見るとつい押し
たくなってしまふ。

こうした事態は、実は日常生活の中に非

常にたくさんある。歩いていく道路に白線が引いてあると、人はいつの間にかそれに沿って歩いている。駅の改札口に向かうアプローチは、狭い通路に向かって次第に人々の列が絞り込まれていくようにデザインされている。自動券売機の表面にあるたくさんのボタンは、特別の指示がなくてもほぼ間違いなく作業をこなせるようなインターフェイスを作り出している。こうした物的装置のおよぼす効果は普通ほとんど意識されないだろうが、私たちの複雑な社会生活をスムーズに展開させるために、社会空間のいたるところに張りめぐらされているかもしれない。

もうひとつ例として説明文に出てくる日記の話は、個人の生の組織化に同じような力が働いていることに気づかせる。今日やったことを記憶しているから日記を書くのではない。日記を書くから、今日一日の記憶が整理されるのだ。ここでは、普通に考える原因と結果が逆転している。私たちの行為の意味や意図は、この例のように行為の原因ではなく、行為をおこなうことから生み出される効果なのかもしれない。道具を「回路」で考えてみることは、こうした認識の転倒に気づかせてくれる。理屈っぽくいえばこれは、行為のエージェンシーが人間の側だけではなくモノの側にあるという、マテリアル・エージェンシーの展示だ。

(4) 「あることは、ないことの反対ではない」(emergence)

私たちは、さまざまな道具や物的装置に満ちあふれた世界に生きている。ハイデガーが『存在と時間』の最初で論じている

ように、実際私たちの生活は無数の道具の連関の中に埋もれているといってもいい。だがその道具連関が順調に機能してくれているときには、道具たちは行為の背景に溶け込んでいて、取り立てて意識に上ることもない[ハイデガー 1994(1927):158-178]。

さきに指摘したように、私たちの生きる〈世界〉はそうした道具連関を含んだ世界で、私たちはその中に「世界内存在」として住みこんでいる。道具は、所与の自然的な世界に後から必要に応じて追加されたものではなく、私たちの世界の不可欠の構造的契機になっている。だがそのことを意識に上らせるのはむずかしい。何しろ道具は、まるで空気のように私たちの世界の一部だからだ。

道具が私たち人類の生きる〈世界〉の本質的な構造的契機だということは、道具という対象物の「存在論的境位」に関わることだ。必要に応じて新しい道具は次々と生み出されてくるだろう。だから〈世界〉にとって本質的なのは個々の道具ではない。そうではなく、道具を介して環境との「切り結び」(encounter)に新たな局面が次々と生み出されてくるような〈世界〉、また道具としてつくられたわけではないどんな自然物も、道具として取り上げればただちに道具になる可能性をもって待ちかまえているような〈世界〉、そのような〈世界〉を私たちが生きているという意味だ。

生物学者のマトゥラーナとヴァレラは、それぞれの動物が感覚を介した環境との交わりからそれ固有の〈世界〉を生起させていく生命現象を「オートポイエーシス」、すなわち自己創生するシステムとしてとらえた[マトゥラーナとヴァレラ 1987]。それ

に類比できるような意味で、私たちは道具的な関与をとおして創発する人間に固有の〈世界〉を生きている。そういう意味で、道具を私たちがその中に「世界内存在」として生きる〈世界〉の本質的契機として理解することが必要なのではないか。

今回の展示の中で木田さんが一番悩んだのは、この第三セクションだったのではないだろうか。展示では「切る道具」を手がかりにして、それが無い世界は、私たちの世界から「切る道具」を差し引いただけの世界ではない、ということ想像してもらおうとしている。「切る道具」のない世界は、たんに「切れなくて不便だ」というだけではない。その世界を生きることは、そもそも「切る」という行為の必然性がない世界を生きるということだ。もしそれで不便なら、人は何とかして「切る道具」を生み出してしまおうだろう。だから反対にいえば、私たちが「切る道具」を持っているということは、「切る」行為が必然であるような世界を、私たちは生きているということだ。

展示では、「切る」行為の必然性をものの分配と交換という社会的活動と関連づけて示そうとした。食物の分配と交換、つまり「切り=分ける」という行動は明らかに人類に特徴的なものだが、その行動上の特性はものを「切る道具」という物質的特性とつり合っていないければ実現しなかったはずだ。「切る道具」の存在は、贈与交換に基礎をおく社会的世界の生成とつり合っているはずなのだ。

このセクションの意図がどの程度、そしてどのように来館者に伝わったかわからない。しかし私たちが無数の道具たちと一緒に

に住みこんでいるこの〈世界〉がまったく独特の創発的な世界であることに、来館者の方々が直感的に気づいてくれば、それで展示の目的は達せられたことになるだろう。

むすび

この論文の前半で論じた方法論的検討はごく初歩的かつ大雑把なもので、道具研究をとおして文化の広大な研究領域に探りを入れようとするはじめての一步にすぎない。その内容は、主として大学院人間文化研究科博士前期課程の共通科目「文化表象論」の場を借りて検討したもので、今後も人類学と考古学だけでなく、哲学、心理学、生物学、認知科学などの隣接諸科学に関心をよせながら、方法論の柔軟化と豊穡化を目指していきたい。

後半でふれた博物館の場を借りた道具研究の実践は、いろいろな意味で私にとって未知の分野だった。大学教員として研究と講義に専念してきた者としては、特別の予備知識も専門的関心ももちあわせない一般の来館者に、抽象的・概念的な思考を伝えることがどのような作業なのか、学芸員の仕事をとおして教えられるところが大きかった。実際そこでは、内容と形式を分離せず、抽象的思考を物質性を媒介に提供することが不可欠だ。その意味でこのような実践活動に関わったことは、道具研究の理論的深化のためにも役立った。特別展に関与させていただいたことを、特別嘱託職員木田歩さんと南山大学人類学博物館に感謝したい。

付記

この研究は、2010年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2 (特別研究助成・一般) (研究課題「道具使用・身体動作・空間編成：「文化」の統合的研究) の助成を受けておこなったものである。

注

- 1) その成果は、学部3年次生向けの「人類文化学演習 I、II」、大学院人間文化研究科博士前期課程の共通科目「文化表象論」、そして大学院修了者(山崎剛くん、木田歩さん)とおこなっている研究会「ホモ・サピエンスの道具研究会」の活動をとおして出力されている。2009年度の成果は、坂井 [2010] として公刊した。
- 2) そもそも J. ギブソンによる affordance の概念自体、生物が環境内で「できる」ということと環境がその可能性を「供与する」ということとを、内外・主客の分離をこえて同時にとらえようとする造語だったと考えることができるだろう。
- 3) 木田の『ハイデガーの思想』[1993: 83-91] には、ハイデガーにおける人間的世界ともものあり方に関する考察について、ここで述べるメルロ＝ポンティの『行動の構造』における議論を組み込んだより包括的な解説がある。
- 4) Gamble [1999] には邦訳があるが、翻訳上の理由でここでは使用しない。

参考文献

アーレント, H. 1994 『人間の条件』、志水速雄訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房。

ベイトソン, G. 1990 『精神の生態学』佐藤良明訳、思索社。

De Marrais, E., C. Gosden and A. C. Renfrew (eds.) 2004 *Rethinking Materiality: the engagement of Mind with the Material World*, Cambridge, McDonald Institute for Archaeological Research.

Donald, Merlin 1991 *Origins of the Modern Mind: three Stages in the Evolution of Culture and Cognition*, Harvard University Press.

Gamble, C. 1999 *The Paleolithic Societies of Europe*, Cambridge University Press.

ギブソン, J. J. 1986 『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』、古崎敬他訳、サイエンス社。

ハンセル, M. 2009 『建築する動物たち』、長野敬・赤松眞紀訳、青土社。

ハイデガー, M. 1994 『存在と時間 上』、細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房。

マトゥラーナ, H., F. ヴァレラ 1987 『知恵の樹——生きている世界はどのようにして生まれるのか』、管啓次郎訳、朝日出版。

ユクスキュル, J. von 1995 『生物から見た世界』、日高敏隆・野田保之訳、思索社。

木田 元 1984 『メルロ＝ポンティの思想』、岩波書店。

—— 1993 『ハイデガーの思想』、岩波新書、岩波書店。

Knappett, C. and Lambros Malafouris 2008 *Material Agency: toward a Non-Anthropocentric Approach*, New York, Springer.

ルロワ＝グーラン, A. 1973 『身ぶりと言葉』、荒木亨訳、新潮社。

メルロ＝ポンティ, M. 1964 『行動の構造』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房。

- 1974『知覚の現象学2』、竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房。
- リード, E. 2000『アフォーダンスの心理学——生態心理学への道』細田直哉訳、新曜社。
- レンフルー, C 2008『先史時代と心の進化』、小林朋則訳、ランダムハウス講談社。
- 坂井信三 2010「文化概念の再構築へ向けて——道具と動作の研究から始めてみよう」、『南山大学人類学博物館紀要』第28号、pp. 43-49、南山大学人類学博物館。
- シェーラー, M. 1977「宇宙における人間の地位」、『マックス・シェーラー著作集』第13巻、亀井裕・山本達訳、白水社。
- トマセロ, M. 2006『心とことばの起源を探る——文化と認知』1999、大堀寿夫他訳、勁草書房。
- ターナー, J. S. 2007『生物がつくる〈体外〉構造——延長された表現型の生理学』、滋賀陽子・深津武馬訳、みすず書房。
- 山越 言 2000「野生チンパンジーの道具使用から見たヒトの物質文化の起源」、松沢哲郎・長谷川寿一編『心の進化——人間性の起源をもとめて』、岩波書店。

Anthropology and the Study of Tools

SAKAI Shinzo

This article tries to consider a possibility of new aspect of anthropology from the study of tools. Scholars have suggested the importance of tools in human cognition. Both G. Bateson and Merleau-Ponty show their attention to the relationship between a blind person and his/her cane. The former, trying to re-consider the 'self' (ego) in the way of systems approach, asks from where the blind's 'self' begins. The latter, approaching from the phenomenological point of view, suggests that the existence of the cane is changed so that it becomes the same kind of the sense of sight. They criticize the traditional way to describe human experience; authors have described such experience with distinguishing consciousness from acts, and the subject from object. While those two scholars did not focus on the study of tools itself, their approaches, that is, overcoming the separation of the subject and object, would give some clues for further studies of culture and the understanding of human life. Similar approaches can also be found in the study of cognition. Concerning anthropological studies, some scholars such as A. Leroi-Gourhan (on the material culture) have criticized the traditional approach.

In order to consider the possibility of the study of tools in anthropology, it would be necessary to make the status/meanings of tools clear. Recent studies show that some animals can use tools for feeding. What distinguishes human beings from such animals seems to be the 'openness to the world', as M. Scheler suggested; while animal's use of tools is bound on the situation which those animals are concerned, human beings can use tools in unlimited ways. A similar suggestion is made by Merleau-Ponty. Creation of artificial materials would be a unique property of human activity, and such an aspect makes us possible to start the study of tools in anthropology.

The study of infant leads us to further understanding of human cognition. Generally a nine-month-old baby can focus on the same object as other adults, and he/she becomes possible to simulate another persons' intention by the twelfth month. As M. Tomasello suggests, imitation, instruction and the 'learning of culture' by cooperation develop in human society, and these are based on the property of human cognition.

Imitation (mimesis) is thought to be the basis of human culture, and tools should have been the important object situated among the social relationship. This can be supposed in a case of human evolution. M. Donald defines the culture of Homo as being 'mimetic culture', while he characterizes the cultural activity of anthropoid apes as 'episodic culture'. He suggests that Acheulean stone implements of *Homo erectus* show the firm formation of tradition by imitation. But, as C. Gamble insists, such cultural activities were limited in time and space until the middle of Paleolithic Age.

Apparent expansion of time and space can be traced among *Homo sapiens* in the form of artificial materials. Enduring equipments such as hearth, hut, and those for ritual or burial make it possible to create the expansion of social relationship. The concept of 'material engagement' by C. Renfrew is also suggestive. He suggests that the social reality is created only with the introduction of such materiality (that of enduring equipment) into the social relationship, calling the effect of creating such reality as being the 'material engagement'. The 'material engagement' is not limited in direct relationship between people and materials which include enduring monuments and money, and so on. Thus the study of tools from the phenomenological point of view may develop further understanding of human culture.

Besides the above mentioned attempt in the theoretical study of tools, the author was involved in special exhibitions at the Anthropological Museum of Nanzan University. Those four exhibitions were concerned about tools: (1) thinking about tools by a 'circuit' (based on Bateson's approach); (2) a tool as a sensor (based on both Bateson and Merleau-Ponty about the blind-cane relationship); (3) feeling the agent-patient relationship through tools ('tools make us do something'); (4) emergence of tools in human life (encounter with the environment through tools). From these attempts, the author learned how to inform abstract issues to visitors who are not specialists.

生きている世界に気づき 生きなおすための人類学

解説：特別展『道具を回路で考えよう』

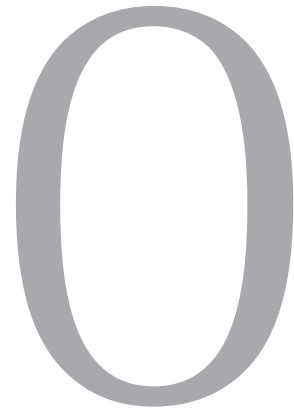
ホモ・サピエンスの道具研究会

山崎 剛

(Olduvai Industry 代表)

木田 歩

(元南山大学人類学博物館特別嘱託職員)



起動

2010年9月24日から11月20日にかけて、南山大学人類学博物館では、ホモ・サピエンスの道具研究会の企画協力のもと特別展『道具を回路で考えよう』を開催しました。『道具を回路で考えよう』という特別展タイトルは、人文学には馴染みない「回路」という言葉を用いたことで、電気機器についての展示を想像した人も多かったと思われます。たしかに、現代の家電の多くは、集積回路によって優れた機能を実現しています。そして何よりコンピュータは、私たちの生活にとってもはや欠かせないものとなったと言えるでしょう。

ところで、そのコンピュータを買い換えたり、新しいソフトウェアをインストールした際に「初期設定」の手続きを求められて戸惑うという経験を、誰もが一度はしたことがあるのではないのでしょうか。こうした作業は、けっこう煩雑なものです。が同時に、それは、自分がじつはこれまで、すでに設定された世界を生きていたのだということに気づかせてくれるものでもあります。つまり、どのようなものであれ実行は、必ずある設定の上でおこなわれている。これはコンピュータ上だけの話でなく、私たちのあらゆる活動がそうだとと言えます。だって、歩くというあたりまえの行動でさえ、地面がある程度平らであることや、まっすぐに伸びた背骨と二本の足という私たちの身体的な設定があってはじめて可能になっているのですから。そしてとても不思議なことに、この「設定」というものは、実行の外側にあるためか、実行の最中には意識されることがほとんどありません。私たちがコンピュータ上の作業に満足している限り、それを意識したりはしないように、設定は見えないものになっているのです。

今回の特別展『道具を回路で考えよう』は、表向きには「道具」についての展示でしたが、じつはその背景にあった関心は、私たちが生きて経験しているこの世界の「設定」について考えてみることでした。そして、そのような見えなくなっているものや、考えることができなくなっていることに触れる実践として人類学をしてみせることだったのです。ここでは展示においては直接的に語られることのなかったこうした背景的な関心から、特別展を解説するとともに、「設定」が設定されているところまで降りていって物事を考えることが何をすることなのかを考えてみたと思います。

1

することは、しること

ありふれた、料理をするための道具

摘むための道具

掬うための道具

引っくり返すための道具

でも、そのためだけの道具？

どれも、できぐあいを知るために使ってもいます。





展示では、ありふれた道具を用いて、考えてみればそうなのに、なぜかそう考えてはしていないことを提示しました。道具について考える私たちの思考では、なぜかいつも矢印が一方通行になる設定になっています。道具を使うことは、人間→道具→対象へと作用が及ぶことだと考えていて、いつも自分は出力している側だと考えている。だけど、人間←道具←対象という逆方向へと戻ってきているものってないでしょうか？。味を調べようとしてシチューの鍋をかき混ぜる時、私たちはただかき混ぜているだけじゃなく、具材の火の通りぐあいを敏感に感じ取っています。出力すると同時に入力もあって人の行動は調整されている。私たちの道具使用の実態は、することと知ることが一緒になって成立していると言えるでしょう。こんなふうにもいつもやらない考え方で、いつも考えずにやっている設定の外側で考えてみれば、いつもとは違った、考えてもいなかった設定が見えてきます。

毎日つける日記

その日あった出来事や、その日に感じたこと考えたことを思い出して書くのが日記。人は、それぞれ何かの目的やきっかけがあって、自分の意思で日記をつける。でも、毎日、きまって、その日の終わりに、その日にあったことを思い出そうきっかけを与えてくれるのは日記の方。



ペンにも紙にも、アイデアはないけれどもともと、頭の中にだってアイデアはない。ペンと紙があって、書いているうちにアイデアは思いつかされるもの。



2

やっているのに、させられている

何も書かれていない白い紙を前にすると、私たちは何を書こうかといつのまにか考え始めています。日記をつけていれば、私たちはそこに何かを書き込むべく、いつのまにかその日あったことを思い出そうとしています。こうした思考が動き出すスイッチは誰が押しているのでしょうか。すべては自分の意思でしょうか？。社会生活では人間の「意思」を出発点にする設定があります。意思を持たない物や環境を操作できるのは、意思を持った人間だけ。でも実際のところ生きている世界では、どっちが出発点なのかわからない設定になっています。人間によって道具は発達し、道具によって人間も成長する、どっちがきっかけかはわからなくても、ぐるぐるまわって前に進んでいる。道具と私たちとのあいだには、やっているのに、させられている設定があります。

あることは、ないことの反対ではない



誰もがよく知ってる、すごい道具

石器は、今に残る人類の道具で最古のものでも、すごいのは古いものだから？

石器がなかったら、「切る」ことができない。
「切る」ことがなかったら、
今でもやっぱり、かぶりついて食べているのだろう。
ロース、カルビ、バラ、ヒレ……
その世界には、肉の部位を味わうという贅沢はない。
ホールケーキがあったとしても
みんなで均等に切り分けることがない
ちょっと考えることのできない世界。

3



私たちは、ケータイを忘れると不便や不安を感じます。でもケータイがまだなかった時代には、そんな不便や不安はどこにもありませんでした。それなら、この不便や不安はどこからやって来たものなのでしょう。道具がないとは、何がないことなのか。道具があるとは、何があることなのか。言葉の意味の世界では、「ある」と「ない」は反対の設定になっています。でも実際は、「ない」ものはないのだから経験としてもないはずでしょ。それなら「ある」ものとは、圧倒的にあるもののはずです。それは反対どころか比較にならないものです。切る道具としての石器がつくられた時も、きっとそれは人間にとって、比べようのない圧倒的なものだった。なにしろ、世界が切り分けられる世界に変わってしまったのですから。今、私たちはネットワークにつながったコンピュータを使っています。それが世界の未来をどんなものに変えるのかわからないまま、それでも間違いなく新しい世界がひらいているのを経験しているはずです。どんな道具であれ、それを使う私たちとのあいだで回路がつながると、圧倒的な世界が新しく立ち現れる。それが、道具があるということです。

回路のなかで、戸惑ってしまう展示

見る者が戸惑ってしまう展示には、2つの種類がある。

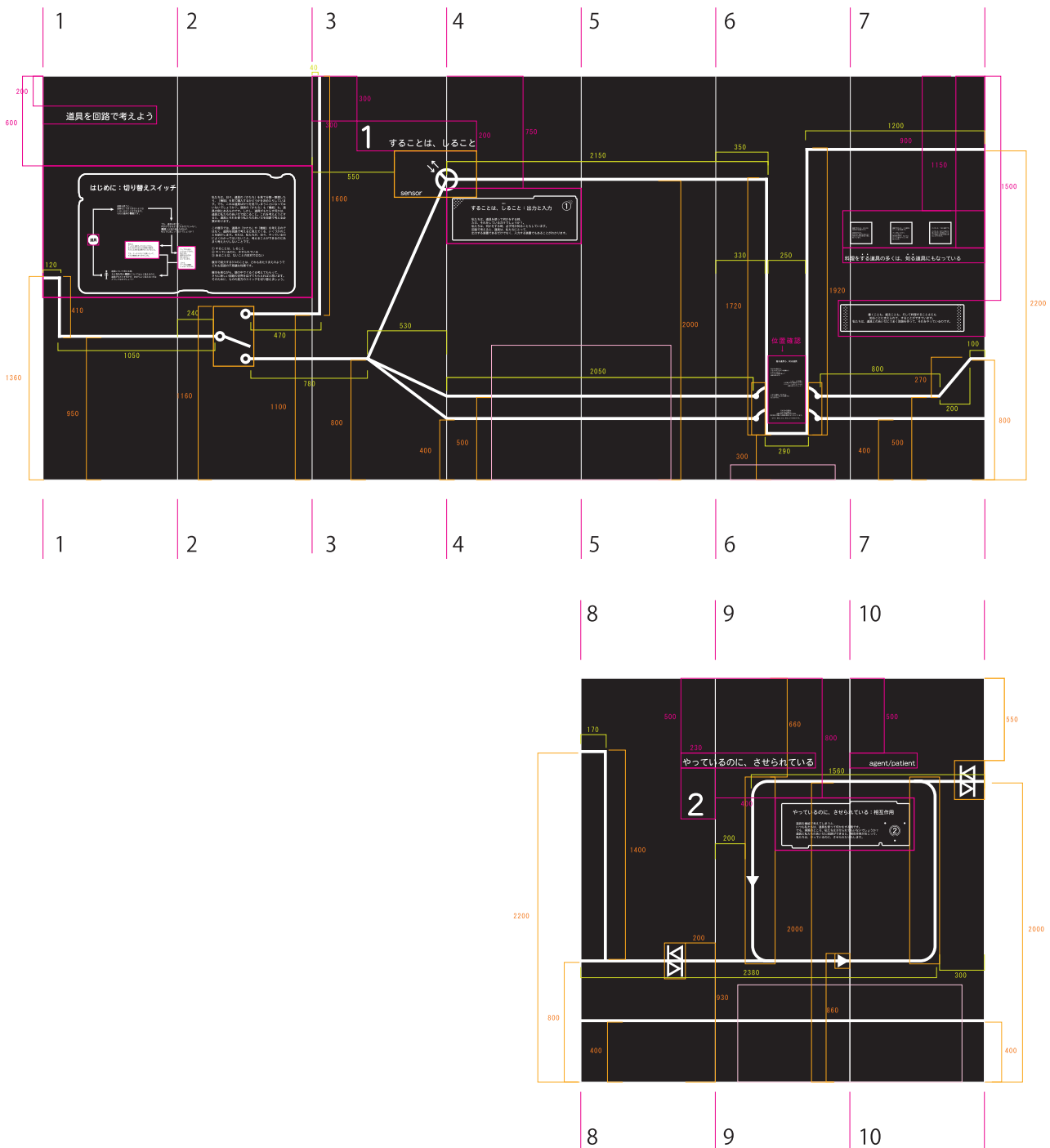
ひとつは、内容が支離滅裂で理解できない展示

もうひとつは、いつもの展示の設定とは違う設定の展示

展示を見て戸惑うことができるとしたら

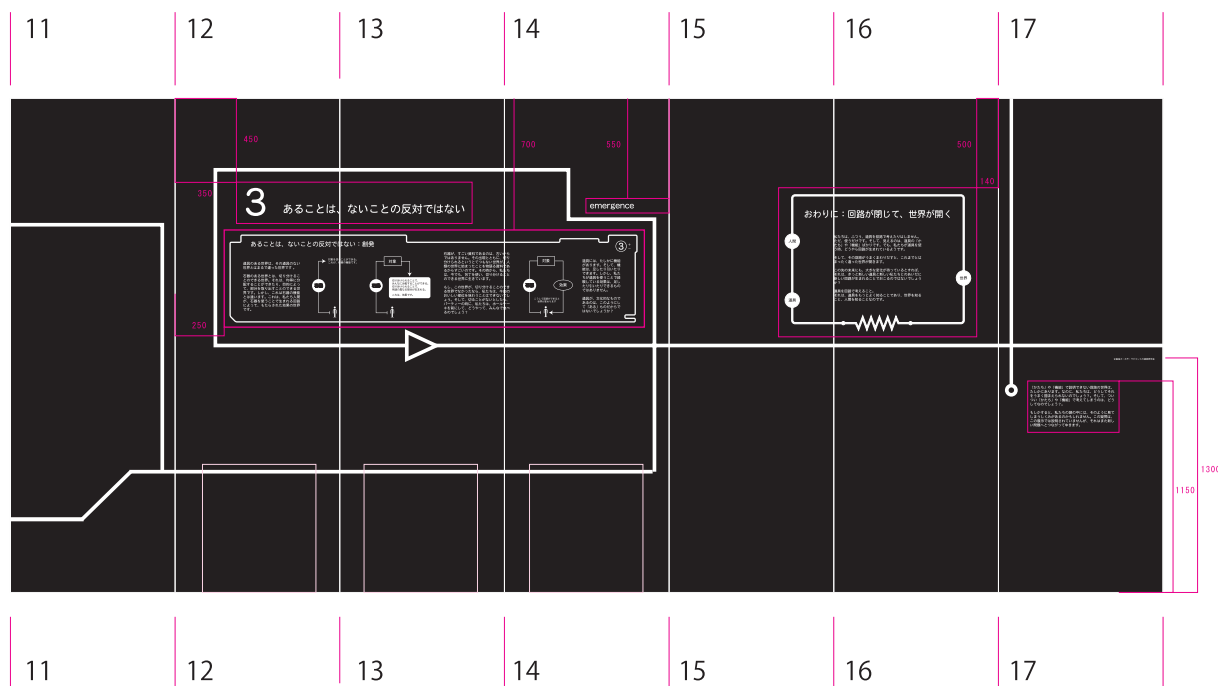
展示とはこうあるべきだと勝手に思い込んでいた設定に

気づくことができるのかもしれない。



設定を見えなくさせている設定

4



道具を理解しようとして、道具を描写し計測して説明する。
輪郭線を描いて捉まれば、道具は理解できるでしょうか？
それよりむしろ、道具と私たちとのあいだに線を引いてみる。
すると、輪郭に閉じ込められた世界が回路になって見えてくる。

今回の特別展を企画するプロセスは、展示の内容を考えるとともに展示そのものの形式を考えるものでもありました。ふつう、展示を企画しようとするとき、たいていは資料標本を選んで、それを説明するキャプションを用意します。たしかに、それによって展示はできるのですが、でもそれによってできあがるのはまさにそのような展示です。目的を持ちあわせていない人には、ある設定に縛られていることさえ見えなくなってしまう設定があるのではないのでしょうか？ 私たちホモ・サピエンスの道具研究会の目的は、展示をすることではありませんでした。私たちの関心はいつも「私たち人間が生活しているこの世界の不思議さに驚くこと」であり、そのおもしろさを言葉だけで説明するのは異なるかたちで多くの人に感じてもらうこと。なので、展示という形式を使って、そうした経験が起こるようにやってみているのです。そんなふうを考えれば、設定の設定が見えてきます。仕事や学問には、ある決まったやり方や考え方があり、そのやり方や考え方の内側にいけばひとまず仕事や学問はできます。でも、本当の意味で仕事や学問をするということは、そのやり方や考え方の外側に立って、日々の実務や思考の設定そのものと向き合うところから始まるのではないのでしょうか。

5

再起動

展示やここまでの数ページで示したように、私たちの日々の活動がどのような設定の上でおこなわれているのかは簡単に見えるものではありません。また、その活動に疑問や不都合を感じていない限り、このような設定を問題にすること自体、何の意味があるのかと疑問を持たれるものでもあります。効率的な実行を最優先に考える現代にあって、わざわざ「設定」が設定されているところにまで降りていって、その実行はどのような設定の上でおこなわれているのかなどと問うことは、効率化とは逆の歩みと思われがちです。

どんな生き物も、生き残るために特別な能力を持っていて、生き残るためにその能力を効率的に発揮します。私たちもまた、生き残るために、ある仕事のやり方、ある学問の考え方を身につけ効率的に作業を進めることに努力を尽くします。でも、人間は誕生した時からそんなことをずっと続けているのでしょうか？。数万年、数十万年とは言わなくても、数千年、数百年、もしかしたら数十年のあいだでさえ、人間は同じことなど続けていません。私たちは、最初から家をつくって定住するような生き物だったわけじゃないのです。農耕を始めたのだから、電子マネーで取引するのだから、それまでのやり方や考え方を変えてきた結果です。実際のところ、いつも人間がやっているのは、設定を見つめなおし、やり方を変え、考え方を換えるということでした。「設定」が設定されているところまで降りてゆき「再設定」を試みるからこそ、ホモ・サピエンスという生き物がずっとやってきた最も効率的な行動だったのではないのでしょうか。

その意味で私たちにとって設定は、決して見えないものとしてあるわけではありません。設定にまで降りていって物事を考えることは、生きていることがどのようなことか気づくことです。私たちの研究会は、人類学という営みを、研究のための研究としてひたすら実行するのではなく、こうした生きていることの「設定」へと降りゼロから考える技法と捉え、展示の新しい企画や教材の開発などの仕事において活用するだけでなく、ありふれた日常をおもしろがる実践としておこなっています。それは、生きている世界に気づき、生きなおす営みと言えるでしょう。日々、設定を見なおし、設定を更新してゆくこと。私たちの世界は、無限の深さをもって広がっているのではないのでしょうか。

Special Thanks

研究会というと、輪読をしたり、各自の研究成果を発表して批評しあったりすることが、一般的だと思います。しかし、私たちは、このように研究会を設定することをあえて踏みとどまり、むしろ日々の生活のなかで結論は出ていないけれども気になっていることや、ふと疑問に感じたたわいもないことを、コーヒーを飲みながら毎週話し合ってきました。なぜならば、このような目的化、意味化されていない会話のなかからこそ、じつは私たち人が生きているこの世界の不思議に気づき、新たな価値を生み出すヒントがあると考えているからです。今回の展示を作り上げるプロセスでも、博物館のなかで繰り広げられる何気ない会話やつぶやきが、次のステップへ進むきっかけとなりました。博物館に関わる教職員の方々、関係者の方々に深く感謝いたします。

もし博物館学芸員がコトラーの『マーケティング・マネジメント』を読んだら

手塚 朋子

はじめに

南山大学人類学博物館第2展示室——65.3 m²の小空間。此处では、「昭和を感じる」というテーマのもと、昭和時代に使用された家電製品などの日用品を展示している。筆者は此处で、2010年、3度の展示替を試みた。今回は本稿において3つの展示の概略を紹介するとともに、博物館のマーケティングについて考察して行きたい。

展示その1 (図1参照)

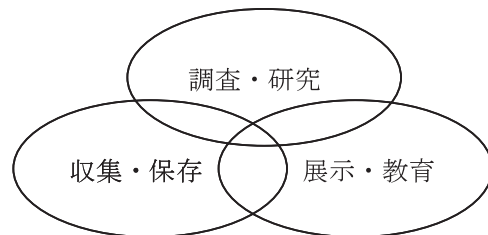
期間：2010年6～8月

展示型式：昭和40年代の夏休みのとある一日を描いたストーリー展示

この展示に於いては、キャプションの字句に細心し、印象深い言葉による可視化を図る。更にストーリー性を持たせ、夏休みの一日を表現することで、時間の進行や空間の変化からの始点を示した。ストーリーの主人公は10代に設定する。現在10代の子どもの親は、昭和40年代の資料を記憶し説明可能であると推測した所以である。親子での対話を生じさせ、資料の記憶を繋ぐということを目論見とした。その理由は、筆者が常日頃から学芸員のミッション(社会的使命)を、ヒトとモノとを「繋ぐ」ということであると確信しているからである。

そもそも、学芸員の仕事とは何である

う？ 博物館学に拠れば、調査・研究、収集・保存、展示・教育の3要素からなる。



当然、館により特化部分が異なる。

しかし、全ての館において、全ての仕事において、共通しているミッションが存在する。それは「繋ぐ」ということに他ならない。学芸員は時としてファシリテーターであり、コーディネーターであり、ディレクターでもあり得る。しかしいずれの場合においてもヒトとモノを、そして時にはヒトとヒトを「繋ぐ」役割を担う。「繋ぐ」というミッションは揺ぎ無いものである。

展示その2 (図2参照)

期間：2010年9～11月

展示型式：『人間的な、あまりに人間的な』というテーマのもと、人間とモノとの相違を観照(本質を見極める)する展示

人間が作り出したモノは、人間に似ているのか？ 資料のディスプレイを、人間の行動に擬えるように展示。他方、村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』より文章を引用し、人間とモノとの決定的違いの一例を示した。

「人間が愛しあうのと同じように？」
僕は首を振った。「人間とは違う。こ
ういうのはね、その場にとどまっている
感情なんだ。人間に対する感情とい
うのはそれとは違う。相手にあわせて
いつも細かく変化している。揺れ動い
たり、戸惑ったり、膨らんだり、消え
たり、否定されたり、傷ついたりする。
多くの場合意識的に統御することはで
きない。

展示その3 (図3参照)

期間：2010年12月～展示中

展示型式：『In The Showa Era 3つのた
とえばなし』というテーマにて「昔のモ
ノ」と「更に昔のモノ」を比較展示す
ると同時に、鑑賞法として3つのたと
えばなしを提示。

- 1 ストーリーによる鑑賞法 ～ 主人公
は、留守番する子ども。
- 2 プロ（肯定）とコントラ（否定）の両極
の視点による鑑賞法。
- 3 名言と資料を関連させた鑑賞法。

（言葉のちから）

現在も展示中である。読者に直接来館し
ていただければ、この上ない喜びである。

以上3つの展示を試みたわけだが、常に
心がけていたことがある。

過程（プロセスもしくは多角的多元的ア
プローチ）の提示である。

しろうとの思いつきは、普通、専門家
のそれにくらべて勝るとも劣らぬこと
が多い。実際、われわれの学問領域で
もっともよい問題またそのもっとも
すぐれた解釈は、しろうとの思いつき

に負うことが多い。（中略）しろうと
を専門家から区別するものは、ただし
ろうとがこれときまった作業方法を欠
き、したがって与えられた思いつき
についてその効果を判定し、評価し、か
つこれを実する能力をもたないとい
うことだけである。（『職業としての学
問』マックス・ウェーバー著 尾高邦
雄訳 岩波書店）

今までの日本の教育は、「過程」の提示が
不足していたのではないか。

昨年度2010年に、「もし高校野球の女子
マネージャーがドラッカーの『マネジメ
ント』を読んだら」が大ベストセラーにな
り、これを契機にドラッカーの著作物を読
破する人が急増するという現象が起きた
が、これは過程の提示による代表的成功例
と言えよう。

理解へ辿り着く道は1つではない。過程
の提示は博物館においても必要とされてい
ることではなかろうか。

もし博物館の学芸員がコトラーの『マーケ
ティング・マネジメント』を読んだら

最後に、博物館のマーケティングについ
て所見を述べたい。

しばしば一般の人にとって、博物館は閉
鎖的であるような印象を受ける。

実際私たち博物館職員が自覚を持たなけ
れば、専門集団の危険性つまり社会心理学
でいう集団決定の落とし穴に陥りやすい側
面を持っている。専門家が集団で決定す
れば、現実に対応しなくとも正しいと思
い込む危険性が存在する。

博物館が考えなくてはいけないことは、「いま、何が分かっているのか。それは、どのようにして分かってきたのか。」とともに、「いま、わかっていないこととは何か。」「今後、どのようなことがわかるようになるのか。」「今後、どのようなことがわかるようになるのか。」「どのようなことが分からなくてはいけないのか。」ということであり、それを解明し、実現するための「ビジョン」が必要である。

(『ミュージアム・マネジメント——博物館運営の方法と実践』「高度情報社会と博物館」沖吉和祐 1996年)

日本は現在、ポスト工業化時代にあるといわれる。モノに差異化を図らないと、生産は頭打ちとなる時代である。そうした時代では、発想の転換や新しい仕組づくりなどのアイデアが突破口を切り拓く鍵となる。技術革新のみならず芸術の転換期も、ステレオタイプから離脱し、パラレル・ワールドと出会うことで閉塞を打破してきた。博物館においても、これからはアイデアの時代ではなかろうか。

モノにどういったコト (=付加価値) をのせるかということがすべてを決定づけてしまう。付加すべき価値として注目すべきものの第一は「知」で、第二は「リレーションシップ」である。

(『ミュージアム集客・経営戦略』塚原正彦 コミュニティ・ブックス 2004年)

以上は将来的に全ての博物館に求められ

るものと予測している。以下より南山大学人類学博物館第2展示室に絞り込んだの考察を試みたい。

南山大学人類学博物館第2展示室が特化すべきものは何であろう? 一過性でなく将来も在り続けたいのならば、存在意義のある博物館でなければならない。そのためには、此処にしかない特性が必要である。特化のアクションに先立ち、他と違うところを明確にしなければならない。席卷図を作成し、太刀打ちできそうな市場へと特化すべきである。マーケティングにおいて、コトラーの説く「市場の細分化」と呼ばれる行為と通じるものがある。

第2展示室の主な資料は、昭和の家電製品である。

それでは昭和の家電製品を展示するミュージアムには他にどのようなものがあるか?

- 1 地域の博物館～豊富な展示資料。
【北名古屋市歴史民俗資料館】
- 2 複合的博物館
～一箇所でも複数の体験ができる。
【新横浜ラーメン博物館】
- 3 企業博物館～技術史、デザイン、広告
(CM、ポスター、キャッチコピー)
等多彩な資料。【東芝科学館】
- 4 デジタル・ミュージアム
～膨大な情報量。3D化進行中。
- 5 大学博物館
～学術的データ・ベースを所有。
【総合大学博物館】

【 】 代表例

コレクションを中核においた美術館活動を目指すためには、まずコレクションそのものが質、量ともに一定のレベルになれば、系統的な展示や魅力的な仕掛けを組み込んだ企画性を常設展示に盛り込むことは不可能である。

(『現代美術館学』「美術館のコレクション形成」中谷至宏 昭和堂 1998年)

上記は博物館にも当嵌する。

第一世代～資料の保存を運営の軸に



第二世代～資料の公開を運営の軸に



第三世代～市民の参加・体験を運営の軸に

(『博物館の理念と運営』布谷知夫 2005年 雄山閣) (『市民のなかの博物館』伊藤寿朗 1993年 吉川弘文館)

地域の博物館においては、現在第3世代の直中に在ると言えよう。しかし大学博物館においては、運営の軸を他のものに置いて社会への還元を計るべきである。

1995年、ユニバーシティ・ミュージアムの設置について文部科学省学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会の中間報告がなされて以来、大学博物館の数は増加の一途を辿っている。学術的データ・ベースの量に関しては、総合大学博物館が圧倒的に優位である。

他大学の博物館と差異化するためには、大学淘汰時代である現実を見据え、使われ方は有効か？ 記念碑的存在になっているか？ 似たようなデータ・ベースだけで

存在価値の理由になりうるか？ 等を論駁すべきであり、抽象的な言葉ではなく現実に沿ったミッションを明確にし、オリジナリティを築いて行くべきではなからうか。

私見を述べれば、知識のデータ・ベースはデジタル・ミュージアムに譲り、展示室においては知覚を特化する空間の研究を推進すべきであろう。情報化社会の中、デジタル・ミュージアムは今後躍進し続けるだろう。しかしデジタル・ミュージアムにおいては、3Dと雖も2次元的画面を見ているのに変わりなく、実際にその場所へ訪れて知覚する3次元の空間には及ばない。

展示には、見る流れ(順路・動線)があり、そのためには展示物と展示物との間隔(空間・間)の取り方が重要である。さらに、背景とモノとの関係、光線の強弱、文字解説の方法の適不適によって、同じ展示でも、大いに異なった印象(学習効果)を観客に与えることは、様々な調査でも実証されている。知的好奇心と言っても、ただそれを喚起するだけではどうしようもない。それを満足させるには、どうすればよいのか、どの方向に向かってどう探求すればよいのかを指示することも必要である。(『博物館学』倉田公裕 矢島國雄 東京堂出版 1997年)

大学が蓄積してきた研鑽は、術学的なものに限らない。発想の、或いは人生の、道標が求められているのではなからうか。そして、嚆矢を投げかけるのは、大学博物館こそ相応しいと筆者は信じている。

引用文献

- 村上春樹 1988 「ダンス・ダンス・ダンス」。
マックス・ウェーバー 尾高邦雄訳 1980 「職
業としての学問」岩波書店。
沖吉和祐 1996 『ミュージアム・マネージメ
ントー博物館運営の方法と実践』 「高度情報
社会と博物館」東京堂出版。
塚原正彦 2004 「ミュージアム集客・経営戦
略」 コミュニティ・ブックス。
中谷至宏 1998 『現代美術館学』 「美術館のコ
レクション形成」昭和堂。
布谷知夫 2005 「博物館の理念と運営」雄山
閣。

伊藤寿朗 1993 「市民のなかの博物館」吉川
弘文館。

倉田公裕 矢島國雄 1997 「博物館学」東京堂
出版。

参考文献

フィリップ・コトラー 2001 「マーケティン
グ・マネジメント・ミレニアム版」ピアソ
ン・エデュケーション。

P. F. ドラッカー 上田惇生訳 2001 「マネジ
メント・基本と原則」、2000 「プロフェッショ
ナルの条件」ダイヤモンド社。

(南山大学人類学博物館臨時職員)

How to Manage a Museum?

TEZUKA Tomoko

The Exhibition Room No. 2 of the Anthropological Museum of Nanzan University is now used to display commodities (especially home electrical appliances) in the Showa era. The main theme here is connecting people (visitors) with materials: using attractive captions and showing a 'story' in order to help visitors understand and think situations changing with the times. In the case of museum display, one of the most important issues for us is how to show the 'process' or 'multiple approaches', and this should be very important for education in general. Education is one of the functions every museum has, and this would be a clue to consider the survival of university museum. Since the government had released the interim report in 1995, the number of university museum is still increasing. To survive the situation, it is important to gain the originality, and in the case of Nanzan University, the collection of Room No. 2 can be used for such purposes. Today it is inevitable to consider the management of university museum. Subdivision of market, that is, making of originality of collection and its display will be the essential point for us.



図 1 2010 年夏季展示
 『時は昭和 40 年代、頃は夏休み、そして一日がはじまる』

1.
はなしあい
An argument



2.
無防備で傷つきやすい心
I'm naked and far from home



3.
追いかける & 逃げる
The pursuer & The fugitive



4.
ひとりぼっちの世界
Solitude



5.
他者をうけいれる
I would accept you



6.
伝える言葉
A message



7.
調和と旋律
もしくは
相互作用



図2 2010年秋季展示
『人間的な、あまりに人間的な』



図3 2010年末～現在展示中
 『In The Showa Era ～3つのたとえばなし』

平成 23 年 3 月 16 日 印刷

平成 23 年 3 月 22 日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第 29 号

編集・発行人 南山大学人類学博物館
466-8673 名古屋市昭和区山里町 18
TEL 052(832)3111 (代表)

印 刷 株式会社クイックス
456-0004 名古屋市熱田区桜田町 19-20
TEL 052(871)9190